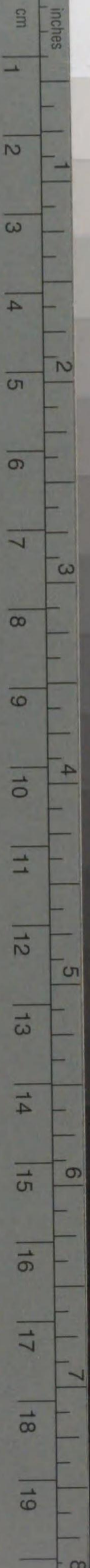


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

- A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



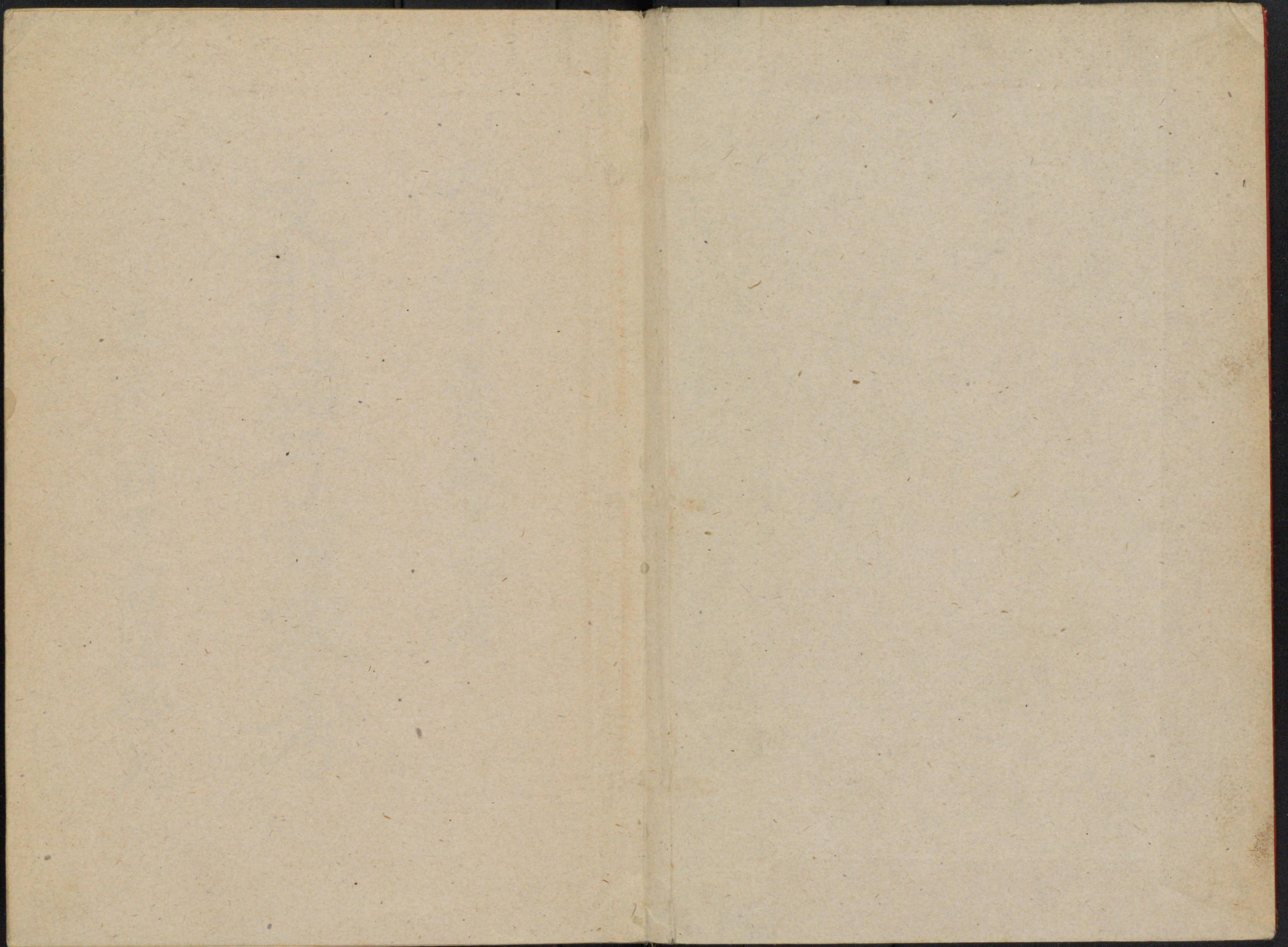
# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]

612  
0

612-110  
1200501534787

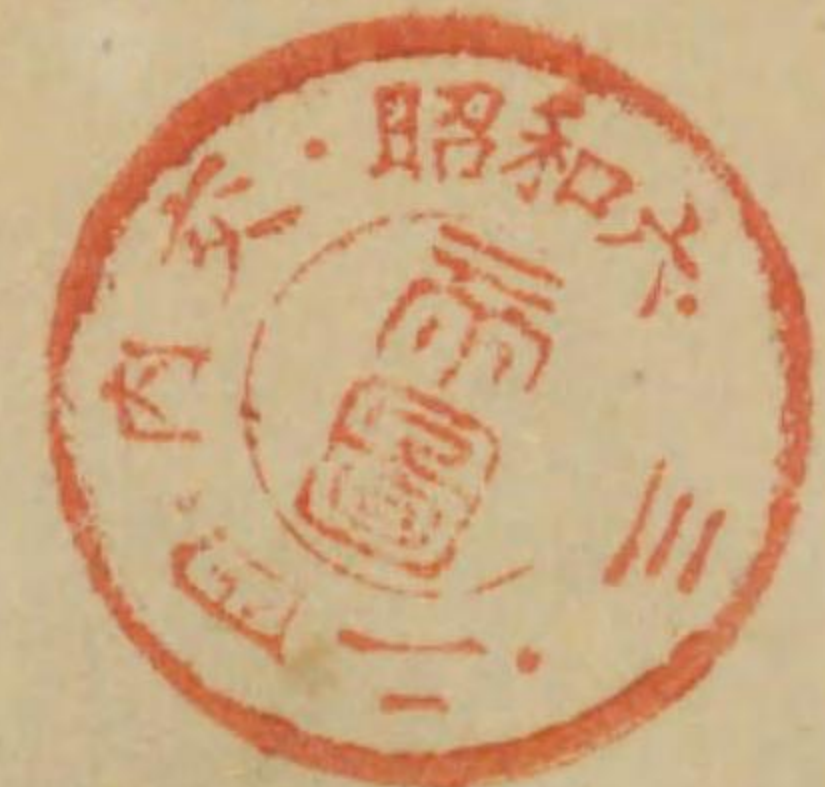


文學博士兒島獻吉郎著



支那諸子百家考

東京 目黒書店發兌



612-110

敘

諸子百家の言を孔子の道に區別して、これを異端視し、これを邪說扱にするものは、前に孟軻荀卿あり、後に董仲舒あり。こゝに於て周末已に春秋を詩書易禮樂に伍して六經と稱せしこと、莊子の天運篇に見ゆ。しかも天運篇は莊周の自作に非ざれば、戰國時代に果して春秋を經と看做せしや否や疑問なり。たゞ荀子の勸學篇に春秋を詩書禮樂に比並して經と稱すれば、當時孔子の書を推尊して經と曰ひしを知るべし。況んや漢代に春秋を五經に列し、唐代に論語を九經に列し、宋代に孟子を十三經に列するに於ては、孔孟の書を特別優待して、子より經に昇格せしむるものなりしも、他の儒家の書を依然として諸子中に置くは、果して衡平の見と謂ふべきか。

子は人の嘉稱、師の尊稱なれば、猶ほ夫子といふが如し。論語に孔子を子と稱し、また夫子といへば、孔子も當然子部に入るべし。孟子は固より諸子に屬せり。即ち孔孟の書はこれを子部に保留するも、決して其の名譽を減ずべきに非ず。同時にこれを經部に昇格するも、亦決して其の價值を高むべきに非ず。磨して磷せず、涅して緇せず。聖賢の書はこれを何所に置くも、永久に易らざる堅實性あるものなるを知らざるべからず。

經史子集の四部を文學上より觀察すれば、諸子の價值は集の次に在り。雖も、經史の上に在り。若しこれを哲學及び倫理學上より品隲すれば、諸子の位地は經史集を凌駕して第一位に在り。何となれば諸子は孔老孟莊荀韓を首め、漢魏以後歴代の學者の著作を總括するものなればなり。随つて宋元明の理氣性命説も皆この中に屬せり。即ち諸子百家の言は決して

これを異端視し、これを邪説扱にすべからず。支那文學の本流は皆この中に在り。これ予が經に先だちて、この著を成す所以なり。

昭和五年十一月

兒島獻吉郎撰

## 發 凡

一、孔子は聖人なり。聖人の作を經と曰ふ。而して今茲に孔子を諸子に冠せし所以は、孔子を卑下するに非ず、經を侮蔑するに非ず、諸子に敬意を表して異端視すべからず、邪說扱にすべからざればなり。

二、已に孔子を掲げて孟子に及ばず、已に荀子を探りて韓非子に及ばざるは、他日孟軻、韓非、揚雄、王通以下、宋の濂洛關閩の諸子百家を續篇として發行せむと欲すればなり。

三、予嘗て仙臺、鳥取、松江、福島、高田、京城の孔子祭典會に臨み、また福岡、宮城、栃木、岐阜、諸縣の講習會、及び學校、學會、個人、團體の聘に應じて、孔老以下の諸子百家に對し、その學術、その性行、及びそ

の功德を述べしもの、凡そ數十回に達せり。

本書は其の舊稿に就きて、再三改訂を加へしものなれども、詳略繁簡その宜しきを得ざる所なきを保すべからず。讀者これを恕して咎むるなく、これを指摘して潤色に吝ならざれば、著者の悦、何物かこれに加へむ。

四、孔子考は主として釋奠の時に講演せしものにして、稿を起すこと、前後數回に及びぬ。故にこれを通讀するに、字句に重複繁冗の弊最も甚だしければ、改訂の際、務めて勇斷を以て繁を去り冗を剪り、舊稿の三の一を削減せり。今にしてこれを一覽すれば、角を矯めて牛を殺す嫌なきに非ず。讀者これを諒せよ。

五、荀子考に於て、彼の文章の特色を論じて、對偶の妙を説明せしも、未だ彼の比喩の妙を發揮するに至らず、事故の爲に筆を擱きぬ。これ亦諒解を讀者に乞ふ所なり。

六、七書考、鬼谷子及び新語考は、並に往年國民文庫の國譯漢文大成に其の書の解題として掲載せしものなるを、今茲に鈔録せしものなり。

七、本書刊行に關して、諸橋博士の力を藉るもの多大なり。茲に謹みて博士の友誼の厚きを感謝す。

昭和五年十一月

熊本京町臺望蘇亭に於て

著者識す

目次

第一篇 孔子考

第一章	人格の偉大	一
第二章	東洋の大聖人	五
第三章	世界の大聖人	一三
第四章	彼の學問修養	一七
第五章	彼の徳化徳望	二三
第六章	孔子と四科上	二六
第七章	孔子と四科下	三四
第八章	論語と春秋上	四三
第九章	論語と春秋下	五一
第十章	彼の子孫世系	六五

目次



第十一章	餘論一	七五
第十二章	餘論二	八〇

第二篇 老子考

第一章	彼の姓氏名字	八八
第二章	彼の傳記	九七
第三章	彼の時代	一〇〇
第四章	道德經の内容一	一一一
第五章	道德經の内容二	一二三
第六章	道德經の文章	一四〇
第七章	後世に及ばず彼の勢力	一五六

第三篇 孔老二派の思想衝突

第一章	序論	一六〇
第二章	彼等二子の主張	一六二
第三章	彼等二子の生卒	一六四
第四章	彼等二子の初對面	一六七
第五章	彼等二派の盛衰	一七三
第六章	漢代の二派衝突	一七五
第七章	魏晉以後の二派衝突	一八五

第四篇 墨子考

第一章	序論	二〇四
第二章	彼の年代	二〇六
第三章	彼の生地	二二二
第四章	彼の學統	二二五
第五章	彼の學說一	二三〇
第六章	彼の學說二	二三四

第七章	彼の學說三	二二七
第八章	彼の學說四	二三四
第九章	彼の學說五	二三六
第十章	彼の學說六	二三七
第十一章	彼の文章	二四〇

第五篇 莊子考

第一章	彼の經歷	二五四
第二章	彼の時代	二五五
第三章	彼の性格	二六〇
第四章	彼の學統	二六二
第五章	彼の目的	二六七
第六章	彼の學說	二六九
第七章	彼の文章	二七八

第八章 後世に及ぼす彼の勢力……………二八一

第六篇 荀子考

第一章	彼の學統	二八五
第二章	彼の學說一	二九二
第三章	彼の學說二	二九八
第四章	彼の對 <sub>三</sub> 先秦諸子 <sub>一</sub> 觀	三〇二
第五章	彼の文章	三〇九

第七篇 漢初六家の思想及び系統

第一章	總論	三三四
第二章	道家	三三九
第三章	儒家	三三三
第四章	墨家	三三七

目次

第五章	陰陽家	三九二
第六章	法家	三四七
第七章	名家	三五二

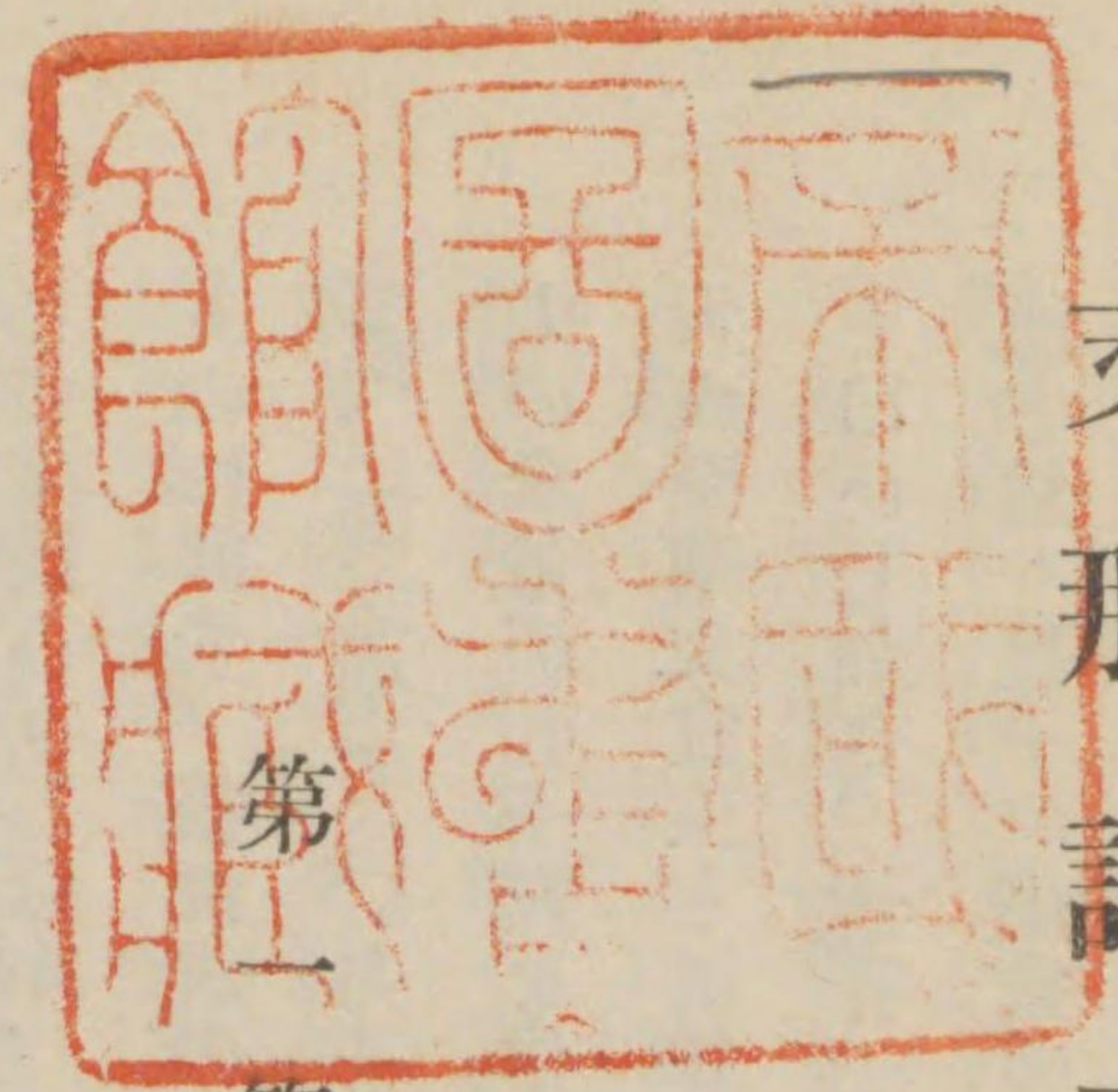
六

第八篇 七書考

第一章	兵家と七書	三五五
第二章	孫子	三五七
第三章	吳子	三六〇
第四章	司馬法	三六三
第五章	尉繚子	三六六
第六章	六韜	三六八
第七章	三略	三七二
第八章	李衛公問對	三七三

支那諸子百家考

文學博士 兒島獻吉郎著



第一篇 孔子考

第一章 人格の偉大

天下に偉人多し。古代にもあり、今代にもあり、西洋にもあり、東洋にもあり、我が日本に於ても近世偉人傳數卷を著せるものあり。近世に於ける偉人の多數なること已にかくの如し。況んや上世。中世に於てをや。然れども偉人は元と凡人に對する稱呼なれば、解して非凡の意義と爲さざるべからず。非凡の意義は、必ずしも極端にして奇矯なる言語行動を指すものに非ずして、道徳的に人格の偉大なるを條件とす。道徳的に人格の偉大とは、その人の道、その人の徳が、世道人心を支配する力の

偉大にして廣遠なるを指す。この意味に於て吾人は孔子を偉人中の偉人と稱するに躊躇せざるなり。何となれば大成至聖の孔子は、單なる偉人の二字を以て彼の盛徳を形容するに足らざればなり。蓋し凡人を單位としての偉人は、古今東西に比類多しと雖も、偉人を單位として特に傑出したる偉人は、即ち所謂偉人中の偉人にして、時間的にも空間的にも多く比倫を見ざる所なり。

孔子以前に堯・舜・禹・湯・文・武・周公の七聖あり、これ聖人として時を得、志を得、帝王として徳を立て功を立てしものなり。しかも宰我は孔子を稱して堯舜よりも賢ると曰ひ、子貢・有若も孔子を贊して生民ありし以來、夫子より盛なるものあらずと曰ひしは、必ずしも師弟の情、その好む所に阿るものに非ず。後世唐の皮日休が孔子廟碑を作りて、我先師夫子聖人也、帝之聖者曰堯、王之聖者曰禹、師之聖者曰夫子、堯之徳有<sub>レ</sub>時而息、禹之功有<sub>レ</sub>時而窮、夫子之道久而彌芳、遠而彌光と曰ひ、宋の米芾が孔子贊を作りて、孔子以前、既無<sub>二</sub>孔子<sub>一</sub>、孔子以後、更無<sub>二</sub>孔子<sub>一</sub>と曰ひ、元の成宗が孔子を大成至聖文宣王と追尊して、先<sub>二</sub>孔子<sub>一</sub>而聖者、非<sub>二</sub>孔子<sub>一</sub>無<sub>二</sub>以明<sub>一</sub>、後<sub>二</sub>孔子<sub>一</sub>而聖者、非<sub>二</sub>孔子<sub>一</sub>無<sub>二</sub>以法<sub>一</sub>と曰ひし如き、皆孔子を聖人中の至聖なるものと爲せるものなり。況んや孔子と同時に老子が道家の祖と爲り墨子が墨家の祖と爲りしに於て、皆一代の偉人ならざるはなし。しかも老子が智の人にして情に於て足らず、墨子が意の人にして情を矯むるは、孔子の智情意の最も圓滿に發達せるに及ばず。

故に老墨二子が世道人心を支配する力は、到底孔子の徳化の最も偉大なるに若かず。これ予が孔子を仰宗して、偉人中の偉人なりと謂ふ所以なり。

孟子嘗て孔子の聖を稱して集大成と曰ひぬ。これ後世孔子を大成至聖と謚し、聖廟を大成殿と稱する所以なり。顧ふに集大成とは本と音楽上の用語にして、金聲に始まり、玉振に終はり、その間に五聲相和し、八音能く諧ひて、倫を奪はず、序を亂さざるをいふ。而して孟子これを取りて、孔聖を稱賛し、且つこれを説明して、金聲とは條理を始むる謂にして、玉振とは條理を終はる謂なり。條理を始むるは智の事にして、條理を終はるは聖の事なりと曰へり。試にこれを孔子の一生涯に徴するに、論語爲政の子曰吾十有五而志<sub>二</sub>于學<sub>一</sub>の一章は、孔子一生の學問道徳の自敘傳と看做すべく、起首の吾十有五而志<sub>二</sub>于學<sub>一</sub>は、孟子の所謂條理を始むる智の事なり。孔子七十年の事業は、實にこゝに端を發す。孔子已に學に志してより、天縱の聖を以て切磋琢磨、憤を發して食を忘れ、六藝を修め、六經を述べ、禮儀三百、威儀三千、學びて厭はざるは智なり、教へて倦まざるは仁なり、仁智に加ふるに更に勇を以てし、三徳已に立ち、五倫已に修まれば、聖徳已に兼備せるものなり。蓋し孔子は年十五に學に志してより、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順ひ、遂に七十にして心の欲する所に従ひ、矩を踰えざる聖域に入りしは、所謂不<sub>レ</sub>勉而中、不<sub>レ</sub>思而得、從容

中道聖人の程度に到達せしものなり。これ孟子の所謂條理を終はる聖の事ならずや。その間或はこれを徳行に形はし、或はこれを政事に施し、或はこれを言語に發し、或はこれを文學に見はし、視聽言動、一として禮ならざるなく、出處進退、一として義ならざるはなし、猶ほ金聲して條理を始め五聲相和し、八音能く諧ひ、倫を奪はず、序を亂さず、遂に玉振して條理を終はり、五聲八音、一時に歇みて、樂こゝに大成するが如し。則ち孔子の盛徳は管に人格の偉大なるのみならず、また人格の圓滿にして、三徳を兼備し、五倫を兼善し、禮を老聃に問ひ、樂を萇弘に問ひ、琴を師襄に學びて、六藝に精通し、詩書を雅言し、易を學び、禮を學び、春秋を作りて、六經を述作し、三百の禮儀、三千の威儀、一として可ならざるはなく、小は修身齊家より、大は治國平天下に至るまで、勉めずとも思はずとも、從容として道に中らざるはなし。これ集大成の意義なり。

また孟子は孔子を伯夷・伊尹・柳下惠に比して、伯夷は聖の清を得、伊尹は聖の任を得、柳下惠は聖の和を得たるものにして、孔子は聖の時を得たるものと爲せり。聖の時とは、孔子が出處進退に際して、速にすべき時は速にし、久うすべき時は久うし、處るべき時は處り、仕ふべき時は仕ふる時中性あるをいふ。こは伯夷・伊尹・柳下惠が各々一徳に執着し他面を忘却するに比して、集大成せるものに庶幾し。況んや中庸に孔子を贊して、堯舜を祖述し、文武を憲章すと曰ひしに於ては、仲尼能く四聖の道を集めて大成せるを道破せしものならずや。況んや荀子解蔽篇に孔子の徳は周公と齊しく、名は禹・湯・武の三王に並ぶとて、孔子仁智且不蔽、故學亂術一足以爲先王者也、一家得周道、舉而用之、不蔽於成積也、故徳與周公齊、名與三王並と曰ひしに於て、亦孔子の集大成を認めしものならずや。

## 第二章 東洋の大聖人

若し其の教が博く一國に行はれ、其の道が永く百世に傳はり、上は帝王より、下は士庶人にまで、信仰を博し、敬虔を受け、天長地久、帝王の師として歳時に廟祀せらるゝを、偉人なり、聖人なりとすれば、予は孔子を以て、支那に於ける絶代の偉人といはむとす。況んや孔子の道が遠く四域の外に傳播し、東は朝鮮を経て、日本に波及し、南は安南を風靡するに於て、予は孔子を目して東洋の大聖人といはむとす。況んや又孔子の道が歐米に流行し、英・佛・獨・米・伊・墺の學者達の孔子研究熱が歲に月に熾烈にして、論語の翻譯と同時に孔子の傳記及び孔子の教義を敘述するもの、殆ど枚擧に遑あらず、論語の價值が新約全書と競争し、孔子の聲望が釋迦基督と頡頏せむとするに於て、予は孔子を

目して世界の大聖人といはむとす。

支那は革命國なり。歴代の王室は内憂外患により、しばしば革命の風に吹き荒み、昨日まで榮華の酒に長夜の飲を貪りし萬乗の身も、今日は反つて濁酒一杯、僅に一日の勞を慰する匹夫匹婦の境遇を羨まざるを得ず。故に君臣地を易え、姬嬴相踵ぎて、歴代二十餘姓。國祚の最も長きは周の八百七十三年にして、最も短きは秦及び五代の十年乃至十五年なり。最も長き周は三十七世にして亡び、最も短き秦及び五代は二世にして亡びぬ。然るに孔子は素王として百世に矜式せられ、文宣王として唐以後に仰宗せられ、孔子の子孫は世々衍聖公として宋以後に崇禮せられ、孔子の血統は今に至るまで七十餘世、瓜瓞綿々として金甌缺くるなし。仁者は壽長く、聖人に後あり。これ宋の邵雍が天子以四海爲家、孔子以萬世爲家と曰ひし所以なり。則ち孔子一家を歴代の王室に比して、孰が吉凶孰が榮辱、智者を嫉たずして知るべし。

孔子は王者に非ず。孔子の道は王者の道に非ず。しかも王者は孔子の道を取りて爲政の大經と爲さざるはなし。故に孔子を先聖とし、先師として、或は畫像を爲り、或は木像を作り、或は塑像を造り、或は銅像を鑄、或は木主を製し、歴代の天子或は闕里に幸して先聖を祀り、或は大學に於て親ら釋尊を行ふのみならず、孔子に公爵又は王號を追贈し、孔子の冕服に十二旒十二章を施すものさへあるに至る、皆景仰の至誠に出でざるはなし。

一、周の敬王四十二年に魯の哀公が孔子の故宅に廟を立て、食邑百戸にこれを守らしむ。これ諸侯として孔子を祭る始なり。

二、漢の高祖十二年に高祖魯を過ぎ太牢を以て孔子を祀りしは、英雄人を欺く手段より出でしものなるべきも、天子として孔子を祀るはこれを始とす。

三、漢の平帝の元始元年に孔子を追諡して褒成宣尼公と曰ひしは、孔子の諡號の始なり。この時、王莽矜僞を以て天下の聲望を博せむと欲せしかば、明の丘濬の大學衍義補に此後世尊崇孔子之始、夫平帝之世、政出王莽姦僞之徒、假崇儒之名以收譽望、文姦謀、聖人在天之靈、其不之受也必矣と曰ひしもの當れり。

四、後漢の光和元年に靈帝詔して、鴻都門學を置き、先聖及び七十二弟子の像を畫かしめしは、孔子の畫像の始なり。これより先き前漢の景帝の世、蜀の太守文翁創めて學宮を郡城の南に立て、石室を爲りて、孔聖及び七十二賢の圖を壁間に畫きしも、こは地方官の事にして、天子の事に非ざるなり。

五、魏の正始二年に齊王始めて釋奠を行ひ、顔回を以て孔子に配せり。後ち正治五年及び同七年に

釋奠を行へり。大學衍義補に正始七年を以て釋奠の始と爲せるは謬なり。

六、宋の文帝の元嘉二十二年の釋奠に裴松の議を採りて、六佾の舞及び軒懸の樂を用ふ。

七、北魏の孝文帝の太和十六年に孔子の諡を改め文聖尼父と稱せり。

八、東魏の興和三年に袁州の刺史李仲挺始めて孔子の塑像を作れり。明の宋濂が孔子の塑像は開元八年の制に因ると曰へるは、非なり。

九、北齊の天保元年に文宣帝始めて春秋二仲に釋奠を行ふ制を立て、且つ三獻の禮を定む。

十、北周の大象元年に宣帝は路門の學に幸して釋奠を行ひ、孔子を鄒國公に追封せり。

十一、隋の開皇中、文帝詔して太學は每歲四時仲月上丁に釋奠し、州縣學は春秋二仲に釋奠せしむ。

十二、唐の武德七年の釋奠に周公を以て先聖と爲し、孔子を以て先師と爲せしも、貞觀二年の釋奠には孔子を先聖と爲し、顏回を先師と爲せしは、房元齡の議を採りしものなり。後ち高宗の永徽中に復た周公を先聖と爲し、孔子を先師と爲せしも、顯慶二年に高宗は長孫無忌の議を用ひて、復た孔子を先聖と爲し、顏回を先師と爲せり。

十三、唐の太宗、貞觀十一年に孔子を尊びて宣父と稱し、同十四年の釋奠に祭酒孔穎達に孝經を講せしめ、同二十一年の釋奠に左丘明以下二十二人を配享せしむ。これ講經の式及び先儒配享の權輿なり。

十四、則天武后の天授元年に周公を封じて褒徳王と爲し、孔子を隆道公と爲せり。

十五、唐の玄宗の開元中に始めて釋奠に宮架の樂を用ふ。これ陳陽の樂書に孔子人臣也、用<sub>三</sub>軒架<sub>一</sub>足<sub>三</sub>以爲<sub>三</sub>禮、用<sub>三</sub>宮架<sub>一</sub>則過矣と曰ひしものなり。しかも玄宗は人臣として孔子を待遇せず、開元二十七年に詔して孔子に文宣王を追諡し、顏回に兗國公を追封し、閔損以下九人を封じて侯と爲し、曾參顛孫師等六十七人を封じて伯と爲せり。これ孔子及び弟子を王・公・侯・伯に封ずる始なり。

十六、宋の大中祥符元年に眞宗曲阜に幸し、文宣王の廟に謁し、加諡して玄聖文宣王と曰ひ、父の叔梁紇を追封して齊國公と爲し、母顏氏を魯國太夫人と爲し、翌年に費侯閔損以下十哲を公と爲し、郈伯曾參以下七十二弟子を侯と爲し、左丘明以下十九人を伯と爲し、帝自ら文宣王の贊を製し、また群臣に詔して七十二弟子の贊を撰せしむ。

十七、宋の眞宗の太中祥符五年に孔子の諡を改め、至聖文宣王と曰へり。

十八、宋の神宗の元豐六年に孟子を封じて鄒國公と爲し、翌年文宣王に配祀せり。これ孟子配享の始なり。

十九、宋の高宗の紹興十年詔して釋奠を大祀と爲し、社稷の祭と同格にせり。

二十、宋の徽宗の崇寧四年太常寺に詔して文宣王廟像の冠服制度を考正せしめ、王者の冕十二旒、袞服九章を用ふ。これ聖像に天子の冕旒を擬する始なり。この時始めて曾子子思を以て孔子に配享せり。

二十一、元の成宗の大徳十一年に至聖文宣王に加號して、大成至聖文宣王と爲せり。

二十二、元の文宗の至順元年に顔回を復聖公、曾參を宗聖公、孔伋を述聖公、孟軻を亞聖公と稱す。これ四聖の稱號の始なり。

二十三、明の太祖の洪武四年に釋奠の祭器禮物を更定せり。初め孔子の祀像は高座に設けて、器物は座下に陳せり。これ蘇軾が俯伏匍匐而就食の議ありし所以なり。しかも其の由來已に久しく、唐宋より元を歴て改むるものなかりしに、こゝに至りて高案を爲り、籩豆簠簋を一切撤去し、代ふるに磁器を以てせり。

二十四、明の世宗の嘉靖九年に文廟の祀典を釐正し、孔子の塑像を撤去し、代ふるに木主を以てし、至聖先師孔子神位と題し、大成殿を改めて先師廟と爲し、四配を復聖顔子、宗聖曾子、述聖子思子、亞聖孟子神位と稱し、十哲以下の及門弟子を先儒某子神位と稱し、左丘明以下を先儒某子神位と稱し、孔子の木主は高二尺三寸七分、闊四寸、厚七分、朱地に金書す。四配の木主は高一尺五寸、闊三寸二分、厚五分、十哲以下の木主は高一尺四寸、闊二寸六分、厚五分、左丘明以下の木主は高一尺三寸四分、闊二寸三分、厚四分、俱に赤地に黒書せり。後ち嘉靖十年、同十二年、同十三年、隆慶元年、同四年、萬曆四年、天啓五年、崇禎二年、同六年、同十四年の釋奠は皆この祀典に遵由せるものなり。二十五、清は概して明の祀典に由れるものにして、崇徳元年、始めて孔子の廟に祭り、顔子、曾子子思子、孟子を配享し、順治二年に文廟の諡號を定めて、大成至聖文宣先師孔子之位と稱し、順治十四年更に改めて至聖先師孔子神位と號せり。

二十六、清の康熙八年に帝親ら萬世師表の四大學を書して、これを曲阜の聖廟に掲げしむ。

二十七、清の世宗の雍正元年に孔子の先世五代を追封して王爵に列せしむ、肇聖王、裕聖王、詒聖王、昌聖王、啓聖王これなり。

かくの如く釋奠は魏の正始以後、帝王の年中行事として、太學に於て歳時舉行せし大祀なり。こは獨り支那の帝王のみが然るに非ず。朝鮮に於ても然り。日本に於ても亦然り。伊呂波字類抄、及び枕草子に釋奠を「シヤクテン」と稱し、簾中抄、及び和訓栞に「サクテン」と稱せしは、古來釋奠の稱呼一定せざりしを知るべし、同時に釋奠の流行の久遠なりしを知るべし。顧ふに日本の釋奠は文武天皇の大寶元年二月四日丁巳に大學寮に於て釋奠せしを權輿とす。これ隋唐以後に行はれし春秋二仲上丁の制に由りしものなり。大寶令に凡大學國學、毎年春秋二仲之月上丁釋奠於先聖孔宣父と曰へる



これなり。孔宣父とは、唐の貞觀の追諡に遵ひしものなり。後ち數十年間、佛教甚だ盛にして、儒教振はざりしも、吉備眞備歸朝するに及び、制度文物一にこれを唐に取りて、大に儒教を振興せしかば、稱徳天皇の神護景雲元年二月丁亥に帝親ら大學に幸して釋奠を行へり。續日本紀に吉備眞備の功を稱して、先是大學釋奠未備、大臣依<sub>レ</sub>稽禮典、器物始修、禮容可<sub>レ</sub>觀と曰へる、これなり。翌年帝また大學助教膳臣大丘の奏議に由り、孔宣父の稱を改めて、文宣王と曰ひしは、玄宗の開元の追諡を採りしものなり。これより天皇または皇太子が毎年大學寮に釋奠するのみならず、五畿七道に令して釋奠を行はしめしことは、仁明天皇の承和七年、淳和上皇の崩御に、令<sub>三</sub>五畿内、七道諸國、諒闇之間、停<sub>三</sub>釋奠祭と續日本後記にあるに由りて知るべし。故に承和以後應仁に至る六百三十年間は、時に盛衰ありと雖も、大學寮の釋奠は嘗て廢絶することなかりき。その儀式に晴儀あり、雨儀あり。雨儀は雨天に行はる、略式にして、晴儀は晴天に行はる、正式なり。故に晴儀は籩豆簠簋を具備して、三獻の禮あり講經の式あり、皆唐の遺制を採りしものなり。たゞ内論義とて、秋期釋奠の翌日、座主博士が問者を引きて紫宸殿上に昇り、昨日講せし經の疑義に就き、一々論議せしむることありしは、隋唐の制に會て見ざる所なり。これ仁明天皇の時に始まりしものにして、延喜式に凡釋奠、座主博士引<sub>三</sub>問者等、候<sub>二</sub>於内裏、隨<sub>レ</sub>召昇殿一一論議と曰ひ、續日本後記に承和五年八月丁亥釋<sub>三</sub>奠文宣王<sub>二</sub>也、戊子天皇御<sub>三</sub>紫宸殿<sub>二</sub>召<sub>三</sub>大學博士學生等十一人、遞令<sub>レ</sub>論<sub>三</sub>難昨日所<sub>レ</sub>講尙書之義<sub>二</sub>と曰ひ、江吏部集に昔漢明帝聚<sub>三</sub>諸儒於<sub>二</sub>白虎觀、講<sub>三</sub>論五經疑義、我朝承和聖主昨當<sub>三</sub>仲秋釋奠、翌日召<sub>三</sub>明經儒士並弟子等於<sub>二</sub>紫宸殿、解<sub>三</sub>滯疑、以成<sub>三</sub>流例、余列<sub>三</sub>侍臣、傾<sub>レ</sub>耳感<sub>レ</sub>心と曰へるが如き、皆我朝の特制なるを知るべし。

然るに應仁以後に大學の釋奠は一旦廢絶せしも、金澤文庫のみは、尙ほ繼續して之を行へり。徳川氏の世に至り、寛永十年に久しく絶えし釋奠を忍岡の廟に行へり。後ち忍岡の廟を湯島に遷し、孔子誕生の地名を取りて昌平坂聖堂と稱し、春秋二仲上丁に於て行ふを例とし、遂に今日に至れり。その他、江戸以外に於て釋奠を行ひし藩學は足利學校を首めとして、田原の成章館、掛川の徳造書院、會津の日新館、米澤の興讓館、福井の明道館、加賀の明倫堂、岡山の閑谷學校、水戸の弘道館、佐倉の成徳書院、佐賀の鶴山書院など皆然らざるはなし。則ち孔子が東洋の大聖人たることは、これを古今に徴して疑はず、これを中外に驗して惑はざる所なり。

### 第三章 世界の 大聖人

孔子は偉人中の偉人、聖人中の聖人なり。故に孔子の支那に生れしは、支那一國の名譽にして、支那人は常に孔子を絶代の偉人として他國人に誇りぬ。また孔子が東洋に生れしは、東洋全體の名譽に

して、我等東洋人は常に孔子を東洋の大聖人として世界に誇りぬ。若し孔子の盛徳を讚美せず、反つて孔子の盛名を毀損するものあらむか、こは直ちに支那一國の名譽を傷つけ、併せて東洋全體の名譽を損するものなり。日月の明は萬物を遍照せざるなく、天地の徳は萬物を覆載せざるなし。孔子の明は日月に參し、孔子の徳は天地に配す。故に東洋に於て已に盛名を負ひし孔子は、更に西洋に於て景仰せられ、東洋の大聖人として日韓の儒家に崇敬せられし孔子は、更に世界の大家として歐米の學者に推尊せられむとす。然るに現代の支那人に往々孔子を忌避し孔子を排斥するものは何の意ぞや。浮雲の爲一時その明を蔽れし日月は永久にその光を奪はるべきに非ず。孔子の道、今や本國に衰へむとし、反つて歐米に興らむとす、豈いはゆる失之東隅一收之桑榆一ものならずや。

孔子に對して歐米學者の研究は頗る盛にして、その研究の順序及び方法としては第一・論語の翻譯第二・孔子の傳記、第三・孔子の主義、理想、第四・東西偉人の比較評論に従事せり。論語の翻譯に英譯、佛譯、羅甸譯、獨逸譯、澳太利譯、露西亞譯などあり、これ彼等の孔子研究に向つて發程する第一歩なり。而してこの研究の結果、孔子の傳記及び孔子の主義理想を發表せるもの多し、即ち孔子傳は西曆紀元一六九二年に伊太利人某の著せしものを首めとして、一七八六年に佛蘭西人アミオー(Amiot) 一七九九年に獨逸人ヨハン・エベルハルト・ツェー(Jahann Eberhard Zeh) 一八〇九年に

英吉利人マーシマン(Marshman)、一八二五年に獨逸人ブレンクネル(Planchner)、一八二六年に獨逸人シヨット(Schott)、一八四二年に英吉利人ウィリヤムス(Williams)、一八四九年に北米合衆人ブリヂマン(Bridgeman)、一八六〇年に英吉利人エドキンス(Edkins)、一八六二年に獨逸人プラート(Plat)、一八六六年に英吉利人ジュームス、レッグ(James Legge)、一八六七年に北米合衆人ルーミス(Loomis)、一八六九年に英吉利人ブッチャー(Butcher)、同年北米合衆人ジュームス、フリーマン、クラーク(James Freeman Clarke)、一八七八年に佛蘭西人ジャン、セナモー(Jan-Senemand)、一八八〇年に獨逸人マルチン、ハウグ(Martin Haug)、一八九七年に英吉利人パーカー(Parker)、一九〇〇年に英吉利人アレンダー(Alender)、同年に露西亞人パヴレンコフ(Pavlenkov)、一九〇二年に佛蘭西人カロン(Caron)、一九一一年に北米合衆人ワルシユ(Walsh)、一九一二年に北米合衆人ラウフェル(Lauffer)などの撰述あり。

次に孔子の主義理想を述べしものは、西紀一六八八年に佛人ブリューン(Bruno)の孔子道德論を首めとして、一七九六年に獨逸人シルレル(Schiller)、一八〇七年に英人マーシマン(Marshman)、一八七〇年に英人ロバート、モリソン(Robert Morrison)、翌年に英人ウィリヤム、アシモア(W. Ashmore) 一八七三年に獨逸人エルンスト、ファーンズル(Ernst-Faber)、一八七八年に佛人侯爵デルヴエー、サン、デ

デー(D'Hervey Saint Denys)、翌年に英人ドーグラス(Douglas)、一八八一年に米人インクワイヤー(Inquirer)、翌年に英人ジョージ・マセソン(George Matheson)、一八八四年に米人バルドウィン(Baldwin)、一八八六年に佛人侯爵デルウエー、サン、デニー(D'Hervey Saint Denys)、一八八八年に獨人ガブリエル(Gabelentz)、一八九〇年に佛人ペイソン(Poisson)、一八九五年に獨人ヅヴォラク(Dvorak)、同年に米人ジェニングス(Jennings)、一八九七年に英人パーカー(Parker)、翌年に英人ドーグラス(Douglas)、一九〇一年に英人ジャイルス(Giles)、一九〇四年に獨人フラード(Flad)、一九〇九年に英人レオヤード、エー、ライヤル(Leo-yard A Lyall)、同年に獨人ルードウイツヒ、ハルラルド、シエツツ(Ludwig Harald Schutz)、一九一五年に米人ドーソン(Danson)、など、一々枚舉に違あらざるなり。

次に孔子と他の聖賢との比較評論は西紀一七八七年に佛人バストレー(Pastoret)、はゾロアストル(Zoroastre)、孔子、及びマホメット三聖論を著し、一八五九年に英人ジョセフ、エドキンス(Joseph Odhins)、は支那宗教論を著して、孔老佛の三教を比較論述し、一八七七年に伊人カルロ、プイニー(Carla Pini)、は釋孔老亞細亞三聖論を著し、一八七七年に英人ジェームス、レッグ(James Legge)は孔子教基督教關係論を著し、後三年に基孔道平心批評を著し、一八九四年に米人マルティン(Martin)は「プラトール」、孔子一致論を著し、最近オイケン博士に代りて上海に來りしドリーシユ博士は孔子の

倫理はカントの實踐哲學に酷似せりとて、中華申報に寄書せり。日本に於ても孔子、釋迦、基督を世界の三聖と稱するものあるのみならず、高山樗牛は釋迦、孔子、ソクラテス、基督を世界の四聖と稱し、井上圓了博士は釋迦、孔子、ソクラテス、カントを世界の四聖と稱し。吉田熊次博士は孔子、ソクラテスの比較研究を最近の孔子祭典に發表せるが如き、皆孔子を世界の大神人として待遇せるものなり。

#### 第四章 彼の學問修養

生れながらに知り、安んじて行ふは、至人聖人なり。孔子は至聖なりしも、彼の一生は學びて知るものにして、生れながらに知るものに非ず、利して行ふものにして、安んじて行ふものに非ず。故に彼の年十五、始めて學に志してより、晩年七十、心の欲するまゝにして矩を踰えざる境遇に至るまで、彼は學問修養に終始して、日に省察戒慎の工夫を重ねざるはなし。故に博く文を學ぶと曰ひ、篤く信じて學を好むと曰ひ、故を温ねて新を知ると曰ひ、審に問ひ詳に説くと曰ひ、慎みて思ひ明かに辨ずと曰ひしが如き、皆學びて厭はざる彼の理想を説破せしものなり。況んや、我非ニ生而知之者、好レ古敏以求之者也と曰ひしに於ては、彼が本來努力主義にして、生知安行を以て自ら許すことなかりしを知るべし。

春秋の世は、文武の政布いて方策に在れども、三綱己に戮れ、五倫己に喪びしかば、天子の威信は諸侯に行はれず、諸侯の命令は大夫に行はれず、陪臣國命を執りて、天下の形勢は日に悪化し、人々虚偽を尙び、驕奢を好み、便佞を智と爲し、優柔を仁と爲し、兇暴を勇と爲せり。こゝに於て孔子は狂瀾を既倒に廻さむと欲し、務めて輕佻を排し、篤厚を尙び、矜僞を斥け、忠信を重んじ、驕奢僭越を抑へ、大義名分を明かにせり。故に彼は時人に對して、奢らむよりは寧ろ儉なれ、不遜ならむよりは寧ろ固なれと警告するのみならず、自己の態度に於ても、文勝つの史よりも質勝つの野を取り、後進の君子よりも先進の野人を取りしものなり。

孔子以前に於て、聖と仁との二字の意義は左程に重からざりしに、孔子に至りてその意義甚だ重大化せり。論語の述而に若ニ聖與レ仁則吾豈敢と曰ひて、孔子自ら聖仁に居らざりしのみならず、仁は孔子が諸弟子に對して容易に許さざる所なり。且つ當時澆季の世、最も智辯を尙び勇武を重んぜしかば、孔子特に仁を標榜して智勇に對峙せしめ、これを三徳と稱して、知者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は懼れずと曰ひ、また好レ學近ニ乎知一力行近ニ乎仁一知レ耻近ニ乎勇一と曰ひぬ。蓋し知仁勇の對稱は孔子に始まりしものにして、今世の倫理學者及び心理學者が智情意の三方面を主張すると、其の意、同一なり。降りて子思に至りて知仁勇を天下の三達徳と稱せしは善く孔子の遺志を繼ぎしものなり。顧ふ

に孔子は聖を以て自ら居らずと雖も、倦まず、厭はず、努力の結果、己に聖中の至聖と爲れり。故に三徳は彼に於て最も完全に修養し最も圓滿に濟成せしものに庶幾し。

(一) 知的修養 孔子嘗て篤信好レ學と曰ひ、また好レ學近ニ乎知一と曰ひ、實に子貢も亦孔子を評して學而不レ厭知也と曰ひぬ。實に孔子は學を好むものなり、學びて厭はざるものなり。故に彼が禮を老聃に問ひ、樂を萇弘に問ひ、琴を師襄に學びしも、皆彼の旺盛なる智識慾を満足せしめむと欲するのみ。晩年に易を學びて韋編三絶せしは、彼の智識慾が旺盛にして終身衰へず、彼の努力主義が徹底的に晩年までも易らざりしを知るべし。

(二) 仁的修養 孔子嘗て子貢及び公西華の間に對し、自己の特徴を敍べ、學びて厭はず、教へて倦まずと曰へり。子貢これを評して、學びて厭はざるは知なり、教へて倦まざるは仁なりと曰ひぬ。これ孔子の所謂好レ學近ニ乎知一力行近ニ乎仁一の意義のみ。試に孔子の門人に對する態度を察するに、視猶レ子は獨り顔淵に對してのみ然るに非ず。三千人中、顔淵は屢ニ孔子に稱揚せられ、子路は屢ニ孔子に叱責せらる。しかも子路の死せし時、孔子哭して噫天祝レ予と曰ひしは、顔淵の死せし時、孔子慟して噫天喪レ予と曰ひしと同一一般なり。而して噫天喪レ予の一語が顔淵を視ること猶ほ子の如き師弟の情誼より出でしものとするれば、噫天祝レ予の一語も亦子路を視ること猶ほ子の如き師弟の情誼より出でしもの

のと謂はざるを得ず。この情誼とこの態度とは、孔子が門人に對して平等普遍に終始自ら保持せる所なり。孔子の仁は嘗に此の如きのみならず、十四年間、天下を周游し、諸侯を歴訪せしも、上は國君を誨へ士大夫に説き、下は億兆を利濟せむとするものにして、教へて倦まざる彼の仁心を展開し、感化を三千の門人以外に擴大して、天下億兆の蒼生に及ぼさむとするものなり。

(三) 勇的修養 孔子の勇は暴虎馮河の勇に非ずして、義を見て爲すの大勇なり。百戰百勝、人を殺して自ら快とする勇に非ずして、戰はざるに勝ち、攻めざるに破り、以て國辱を雪ぎ國難を掃蕩する正義の勇なり。故に夾谷の會、彼の態度は平生の謙讓に似ず、勇氣凜々として、嚴かる諸侯なきは猶ほ澠池の會に藺相如が秦王を叱咤し、毛遂が平原君の爲に楚王を殿上に威壓せし如く、堂々正々、能く齊の有司を懾伏せしめ、齊侯の野心を挫折し、魯の國權を回復し、景公をして嘗て侵略せし魯の領地を歸さしむ。これ大義名分論の發顯にして、所謂恥を知るの勇あるものなり。その他、彼が三都を墮ちし如き、少正卯を誅せし如き、陳恒その君を弑せし時、沐浴して朝し、哀公に告げ、三家に迫りて、これを討たむと請ひし如き、皆所謂義を見て爲すの大勇あるものなり。況んや彼が桓魋の難に天生德於予、桓魋其如予何と曰ひ、匡人兵を以て圍みし時に、文王既沒、文不在茲乎、と曰ひ、陳蔡の厄に子路慍りて君子亦有窮乎、と曰ひし時、君子固窮、小人窮斯濫矣と曰ひしに於ては、皆所謂

懼れざるの勇あるものなり。

論語に孔子の人格及び風采を敘述するものあり、學而の溫良恭儉讓の五字、述而の溫而厲、威而不猛、恭而安の三句これなり。これ知仁勇の三徳を内に具備し外に發露せる至聖の面貌を寫し出し、髣髴として在すが如き思あらしむるものなり。顧ふに彼の祖先に正考父といふものあり、一命して儻し、再命して僇し、三命して俯する恭儉の君子なり。また彼の父叔梁紇は身長十尺、武力絶倫の偉丈夫なれば、彼の溫良恭儉讓と溫而厲、威而不猛とは、皆先祖の流風を承け餘勇を襲ぎしものならむ。

また論語に孔子學修の進境を敘ぶるものあり、爲政の吾十有五而志於學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲不踰矩の一章これなり。また孔子一生の境遇變遷を敘ぶるものあり、學而の學而時習之、不亦説乎、有朋自遠方來、不亦樂乎、人不知而不慍、不亦君子乎の一章これなり。伊藤仁齋は學而の第一章を稱して、一部の小論語と曰ひぬ。予も亦この章及び吾十有五志於學の一章を評して、孔子の自敘傳にして、彼の一生の小歴史と謂はむとす。

試に孔子一生の歴史を察するに、彼の一生は分ちて四期と爲す、修業時代、教育時代、政事時代、著作時代これなり。修業時代とは彼の所謂學而不厭の時代にして、年十五始めて學に志してより、三十にして立つまでをいふ。しかも彼に常師なく、三人行けば必ず我師ありとの主義により、集めて

大成したるものにして、琴を師襄に學び、官を郷子に學び、禮を老聃に問ひしも、皆この際に在りき。史記孔子世家に琴を師襄に學ぶを、孔子の五十五歳、衛に之きし後と爲すは不可なり、清の林春溥の孔子世家補訂に訂正して、魯の昭公二十年、即ち孔子の年三十以前に在りと爲し、歷聘記に年二十九とあるもの、從ふべし。然れども林春溥が孔子世家に禮を老聃に問ひしを孔子の三十歳以前のこと、爲せしを訂して、四十二歳の時と爲せるは、從ふべからず。學而の學而時習之不亦說乎の一句は、即ち此の時代を敍べしものなり。教育時代とは彼の所謂誨而不倦の時代にして、彼の年三十歳前後より四十にて惑はず、五十にして天命を知るまでを稱す。即ち孔子が禮を老聃に問ひし後、周より魯に反りて弟子稍進み、四十五歳前後に至りて弟子彌衆く、遠方より來り集りて三千人の多きに達しぬ。學而の所謂有朋自遠方來、不亦樂乎の一句は、此の時代を敍べしものにして、彼が書を序し、詩を刪り、禮樂を述べし事業は、概して此の際に成りしものなり。政事時代とは彼の年五十以後六十八までにして、魯に於て中都の宰と爲り、司空と爲り、大司寇と爲り、相の事を攝し、夾谷の會に齊を屏息せしめ、後ち三都を墮ち、少正卯を誅し、頗る功績ありしが、魯君齊の女樂を受くるに及び、去りて衛に適き、陳に之き、匡人の難に遇ひ、宋に適き、蔡に如き、陳蔡の厄に遭ひ、楚に至り、復た衛に反り、遂に魯に反るまで、その間凡そ十有四年、彼が最も經世の事業に活動せし時代なり。學而

の人不知而不愠、不亦君子乎の一句は、正に此の際の天を怨みず人を尤めざる君子の心情を告白せるものなり。著作時代とは彼が衛より魯に歸りし哀公十一年以後にして、彼の年七十前後、心の欲する所に從ひ矩を踰えざる時代をいふ。蓋し孔子が人道以外に研究を天道に進め、易を學びて韋編三絶の勉強を爲せしは、此の際に在りき。然るに孔子の易を學ぶを四十五六歳の時と爲すものあり、皇侃は論語述而篇の子曰加我數年、五十以學易可無大過矣を疏して、孔子の年已四十五六と曰ひ、毛奇齡は古者五十以後不復親學と曰ひ、徂徠も學易比至五十二と曰ひしが如き、皆これなり。而して朱熹は獨り解して孔子年已幾七十矣と曰ひぬ、從ふべし。後ち哀公の十四年に西狩して麟を獲るに及び、春秋を作れり。これ經國の大業、不朽の盛事にして、彼の大義名分論はこの裏に發揮せるものなり。

### 第五章 彼の德化德望

孔子の衣食住は決して驕者にして傍若無人の成金生活に非ず。また赤貧にして常に飢寒に襲はる、窮民生活にも非ず。たゞ學を好むの篤き、食には飽くを求むるなく、居には安を求むるなく、道に志して惡衣惡食を耻ぢず、憤を發して食を忘れ、樂みて憂を忘れ、老の將さに至らむとするを知らざる

は、學びて厭はざる聖人の智能く自ら己を成す所以なり。しかも聖人の事業は管に己を成すに止まらず、更に人を成さむとす。故に彼は門人を激勵して、外に物欲を排し、内に道德を修養せしめむと欲して、一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在りて道を樂む顔淵を稱して、賢哉と曰ひ、蔽れたる縵袍を衣て、狐貉を衣たるものと立ちて恥ぢざる子路を稱して、堂に升ると曰ひ、飲食を菲くし、衣服を惡くし、宮室を卑くする禹を稱して、間然するなしと曰ひしは、教へて倦まざる聖人の仁、能く人を成さむとして門人を奨勵する所以なり。

孔子の教へて倦まざる仁は、門人を視ること猶ほ子の如し、故に門人の孔子を視るも亦殆ど父の如し。先進に回也視<sub>レ</sub>予猶<sub>レ</sub>父也、予不<sub>レ</sub>得<sub>三</sub>視猶<sub>二</sub>子也と曰へるが如きこれなり。師弟の情誼此の如く渥くして、始めて師恩を君恩父恩に對して三恩と稱すべし。宰予が孔子を堯舜よりも賢れりと曰ひ、子貢有若が生民ありしより以來孔子より盛なるものあらずと曰ひ、孔子没するに及びて、考妣に對する如く、彼等は皆三年の喪に服しぬ。特に子貢が孔子を日月に比し、已に三年の喪を畢へ、更に室を孔子の冢上に築きて三年獨居せし如き、子夏子張子游が有若の貌孔子に似たればとて、孔子に事ふる所以を以て有若に事へむと曰ひし如き、また曾子がこれを不可として、江漢以濯<sub>レ</sub>之、秋陽以暴<sub>レ</sub>之、皜々乎不可<sub>レ</sub>尙已と曰ひし如き、皆彼等が孔子を思慕する至誠の息むなきを見るべし。韓非子の五蠹篇に仲尼は

天下の聖人なり、行を修め道を明にして海内に遊び、海内その仁を悦び、その義を美として、服役するもの七十人と曰ひしは、法術を説きて仁義の無用を絶叫する韓非の眼中にも孔子の徳化を承認せるものならずや。韓非已に七十人が孔子に徳化せられしを知りしも、三千の門人が皆孔子の仁を悦び孔子の義を美として服役するものなるを知らざるなり。若しかの孔子の温良恭儉讓が至る所に歓迎せられてその政を聞きし如き、固より韓非の知悉する能はざる所なり。魯の大夫孟僖子病みて死去せむとし、その子孟懿子を誡めて、孔丘は達者なり、吾没せば汝必ず師とせよと曰ひ、季桓子も死するに臨みて、その子季康子を顧みて、昔この國殆ど興りしも、吾嘗て罪を孔子に獲しを以て興らざるなり、我死せば汝必ず相たらむ、相たらば汝必ず仲尼を召せよと曰ひぬ。その他に大宰が孔子を聖としてその多能を稱し、達巷の黨人が孔子を大として、その博學を稱し、萇弘が孔子を評して聖人の表ありと曰ひ、孔父文伯の母が孔子を稱して天下の賢人と曰ひし如き、皆孔子の人格偉大なるを知るものなり。また陳蔡の大夫が孔子を評して天下の賢者と爲し、孔子の楚に用ひらるゝを恐れ、遂に陳蔡の厄ありし如き、また楚の令尹子西が孔子を稱して、三王の法を述べ、周召の業を明にするものと謂ひ、書社の地七百里に封するは楚の福に非すと曰ひし如き、皆顔淵の所謂何ぞ容れられざるを病へむ、容れられずして然る後に君子を見るべきものなり。況んや孟子が孔子を稱して聖の時なるものにして、集め

て大成せるものと曰ひ、荀子が孔子を評して斂然として聖王の文章具はり、勃然として平世の俗起ると曰ひしに於てをや、能く至聖の徳化偉大なるを稱述せるものなり。漢の張超の尼父頌に、巖々孔聖、異世稱傑、量合乾坤、明參日月と曰ひ、晋の孫楚の尼父頌に皇矣尼父、聖哲之傑、徳比天地、明齊日月と曰ひしが如き、皆仲尼を日月に比せし子貢の意を襲ぎしものなり。唐の皮日休、宋の米芾、元の成宗が孔子を堯舜以上と爲して、孔子前後に孔子なしと謂ひし如き、皆孔子を堯舜よりも賢れりとする宰予有若の意を承けしものなり。その他、魏の文帝の修孔子舊廟文、宋の文帝の修孔子廟及學舍詔、齊の武帝の改築聖廟詔、陳の後主の改築舊廟詔、唐の高祖の國子監立周公孔子廟詔、高宗の幸曲阜祠廟詔、玄宗の追諡孔子爲文宣王詔、宋の太祖の孔子贊、眞宗の加諡孔子爲玄聖文宣王制、及び孔子贊、徽宗の宣聖贊、高宗の宣聖贊、元の成宗の加封孔子爲大成至聖文宣王詔、明の成祖の孔子廟碑、憲宗の重修孔子廟碑、孝宗の重建聖廟碑、世宗の正孔廟祀典說、清の聖祖の先師孔子贊、至聖先師孔子廟碑、重修聖廟碑、世宗の修建闕里聖廟碑、高宗の至聖先師孔子廟碑などを一誦すれば、孔子の人格が聖中の至聖にして、歴代の帝王が何如に孔子を仰慕尊崇せしかを知るべきなり。

## 第六章 孔子と四科 上

四科とは徳行、言語、政事、文學の謂にして、論語先進篇に、徳行顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、言語宰我、子貢、政事冉有、季路、文學子游、子夏と曰へるこれなり。而して顔淵以下の十人は、世に十哲といへり。十哲已に専門的に四科を分擔せるに、孔子は一人にして能く十哲の長所を兼ね善くして四科に並び秀でざるはなし。孟子の公孫丑篇に宰我子貢善爲說辭、冉牛閔子顔淵善言徳行、孔子兼之と曰ひ、また子夏子游子張皆有聖人之一體、冉牛閔子顔淵則具體而微と曰ひしは、孔子が言語、徳行、文學を兼ね善くするを言ひしものなり。況んや孔子の政事的手腕に於ては、到底冉有子路の企及する所に非ざるなり。

一、徳行に就きて言はゞ、孟子に冉牛、閔子、顔淵は體を具へて微なるものと曰へば、孔子の徳行は顔淵、閔子騫、冉伯牛、のそれに比して、更に一層偉大なるを知るべし。況んや仲弓に於てをや。仲弓は孔子が雍や南面せしむべしと稱し、伯牛は孔子が斯の人にして斯の疾ありと歎じ、閔子騫は費の宰たるを辭じ、去りて汝の上に在らむと曰ひしものにして、孔子嘗て稱して孝なるかなと曰ひ、顔淵は一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在りて道を樂み學を好み、孔子嘗て稱して賢なるかなと曰ひ、また我と行藏を同じうすと曰ひしものなり。則ち孔子の徳行は顔淵の賢と閔子騫の孝と伯牛仲弓の材とを兼ねて、溫良恭儉、家に在りては能く孝弟を盡くし、忠信篤敬、郷黨に在りては恂々として言ふ能は



ざるもの、如く、宗廟朝廷に在りては便々として言ふ。況んや君召す時、色は勃如として、足は躍如たり、公門に入る時、鞠躬如として容れられざるが如く、立つとき門に中せず、行くとき闕を履まず、享禮には容色あり、私覲には愉々如たり、而して燕居するとき申々如たり、天々如たるが如き、能く公私を混同せず、常に君臣の大義を尊重せるを知るべし。その喪に居るや、旨を食ふも甘からず、樂を聞くも樂からず、また喪あるもの、側に食するとき、飽くまでに食はず、この日に於て哭すれば歌はず、齊衰者を見るに必ず變じ、冕者、瞽者を見るに、必ず禮貌を以てするが如き、皆情に厚くして仁愛忠恕、自ら矩を踰へざるものなり。故に孔子の德行は窮して逆境に在れば獨り其の身を善くし、達して順境に在れば天下を兼ね善くす。その貧にして怨むなく、疏食を飯ひ、水を飲み、脰を曲げて枕するは、無道の世に處する彼の德行なり。富みて驕るなく、危言危行、死を守りて道を善くするは、有道の世に處する彼の德行なり。故に彼に三戒あり、三畏あり、九思あるは、德行を修養するためにして、彼の風采が溫にして厲、威ありて猛からず、恭にして安なるは知仁勇の三徳修養の結果なるのみ。樊遲嘗て徳を崇うすることを問ひしに、得を後にし事を先にすと對へたり。而して子張も亦徳を崇うすることを問ひしに、忠信を主とし、義に徒ると對へぬ。これ人を看て教を立るものにして、亦彼の教が何如に徳行を尊重せるかを卜知すべきなり。

一、言語に就きて言はゞ、孔子は門人に對して、常に言語を抑へ、佞者を惡みぬ。里仁篇に君子欲<sub>レ</sub>訥<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>言而敏<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>行と曰ひ、先進篇に惡<sub>レ</sub>夫佞者<sub>一</sub>と曰ひ、公冶長篇に焉用<sub>レ</sub>佞、禦<sub>レ</sub>人以<sub>レ</sub>口給、屢憎<sub>レ</sub>於人<sub>一</sub>と曰ひ、陽貨篇に惡<sub>レ</sub>利口之覆<sub>レ</sub>邦家<sub>一</sub>者<sub>一</sub>と曰ひしが如き、これなり。蓋し當時言語を重んじ、辯論を尙ぶの極、士は皆辭令に嫻ひ、徒に文飾に流れ、虚誇に陥る弊なきに非ず。公冶長篇に或人が冉雍の仁を稱して、佞ならざるを惜みし如き、亦當時流俗が何如に佞を貴びしかを想察すべし。故に物徂徠は衛靈公篇の辭達而已矣に注して、春秋時、爲<sub>レ</sub>辭命<sub>一</sub>者、率虚誇成<sub>レ</sub>俗、競以<sub>レ</sub>文飾<sub>一</sub>相高、兩國之情、因以不<sub>レ</sub>達、故孔子云爾と曰ひぬ。一般の風潮已にかくの如くなるを以て、孔子は陽貨篇に予欲<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>言と曰ひ、また天何言哉と曰ひ、憲問篇に君子耻<sub>レ</sub>其言<sub>一</sub>而過<sub>レ</sub>其行<sub>一</sub>と曰ひ、顔淵篇に仁者其言也訥と曰ひ、また爲<sub>レ</sub>之難、言<sub>レ</sub>之得<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>訥乎と曰ふ、皆人をして言に訥にして行に敏ならしめむと欲するものなり。しかも孟子の公孫篇に、宰我子貢は善く説辭を爲し、冉牛、閔子、顔淵は善く徳行を言ひ、孔子はこれを兼ねると曰はゞ、孔子も亦善く説辭を爲せしを知るべし。故に韓非の難言に、仲尼善説而匡圍<sub>レ</sub>之と曰ひぬ。蓋し孔子が務めて言語を抑へしは、教育上、門人をして言行一致、言は行を顧み、行は言を顧みるを要求するのみ。故に孔子が郷黨に於て恂々如として言ふ能はざるに似たりとて、決して先天的に口訥なるものに非ず、座に年長者あればなり。その宗廟朝廷に在るや、便々として言ひ、特に下大

夫と言ふに侃々如たり、上大夫と言ふに闇々如たるが如き、孔子の辯舌の剛柔自在なるを察すべし。故に道ある邦に危言し、道なき邦に言遜るのみならず、車中に疾言せずと曰へば、車中に非ざるに疾言することもあるを知るべし。夾谷の會に二度までも歴階して登り、袂を舉げて齊の無禮を詰責し、齊侯をして中心より恥ぢ且つ懼れしめしは、孔子の雄辯家たるを想望せしむる所以なり。故に微生畝は孔子の佞なるを疑ひ、子夏は孔子の言の厲なるを信じぬ。これ孔子が平生務めて言語を抑ふるに關らず、孔門の四科中に言語を入れ、而して十哲中に宰我子貢を推選せる所以ならずや。

三、政事に就きて言はゞ、修身齊家が學問の眞諦なる如く、治國平天下は學者の最終の目的なり。されば學びて優なるもの、仕ふるは、治平の目的を達して天下を兼ね善くせむと欲するのみ。仕へて優なるもの、學ぶは、修齊の眞諦を修了して、誠意正心、その身を善くせむと欲するなり。故に治平と修齊とは、固より本末あり、先後ありしも、政事と德行とは、決して系統を異にせざるなり。畢竟德行は政事の起點にして、政事の範圍を縮小して、獨り一身に體驗するもののみ。而して政事は德行の終點にして、德行の範圍を擴充して、博く天下に應用するものなり。故に孔子の政事論は法治主義に非ずして、道德論なり大義名分論なり。例へば

子曰、爲政以德、譬如北辰居其所而衆星共之、爲政

子曰、道之以政、齊之以刑、民免而無恥、道之以德、齊之以禮、有恥且格、爲政

子曰、能以禮讓爲國乎何有、里仁

子曰、上好禮則民莫敢不敬、上好義則民莫敢不服、上好信則民莫敢不用情、子路

子曰、其身正、不令而行、其身不正、雖令不從、子路

子曰、苟正其身矣、於從政乎何有、不能正其身、如正人何、同上

季康子問政於孔子、孔子對曰、政者正也、子帥以正、孰敢不正、顏淵

季康子問政於孔子、曰如殺無道以就有道何如、孔子對曰、子爲政、焉用殺、子欲善而民善矣、

君子之德風、小人之德草、草上之風、必偃、顏淵

齊景公問政於孔子、孔子對曰、君君、臣臣、父父、子子、公曰善哉、信如君不君、臣不臣、父不父、子

不子、雖有粟吾得而食諸、顏淵

子路曰、衛君待子而爲政、子將奚先、子曰、必也正名乎、子路

の類は、皆修身を以て治國の要と爲し、名分を以て經世の本と爲すものなり。故に子貢は夫子が至る所に其の政を聞くを以て、溫良恭儉讓の然らしむものと爲し、孔子も亦その家庭に於て孝友の道を盡くすを以て一種の爲政と謂ひぬ。

子禽問<sub>二</sub>於子貢<sub>一</sub>、曰夫子至<sub>二</sub>於是邦<sub>一</sub>也、必聞<sub>二</sub>其政<sub>一</sub>、求<sub>レ</sub>之與、抑與<sub>レ</sub>之與、子貢曰、夫子溫良恭儉讓以得<sub>レ</sub>

之、夫子之求<sub>レ</sub>之也、其諸異<sub>二</sub>乎人之求<sub>レ</sub>之與、學而  
或謂<sub>二</sub>孔子<sub>一</sub>、曰子奚不<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>政、子曰、書云孝乎惟孝、友<sub>二</sub>于兄弟<sub>一</sub>、施<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>政、是亦爲<sub>レ</sub>政、奚其爲<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>政  
爲政

顧ふに孔門の四科中、特に政事に冉有、子路を推選せし所以は、二子の性格、一は退き、一は人を兼  
ぬと雖も、二子の目的が常に政事的經綸に在りしは、子路嘗て孔子の間に對へて、

千乘之國、攝<sub>二</sub>乎大國之間<sub>一</sub>、加<sub>レ</sub>之以<sub>二</sub>師旅<sub>一</sub>、因<sub>レ</sub>之以<sub>二</sub>饑饉<sub>一</sub>、由也爲<sub>レ</sub>之、比<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>三年<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>使<sub>二</sub>有<sub>レ</sub>勇且知<sub>レ</sub>方  
也、先進

と曰ひ、冉有も亦孔子の間に對へて、

方六七十、如五六十、求也爲<sub>レ</sub>之、比<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>三年<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>使<sub>二</sub>足<sub>レ</sub>民、先進

と曰ひしのみならず、孔子も亦嘗て孟武伯の間に應じ、子路を評して、由也千乘之國、可<sub>レ</sub>使<sub>二</sub>治<sub>レ</sub>其賦<sub>一</sub>  
也と曰ひ、冉有を評して、求也千室之邑、百乘之家、可<sub>レ</sub>使<sub>二</sub>爲<sub>レ</sub>之宰<sub>一</sub>也と曰へり。故に他日二子俱に  
季氏の宰と爲り、また與に衛に往き、しば<sub>レ</sub>政を孔子に問へり。

子路問<sub>レ</sub>政、子曰、先<sub>レ</sub>之勞<sub>レ</sub>之、請<sub>レ</sub>益、曰無<sub>レ</sub>倦、子路

子適<sub>レ</sub>衛、冉有僕、子曰庶矣哉、冉有曰既庶矣、又何加焉、曰富<sub>レ</sub>之、曰既富矣、又何加焉、曰教<sub>レ</sub>之、子路  
而して二子は屢孔子の教を受くるのみならず、又數々孔子の詰責を受く。

季氏將<sub>レ</sub>伐<sub>二</sub>顓臾<sub>一</sub>、冉有季路見<sub>二</sub>於孔子曰<sub>一</sub>、季氏將<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>事<sub>二</sub>於顓臾<sub>一</sub>、孔子曰、求、無<sub>レ</sub>乃是過<sub>レ</sub>與、夫顓臾、昔  
者先王以爲<sub>二</sub>東蒙主<sub>一</sub>、且在<sub>二</sub>邦域之中<sub>一</sub>矣、是社稷之臣也、何以<sub>レ</sub>伐爲、冉有曰、夫子欲<sub>レ</sub>之、吾<sub>二</sub>二臣者皆不<sub>レ</sub>  
欲也、孔子曰、爾言過矣、虎兕出<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>柙、龜玉毀<sub>二</sub>於櫝中<sub>一</sub>、是誰之過與、季氏

季氏富<sub>二</sub>於周公<sub>一</sub>、而求也爲<sub>レ</sub>之聚斂而附<sub>二</sub>益之<sub>一</sub>、子曰非<sub>二</sub>吾徒<sub>一</sub>也、小子鳴<sub>レ</sub>鼓而攻<sub>レ</sub>之可也、先進

冉子退<sub>レ</sub>朝、子曰何晏也、對曰有<sub>レ</sub>政、子曰其事也、如有<sub>レ</sub>政、雖<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>吾以<sub>一</sub>、吾其與聞<sub>レ</sub>之、子路

季氏旅<sub>二</sub>於泰山<sub>一</sub>、子謂<sub>二</sub>冉有<sub>一</sub>曰、女弗<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>救與、對曰不能、子曰嗚呼曾謂<sub>二</sub>泰山不<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>林放<sub>一</sub>乎、八佾

子路曰衛君待<sub>レ</sub>子而爲<sub>レ</sub>政、子將<sub>二</sub>奚先<sub>一</sub>、子曰必也正<sub>レ</sub>名乎、子路曰有<sub>レ</sub>是哉子之迂也、奚其正、子曰野哉由  
也、君子於<sub>二</sub>其所<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>知、蓋闕如也、子路

の如き、二子の政治的手腕が到底孔子に及ばざるを知るべし。況んや孔子が中都の宰たりしこと一  
年、四方皆これに則り、大司寇と爲り、相の事を攝して、齊侯を夾谷に震懼せしめ、三都を墮ち、政  
を亂す少正卯を誅するに於てをや。これ孔子の政事的手腕が齊楚に畏れられ、陳蔡に忌まれし所以な  
り。

### 第七章 孔子と四科 下

孔子と文學との關係に就きては、孔子嘗て自ら道ひし如く、學びて厭はず、教へて倦まざる一事は文學者として彼の資格を確知すべきなり。故に彼は門人を教ふるに文行忠信を以てし。また行有餘力、則以學文と曰へり。文は即ち文學にして、行は即ち徳行の義なり。而して古の所謂文學は決して今の所謂文學に非ず。古の所謂文學は廣義の文學にして、今の所謂文學は狹義の文學なり。廣義の文學とは讀書學問の總稱にして、狹義の文學とは詩歌・小説・戯曲の類を專稱するものなり。

試に春秋以後、漢魏六朝時代に於ける、文學の意義を察するに、墨子の非命篇、荀子の大略篇、王制篇、韓非子の難言篇、五蠹篇、史記の公孫弘傳、灌夫傳、儒林傳、漢書の晁錯傳、董仲舒傳、公孫弘傳、東方朔傳、宣帝本紀、昭帝本紀、張湯傳、王莽傳、劉歆傳、その他鹽鐵論、後漢書、三國志、晉書等に見ゆる文學の二字は、皆廣義の文學にして、讀書學問の總稱ならざるはなし。

凡出言談、由文學之爲道也、則不可不以不先立義法、墨子、非命中

今天下之君子之爲文學、出言談也、非將勤勞其頰舌、而利其唇舌也、墨子、非命下人之於文學也、猶玉之於琢磨也、荀子、大略



子貢季路故鄙人也、被文學、服禮義、爲天下列士、荀子大略

雖庶人之子孫、積文學、正身行、能屬於禮義、則歸之卿相士大夫、荀子、玉制

殊釋文學、以質信一言、則見以爲鄙、韓非、難言

離法者罪、而諸先生以文學取、韓非、五蠹

工文學者非所用、用之則亂法、韓非、五蠹

文學習則爲明師、韓非、五蠹

富國以農、距敵恃卒、而貴文學之士、韓非、五蠹

の如きは、先秦時代に於て、文學の意義が廣義にして、詩書の學習に在りしを知るべし。

建元元年、天子初即位、招賢良文學之士、史記、公孫弘傳

元光五年、有詔徵文學、菑川國復推上公孫弘、史記、公孫弘傳

夫不喜文學、好任俠、史記、灌夫傳

夫齊魯之間、於文學、自古以來其天性也、史記、儒林傳

於是招方正賢良文學之士、史記、儒林傳

田蚡爲丞相、絀黃老刑名百家之言、延文學儒者數百人、史記、儒林傳

郡國縣道邑有<sub>下</sub>好<sub>ニ</sub>文學、敬<sub>ニ</sub>長上、肅<sub>ニ</sub>政教、順<sub>ニ</sub>鄉里、出入不<sub>レ</sub>悖<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>聞者、令相長丞上<sub>ニ</sub>屬所二千石、史記、儒林傳

能通<sub>ニ</sub>一藝<sub>ニ</sub>以上、補<sub>ニ</sub>文學掌故缺、史記、儒林傳

自<sub>レ</sub>此以來、則令卿大夫士吏、斌々多<sub>ニ</sub>文學之士<sub>ニ</sub>矣、史記、儒林傳

詔<sub>ニ</sub>有司<sub>ニ</sub>舉<sub>ニ</sub>賢良文學士、錯在<sub>ニ</sub>選中<sub>ニ</sub>、漢書、晁錯傳

秦繼<sub>ニ</sub>其後、獨不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>改、又益甚<sub>レ</sub>之、重禁<sub>ニ</sub>文學、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>挾<sub>レ</sub>書、漢書、董仲舒傳

元光五年徵<sub>ニ</sub>賢良文學、漢書、公孫弘傳

帝初卽<sub>レ</sub>位、詔<sub>ニ</sub>天下<sub>ニ</sub>舉<sub>ニ</sub>方正賢良文學材力之士、漢書、東方朔傳

元康元年秋八月詔曰、朕不<sub>レ</sub>明<sub>ニ</sub>六藝、鬱<sub>ニ</sub>于大道、是以陰陽風雨未<sub>レ</sub>時、其博舉<sub>ニ</sub>吏民厥身修正通<sub>ニ</sub>文學、

明<sub>ニ</sub>於先王之術、宣<sub>ニ</sub>究其意<sub>ニ</sub>者各二人<sub>上</sub>、漢書、宣帝紀

太常舉<sub>ニ</sub>賢良各二人、郡國文學高第各一人、漢書、昭帝紀

是時上方鄉<sub>ニ</sub>文學、湯決<sub>ニ</sub>大獄、欲<sub>レ</sub>傳<sub>ニ</sub>古義、乃請<sub>ニ</sub>博士弟子、治<sub>ニ</sub>尚書春秋、補<sub>ニ</sub>廷尉史、漢書、張湯傳

令<sub>ニ</sub>公卿大夫諸侯二千石、舉<sub>ニ</sub>吏民有<sub>ニ</sub>德行、通<sub>ニ</sub>政事、能<sub>ニ</sub>言語、明<sub>ニ</sub>文學<sub>ニ</sub>者各一人<sub>上</sub>、漢書、王莽傳

聖上德通<sub>ニ</sub>神明、繼<sub>ニ</sub>統揚<sub>レ</sub>業、亦閱<sub>ニ</sub>文學錯亂、漢書、劉歆移讓太常博士書

余觀<sub>ニ</sub>鹽鐵之義、觀<sub>ニ</sub>乎公卿文學賢良之論、桓寬、鹽鐵論、雜論

當<sub>ニ</sub>此之時、豪俊並進、四方輻湊、賢良茂陵唐生、文學魯萬生之倫六十餘人、桓寬、鹽鐵論、雜論

少有<sub>ニ</sub>大志、不<sub>レ</sub>好<sub>ニ</sub>文學、禹常非<sub>レ</sub>之、後漢書、鄧禹傳

球拜<sub>ニ</sub>尚書令、奏罷<sub>ニ</sub>鴻都文學、後漢書、陽球傳

建安八年秋七月令曰、喪亂以來十有五年、後生者不<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>仁義禮讓之風、吾甚傷<sub>レ</sub>之、其令<sub>ニ</sub>郡國各修<sub>ニ</sub>文學、三國志、魏、武帝紀

散騎侍郎夏侯惠薦<sub>レ</sub>劾、曰文學之士、嘉<sub>ニ</sub>其推步詳密、法理之士、明<sub>ニ</sub>其分數精比、意思之士、知<sub>ニ</sub>其沈深篤固、文章之士、愛<sub>ニ</sub>其著論屬辭、晉書、韓續傳

績少好<sub>ニ</sub>文學、以<sub>ニ</sub>潛退<sub>ニ</sub>爲<sub>レ</sub>操、晉書、韓績傳

上好<sub>ニ</sub>儒雅、又命<sub>ニ</sub>丹陽尹何尚之、立<sub>ニ</sub>元素學、著作郎何承天立<sub>ニ</sub>史學、司徒參軍謝元立<sub>ニ</sub>文學、各聚<sub>ニ</sub>門徒、多<sub>ニ</sub>就<sub>レ</sub>業者、南史、文帝紀

高祖以<sub>ニ</sub>蕭撝、唐瑾、元偉、王褒等四人、俱爲<sub>ニ</sub>文學博士、北周書、蕭撝傳

の如きは、漢魏六朝に於ける文學の意義が決して狹義ならざるを窺ひ知るべし。就<sub>レ</sub>中史記漢書に文學を以て賢良に對するもの多きは、論語に文と行とを對し、文學と德行とを對するが如く、文學は知に屬

し、學問に屬し、賢良は行に屬し、徳に屬するものなり。三國志に文學の士を以て、法理の士、意思の士に區別するのみならず、また文章の士に區別すれば、文學の士とは詩人文章の士に區別するものにして、即ち詩人文章家に非ずして、經術の士なるを知るべし。また南史に文學を以て元素學、史學に對立すれば、文學の儒教的、經學的なること明かなり。獨り史記、蒙恬傳に恬嘗書獄、典文學とあるは、必ずしも詩書六藝の文を指すものに非ず。索隱に恬嘗學獄法、遂作獄官文學と曰へり。果して索隱の説の如しとすれば、文學の意義は必ずしも古の遺文を講ずる謂にあらず、自己の思想を文字に形はすことをも、司馬遷時代に文學と稱せしものならむか。魏の官名に五官將文學あるが如き、決して詩書を講ずる謂に非ずして、自ら書記するの義を取れるものならずや。三國志の魏の王粲傳に文帝爲五官將、及平原侯植皆好文學とあるも、亦詩賦を好む謂にして、儒教または經學を好むを謂ふものに非ず。且つ世説新語に文學篇あり、南齊書に始めて文學傳を立てしより、梁書、陳書、及び隋書は、皆儒林傳以外に文學傳を置きぬ。これ經學者以外に詩人文章家を文學者と認むるものなり。則ち文學の意義に古今の變遷ありて、同じく文學と稱するも、その内容に多少の差異あり、或は經學を指し、或は詩歌文章を指し、或は古の遺文を學ぶことと爲し、或は自ら作爲すること、爲せり。而して唐宋以後の文學は詩歌文章の義と解すべきもの多し。唐書、張九齡傳に九齡の言として

臣荒陬孤生、陛下過聽、以文學用臣と曰ひ、歐陽修の蘇明允墓誌銘に其二子舉進士、皆在高等、亦以文學稱於時と曰へる、皆明に詩文を指すもの、如き、これなり。

然れども孔門に於ける四科對立の文學の意義は、固より廣義にして、自ら作爲せし詩歌文章を包含せざるなり。馬融は學而篇「行有餘力、則以學文」に註して、文者古之遺文也と曰ひ、朱熹は註して、文謂詩書六藝之文と曰ひ、皇侃は雍也篇「博學於文、約之以禮」に註して、六籍の文と曰ひ、大宰春臺も文論に於て文也者非他也、六藝之謂也と曰ひぬ。蓋し馬融の如くに文を解して古の遺文なりとするも、孔子時代に於ては、六經以外に復た遺文なし。而して六經中、春秋は孔子晩年の作なり、易も亦孔子の晩年に學びしものなれば、孔門の教科書に春秋なく、また易なきなり。則ち孔子が年十五にして學に志せし以來、學問に教育に、半生の歲月を費し、滿腔の熱誠を注ぎしは、事實なりしも、孔門の教育法は決して秩序統一なきものに非ず、また徒に博覽多識を目的と爲すものに非ずして、詩書禮樂を標榜して、實踐躬行を目的と爲せるものなり。詩書は即ち文學にして、四教中の文に屬し、禮樂は即ち徳行にして、四教中の行に屬せり。論語陽貨篇に禮云禮云、玉帛云乎哉、樂云樂云、鐘鼓云乎哉と曰ひしは、禮樂に修齊治平の功用あるを道破せしものならずや。孔子嘗て獨り立ちし時、その子鯉趨りて庭を過ぐ、孔子曰く、詩を學びしかと、鯉對へて未だしと曰ひしかば、詩を學ばざれば言ふ

ことなかれと孔子言ふ、鯉退きて詩を學べり。他日又獨り立ちしに、鯉趨りて庭を過ぐ、孔子曰く、禮を學びたるかと、鯉對へて未だしと曰ひしかば、禮を學ばざれば立つことなかれと孔子言ふ、鯉退きて禮を學びぬ。これ文學より單に詩を擧げ、德行より禮を擧げしものにして、一を擧げて二を略す、即ち亦一隅を擧げて、三隅を以て反らしむるものなり。故に述而篇に子所<sub>レ</sub>雅言、詩書執禮と曰ひ、また秦伯篇に興<sub>ニ</sub>於詩、立<sub>ニ</sub>於禮、成<sub>ニ</sub>於樂と曰ひ、陽貨篇に子謂<sub>ニ</sub>伯魚曰、女爲<sub>ニ</sub>周南召南<sub>一</sub>矣乎、人而不<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>周南召南<sub>一</sub>、其猶<sub>ニ</sub>正牆面而立<sub>一</sub>也與と曰ひ、また小子何莫<sub>レ</sub>學<sub>ニ</sub>夫詩<sub>一</sub>、詩可<sub>ニ</sub>以興<sub>一</sub>、可<sub>ニ</sub>以觀<sub>一</sub>、可<sub>ニ</sub>以群<sub>一</sub>、可<sub>ニ</sub>以怨<sub>一</sub>、邇<sub>レ</sub>之事、父、遠<sub>レ</sub>之事、君、多識<sub>ニ</sub>於鳥獸草木之名<sub>一</sub>と曰ひぬ。

十哲中、子游子貢が特に文學を以て許されしは、詩書禮樂に於ける二子の造詣最も深ければなり。子游が武城の宰たりし時、弦歌を以て邑民を教化せむとせしは、彼の趣味が詩と樂とに在りしを知るべし。況や子貢に於ては、孔子嘗て稱して起<sub>レ</sub>予者商也、始可<sub>ニ</sub>與言<sub>ニ</sub>詩<sub>一</sub>已矣と許せしものなり。子貢、已に文學を以て推さる。しかも二子を孔子に比すれば、孟子の所謂有<sub>ニ</sub>聖人<sub>一</sub>一體<sub>一</sub>ものに過ぎざれば、孔子は固より德行、言語、政事以外に二子の長所を兼ね善くすること、疑を容るべからず。詩を刪り書を序する事は、文學者として孔子の大業なり。而して後世の學者、或は刪詩の事實を否定し、詩經は本來三百篇にして、三千餘篇ありしに非ずと主張するものあるは不可なり。周の盛時に

於て、采詩の官に収集せられ、太師の手に管理せられて、詩歌三千餘篇ありしは、疑ふべからざる事實なり。何となれば周の領域より言はゞ、當初已に大小七十の侯伯ありしのみならず、周の年代より言はゞ、上は文王より下は定王に至るまで、凡そ四百餘年なり。故に五年ごとに天子巡狩し、一國より一詩づゝを採集するも、四百年間には七十列國より五千六百篇を得べき筈なり、豈唯に三千餘篇に止まらむや。もし三千餘篇より、禮を失はず、邪に流れず、淫を導かず、亂を開かず、溫柔敦厚、眞に能く徳育及び智育に資すべきものを選択して、三百篇と爲し、ものとすれば、吾人は教育上に於ける孔子の偉績を感謝せざるを得ず。且つ詩經は孔子の刪定を待ちて、當初の目的、及び性質を革新せるものなり。何となれば采詩の官が當初列國の詩を収集せし目的は、王者をして民風を觀、民情を察して、爲政の態度、及び方針を定めしめむとするに在り。而して太師これを樂歌として大學に教授し、又これを燕饗に用ひ、祭祀に用ひ、會朝に用ふるに及びて、本と志を言ひし詩は一變して政治化し、再變して音樂化するものなり。然るに孔子刪定して三百篇と爲し、より、昨の樂歌は化して經典と爲り、昨の美的本位は化して善的本位と爲り、昨は樂官の手に屬せしもの、今は學者の手に歸し、本と匹夫匹婦の口より發せしもの、今は聖賢君子の格言と伍して同列の地位に在り。これ豈目的上より、將た性質上より、詩の一大革新に非ずや。故に詩の功用に就きて、孔子嘗て不<sub>レ</sub>學<sub>ニ</sub>詩<sub>一</sub>無<sub>ニ</sub>以言<sub>一</sub>と云ひ

しのみならず、また誦詩三百、授之以政不達、使於四方、不對專對、雖多亦何以爲と曰ひ、また詩可<sub>レ</sub>以興、可<sub>レ</sub>以觀、可<sub>レ</sub>以群、可<sub>レ</sub>以怨、邇之事父、遠之事君、多識於鳥獸草木之名と曰ひしは、三百篇に政事的、外交的、倫理的、博物學的の功果あるを言ひしものなり。こゝに於て孔子以後の學者は自己の主義本領を説明するに方り、詩を引きて立證と爲し、斷案と爲すもの多し。曾子は孔子の意を述べて大學を作り、十たび詩を引き、子思は曾子の教を受けて中庸を作り、十二たび詩を引き、孟子は子思の門人に教を受けて七篇を作り、二十三たび詩を引けり。降つて漢に至りて、儒者の文に詩を引けるもの多きは、皆孔門文學の影響ならざるはなし。

書を序することも、亦至聖の偉蹟なり。何となれば尙書は本と左史右史が天子の言動を日記體に筆記せしものにして、虞夏以後數百千年間、帝室の内府に襲藏せられしものなり。故に尙書に虞書、夏書、商書、周書の別ありしは、四代の史官の筆に成りし史料たることを見せしものにして、尙書は到底聖經の匹儔に非ず。故に王陽明は書是堯舜以下史と曰へり。しかも史として尙書の價値は實に斷片的なる政事史料に過ぎざるのみ。決して帝王學として上は堯舜の徳を見、下は三王の義を見るべき完全のものに非ず。その卷は浩漭なり、尨大なり。隨つて年々錯亂し、歳々散佚せしを、孔子これを整理し、これを序次し、日記體の史料を改めて、事理を明にする經典と爲し、これに政事的標準、道

徳的典型、教育的價値を加味す。猶ほ詩經が孔子の刪定に由りて多大の價値を増加せる如く、尙書の價値は、古典的唯一の教科書として、三千の弟子に教授せしのみならず、後世の學者皆千古の經典としてこれを尊重せざるはなし。

次に狹義の文學、即ち詩歌文章に於ける孔子の技倆を窺ふに、春秋の文章に就きて、歐陽修の所謂簡而有<sub>レ</sub>法の一語、能く其の妙を形容せるものに庶幾し。また詩歌に於ては、史記及び家語に去<sub>レ</sub>魯歌あり、水經注に臨<sub>レ</sub>河歌あり、孔叢子に楚聘歌、丘陵歌、獲麟歌あり、檀弓及び家語に曳<sub>レ</sub>杖歌あり。就<sub>レ</sub>中去<sub>レ</sub>魯歌及び曳<sub>レ</sub>杖歌は孔子の韻文として至聖の面目を想見すべきものなり。

## 去魯歌

彼婦之口、可<sub>レ</sub>以出走、彼婦之謁、可<sub>レ</sub>以死敗、蓋優哉游哉、聊以卒<sub>レ</sub>業、史記

## 曳杖歌

家語、題曰夢奠歌

泰山其頽乎、梁木其壞乎、哲人其萎乎、檀弓

## 第八章 論語と春秋 上

論語は孔子の自著に非ずして、門人の合編なり。若し論語の著者を穿鑿して、一二人を指定し、或



は曾子有子の門人と爲し、或は原憲琴牢と爲すが加きは、愚に非ざれば誣なるものなり。蓋し孔子歿して後、門人相思慕して、號泣慟哭、考妣に喪する如く、三年の後、各その郷に歸るに及び、尙ほ追懷の情に勝へざるものあり。こゝに於て嘗て親炙し、自ら教を承けて紳に書せし至聖の言を集輯して二十篇と爲し、日夕捧持、これを見ること猶ほ夫子の如く、以て在すが如き誠敬を致す。これ至聖の徳化の然らしむる所にして、孔門獨得の美風なり。然らば論語は先師を思慕する門人三千の合著にして一二人の私著に非ずと謂ふべきなり。

論語は孔門文學の精粹にして、支那思想界を永遠に支配せし儒教の寶典なり。故に歴代の帝王はこれに由りて治平の實を擧げ、公卿大臣はこれに頼りて輔弼の任を完うし、百官有司はこれに因りて忠良の誠を竭くす。則ち論語一部はこれを古今に通じて謬らず、これを中外に施して悖らざるものならずや。宋の趙普嘗て論語半部を以て太祖を佐けて天下を定め、半部を以て太宗を佐けて太平を致すと曰ひしは、蓋し英雄人を欺く一時の傲語ならむも、李沆が論語の節用而愛人、使民以時の兩句を愛誦して、聖人の言は終身誦して可なりと曰ひしは、眷々として服膺せむとする君子の言に庶幾し。顧ふに孔子の道は論語によりて其の大經を明かにするを得べし。しかも論語は道を論ずる書に非ず。故に明德を天下に明かにするに八條目あり、格物致知に始まりて治國平天下に終る。曾子これを大學に

論ずるも、孔子これを論語に述べず。また天下國家を治むるに九經あり、身を修むるに始まりて諸侯を懷くに終る。子思これを中庸に論ずるも、孔子これを論語に述べず。また天下に五達道あり、君臣父子、夫婦、昆弟、朋友これなり、中庸及び孟子にこれを論ずるも、論語にはたゞ君臣・父子・朋友の道を説きて、夫婦昆弟の道を述べざるなり。由來孔子の言は人に因りて教を説く、猶ほ良醫が症に對して藥を投ずるが如し。良醫は人を活かすを目的とし、聖人は人を成すを目的とす。而して人は各その習性を異にし、各その職業を異にす。故にその問同じうして、その答異なるは、その人異なればなり。例へば聞斯行<sub>レ</sub>諸の問題に就き、子路問へば孔子對へて否と曰ひ、冉有問へば孔子對へて然りと曰ひぬ。こは冉有に退的習性あり、故にこれを進め、子路に進的習性あり、故にこれを退くるのみ。その他、顔淵、仲弓、司馬牛、樊遲、子貢、子張が同じく仁を問うて、孔子各その答を異にし、孟懿子・孟武伯・子游・子夏が同じく孝を問うて、孔子また各その答を異にせる如き皆これなり。

孔門に束脩を行ひし三千人中、六藝に通ずるもの七十餘人あり、皆孔子に親炙して、學を修め徳を崇くし、疑を質し惑を辨せざるはなし。而して彼等の多數は未だ娶らざるものなり、未だ仕へざるものなり。故に彼等の人事上の疑問は、父子兄弟の問題以外には唯朋友あるのみにして、君臣の義は學優にして仕ふる後に生ず。仕へざれば義なし。況んや夫婦の道に於ては、有道に就きてこれを正すの必

要なし。これ論語に忠よりも多く孝を説き、夫婦の別よりも多く朋友の信を説く所以なり。然るに論者或は論語に孝を説くこと多きも、忠を説くこと少きを以て、孔子の教は孝を本として忠を末とし、孝を重しとして忠を輕しと爲すものあるは、誤れり。論語に於ける師弟子の問答は、皆弟子の問に應ずるものにして、憤せざれば啓せず、悻せざれば發せず、一隅を擧げて三隅を以て反せざれば復たせざるは、孔門の教授法なり。故に孝を説くこと多きは、孝を問ふもの多ければなり。忠を説くこと少きは、忠を問ふもの少ければなり。忠孝一體、忠臣を求むるに孝子の門に於てす。孔子安んぞ忠孝に輕重を付する意あらむや。故に曾子が事<sub>レ</sub>君不<sub>レ</sub>忠非<sub>レ</sub>孝也禮記祭義と曰ひしのみならず、孔子も亦嘗て以<sub>レ</sub>孝事<sub>レ</sub>君則忠後漢書韋彪傳に孔子の語として載す、その註に此孝經緯之文也と曰へりと曰ひぬ。これ忠孝一體の義を告白せるものなり。

魯の定公嘗て孔子に問ふに君臣の道を以てす、孔子對へて君使<sub>レ</sub>臣以<sub>レ</sub>禮、臣事<sub>レ</sub>君以<sub>レ</sub>忠併と曰ひ、子路も亦蓀を荷ふ丈人を評して不<sub>レ</sub>仕無<sub>レ</sub>義、長幼之節不可<sub>レ</sub>廢也、君臣之義、如<sub>レ</sub>之何<sub>レ</sub>其廢<sub>レ</sub>之、欲<sub>レ</sub>潔<sub>レ</sub>其身、而亂<sub>レ</sub>大倫、君子之仕也行<sub>レ</sub>其義也微子と曰ひしは、皆忠義を以て人臣の大倫と爲すものなり。故に孟子が五倫を説きて、父子を第一にし、君臣を第二にして、父子有<sub>レ</sub>親、君臣有<sub>レ</sub>義、夫婦有<sub>レ</sub>別、長幼有<sub>レ</sub>序、朋友有<sub>レ</sub>信滕文公と曰ひしも、亦必ずしも親と義とに權衡を懸けて、孝を重とし忠を輕しとするものに非ず、父子の親は孩提の童より起るも、君臣の義は四十強仕の後に生ずるものなればなり。中庸に

五達道を説くに、君臣を第一とし、父子を第二とし、夫婦を第三とし、昆弟を第四とし、朋友を第五とし、荀子の王制篇に君臣の關係を人倫の本と爲し、父子、兄弟、夫婦を君臣の次に置ける如き、皆義を重しとして親を輕しとし、忠を本として孝を末とするものに似たり。しかも彼等は皆孔子の意を承けしものなれば、孔子に忠を輕しとし孝を重しとする意なきを知るべし。然れども忠孝衝突して、忠ならむと欲すれば孝ならず、孝ならむと欲すれば忠ならざる場合に於ては、非常手段として大義滅親の特例を開かざるを得ず。これ親を以て義に殉し、忠を以て孝を滅するものにして、儒道の精華は實にこゝに存せり。しかもこは道の權にして道の經に非ざるを知らざるべからず。

仁は三徳中の主なる徳目にして、仁の字は論語中の字眼なり。故に孔門の諸賢は皆一齊に仁に向つて精進せざるはなし。しかも仁は孔子の容易に門人に許さざる所なり。たゞ顔淵にのみ僅にこれを許して、回也三月不<sub>レ</sub>違<sub>レ</sub>其仁と曰ひしも、仲弓・子路・冉有・公西華には不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>其仁とて、肯へて許さざりき。若しかの門人以外に於ては微子・箕子・比干・及び管仲に仁を許して、令尹子文及び陳文子に許さざるなり。唯に孔子が仁を許すに嚴刻なるのみならず、門人中、子張は堂々乎として能くし難きを爲すものなりしも、子游は子張を評して吾友張也、爲<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>能也。然而未<sub>レ</sub>仁と曰ひ、曾子も亦評して堂々乎張也、難<sub>レ</sub>與並爲<sub>レ</sub>仁矣と曰ひぬ。仁を求むるものは此の如く多きに、仁を得るものは彼の如くに

少し。故に門人或は仁を以て遠しと爲し、或は仁を以て重しと爲すものありしかば、孔子これを激するに、仁遠乎哉、我欲仁斯仁至矣を以せり。

仁は人の愛情の外に形はるゝものにして、溫和・謙讓・惻隱・恭順・慈惠・哀憐の諸徳は、皆仁の分布ならざるはなし。故に仁を求めて仁を得るは、必ずしも人の難事に非ず。況んや仁者愛人、顔仁者不憂、仁者能好人能惡人、顔於ては、仲弓・子路・冉有・公西華と雖も、亦已に之を躬行する資格あらむ。然るに孔子が容易に仁を許さざりしは、彼等をして能く大成して、勉めずして中り、思はずして得るの聖域に進ましめむと欲するのみ。故に顔淵仁を問へば、孔子對へて克己復禮、淵と曰ひ、仲弓仁を問へば、孔子應じて出門如見大賓、使民如承大祭、己所不欲、勿施於人、淵と曰ひ、司馬牛仁を問へば、孔子答へて其言也訥と曰ひ、樊遲仁を問へば孔子對へて愛人、淵と曰ひ、また先難而後獲也、淵と曰ひしが如き、皆正面より仁の定義を解答せしものに非ず。その性の近き所を視、その人能と不能とを察して、これを指導し、これを力行せしむと欲するのみ。若しかの仁義、及びその内容に就いては太田錦城の仁說三書に詳なれば、煩を避けてこゝに之を略しぬ。

子曰、志士仁人無求生、以害仁、有殺身以成仁。衛靈公  
子曰、君子無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必於是。里仁

仁は孔子の道の中樞なれば、人としての出處進退、死生安危は、一に仁に遵ひ義に由らざるべからず。故に生を求めて仁を害ふなく、身を殺して仁を成すは、志士仁人の態度なり。終食の間も仁に違ふなく、造次にも必ず仁に由り、顛沛にも必ず仁に由るは、君子の態度なり。特に身を殺して仁を成すの一句は、日本武士道の第一義にして、武士教育の精神なり。然るに近年某博士は教育を論じて、教育の方針は忠君愛國に在ること勿論なりしも、古の忠君愛國は決して死ぬるを忠義といふ儒教主義のものに非ずして、積極的手段により、生前に國利民福を増進するを謂ふ。畢竟身を殺して仁を成すは、古の忠君愛國に過ぎずと曰ひぬ。これ一を知りて二を知らざる謬見なり。何となれば博士の所謂死ぬるを忠義といふ一語は、淨瑠璃本の伽羅千代萩に見ゆ。しかも此の一語は論語の有殺身以成仁の一句に胚胎せるものにして、武士道の精華はこゝに存せり。故に武士は主君の馬前に討死するを無上の名譽と信するものにして、武士の家に生れしものは、子供ながらに切腹の術を教へらるゝを苦痛とせず、因果とせず、反つて光榮と爲し、果報と爲し、寧ろこれを百姓町人に誇視する傾向ありき。この傾向は源平以後數百年間因襲し來れる風潮にして、徳川三百年は孔孟の所謂、身を殺して仁を成し、生を捨てて義を取る武士道の尖端と謂ふべし。故に君國の爲め一身を犠牲にするは、國家有事の場合に於ける忠君愛國なりしも、博士の所謂生前に國利民福を増進するは、天下無事の場合に於ける

忠君愛國なり。若し事ある場合に國利民福を口實として、三十六計逃ぐるに若かずとて、敵に背を見するは、怯懦破廉耻にして、決して忠君愛國に非ず。同時に事なき場合に馬前の討死を夢想し、徒に死出の旅路を急ぐは、輕躁無謀にして、決して忠君愛國に非ざるなり。

已欲<sub>レ</sub>立而立<sub>レ</sub>人、已欲<sub>レ</sub>達而達<sub>レ</sub>人、也、雍  
已所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>欲、勿<sub>レ</sub>施<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>人、淵、顔

この二者は皆仁者の態度を説明せしものにして、前者の已欲<sub>レ</sub>立の二句は、子貢仁を問ひしに答へ、後者の已所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>欲の一句は、仲弓仁を問ひしに對へしものなり。しかも前者の已欲<sub>レ</sub>立は、己の欲する所を人に施せよの意義なれば、後者の已所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>欲と表裏相待つて、忠恕の本義を敍べしものならずや。孔子嘗て子貢の有<sub>レ</sub>一言而可<sub>レ</sub>以終身行<sub>レ</sub>之者乎の問に對へて、其恕乎、已所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>欲、勿<sub>レ</sub>施<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>人<sub>一</sub>と曰へり。己の欲せざる所を人に施すなきを恕とすれば、己の欲する所を人に施すも亦恕なり。曾子また孔子の吾道一以貫<sub>レ</sub>之の義を解して、夫子之道忠恕而已矣と曰へり。則ち道即ち忠恕、忠恕即ち仁、仁即ち道なる三者の關係は、恰も三巴の狀なるを知るべきのみ。

且つ孔子が大義名分を重んずることは、一部の春秋が名分を明かにするを目的と爲せるに由りて知るべきのみならず、論語の季氏篇の天下有道則禮樂征伐自<sub>レ</sub>天子出の章、憲問篇の陳成子、弑<sub>レ</sub>簡公の

章、子路篇の子路曰衛君待<sub>レ</sub>子而爲<sub>レ</sub>政の章、八佾篇の季氏八佾舞<sub>レ</sub>於庭の章、三家者以<sub>レ</sub>雍徹の章、及び季氏旅<sub>レ</sub>於泰山の章を一讀すれば、大義名分に關して、孔子が一步も假借する所なきを知るべし。然るに陽貨篇に如有<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>我者、吾其爲<sub>レ</sub>東周<sub>一</sub>乎の一語あるは、疑はざるを得ず。何晏の集解に興<sub>レ</sub>周道於東方、故曰<sub>レ</sub>東周<sub>一</sub>と曰ひ、皇侃の義疏に魯在<sub>レ</sub>東、周在<sub>レ</sub>西、云<sub>レ</sub>東周<sub>一</sub>者、欲<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>魯而興<sub>レ</sub>周道、故云<sub>レ</sub>吾其爲<sub>レ</sub>東周<sub>一</sub>也と曰ひしが如き、皆疑ふべし。朱熹も亦何晏の説を取れり。果して然りとすれば、孔子は革命論者にして過激派なり。何となれば當時周室已に衰へたりしも、尙ほ未だ全く滅亡せるものには革命論者にして過激派なり。孔子卒してより、凡そ二三十年後に在りき。然るに孔子が早くも第二の周を東方に興さむと曰はゞ、現時の周室を奈何せむとするか。これ彼が晩年春秋を作りし精神と相矛盾するものならずや。故に予は吾其爲<sub>レ</sub>東周<sub>一</sub>乎の爲の字を解して、己の爲めにし、人の爲めにする爲の字と同じく、扶助の義と主張せむとす。翟灝の説に敬王去<sub>レ</sub>王城、而遷<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>成周、自<sub>レ</sub>是以後謂<sub>レ</sub>王城<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>西周、成周爲<sub>レ</sub>東周<sub>一</sub>孔子設<sub>レ</sub>此言<sub>一</sub>時、在下敬王居<sub>レ</sub>成周<sub>一</sub>後、故云<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>東周<sub>一</sub>乎、爲字讀如下述而篇爲<sub>レ</sub>衛君<sub>一</sub>之爲<sub>レ</sub>、猶言<sub>レ</sub>助也と曰へるもの、先づ我が心を獲たるものなり。要するに孔子は尊王論者なり、大義名分論者なり。然るに清末に至りて、學者或は孔子を共和主義と爲し、或は孔子に革命思想ありといふ。これ固より曲學阿世、辯せざるべからざるものなり。

## 第九章 論語と春秋 下

詩書は孔子の雅言する所なり。禮も亦孔子の雅言する所なりしも、今の三禮は孔子の雅言する所に非ず。易は孔子晩年に韋編三絶の困勉を重ねしものなれば、十翼は彼の筆に非ずと雖も、彼の困勉の結果は、蓋し彼の所謂畏るべき後生によりて十翼中に祖述せらるゝならむ。獨り春秋は至聖親ら筆削せしものにして、游夏の徒の一辭を贊する能はざる所なり。孟子に春秋は天子の事なりと曰ひ、また王者の迹熄みて詩亡び、詩亡びて然る後に春秋作ると曰ひ、また孔子春秋を成して亂臣賊子懼ると曰ひしは、善く春秋の性質價值を知れるものなり。故に孔子も亦自ら其事則齊桓晉文、其文則史、其義則丘竊取之矣と曰ひ、また知我者其惟春秋乎、罪我者其惟春秋乎と曰ひぬ。然らば詩・書・易が孔子以前の三代文學にして、三禮が孔子以後の戰國文學なるに似ず、春秋は五經中、唯一の聖經にして、孔門文學の最も權威あるものと謂ふべし。

述べて作らず信じて古を好みし孔子の文學的事業として、書を序べ、詩を刪り、禮樂を正せしは、三千の弟子に對する教育上の必要に迫られて、所謂述べしものなりしも、獨り春秋に至りては、彼は大なる覺悟と大なる決心とを以て、筆すべきは筆し、削るべきは削りて、褒貶黜陟を一字一句に寓せ以て王道を末世に厲行し、以て大義名分を明かにし、亂臣賊子を懼れしむ。これ實に經國の大業、不朽の盛事にして、其の目的は單に門人の爲にするに非ずして、天下の爲にするものなり。

春秋は尊王の書なり、大義名分を明かにする書なり、亂臣賊子を筆誅する書なり。故に春秋の性質を論じて、公羊高は亂世を撥めて正に反へすものと曰ひ、莊周は名分を道ふものと曰ひ、董仲舒は上三王の道を明かにし、下は人事の紀を辨ずるものと曰ひ、唐の趙匡は常典を興し、權制を明かにするものと曰ひ、宋の邵雍は名分の書と曰ひ、朱熹は道を明かにし義を正す書と曰ひ、明の趙汭は聖人經世の書と曰へり。また春秋の價值を論じて、晋の范甯は不易の宏軌、百王の通典といひ、隋の王通は輕重の權衡、曲直の繩墨なりといひ、宋の程頤は事を制する權衡、道を揆る模範といひ、胡安國は百王の法度、萬世の準繩といへり。

顧ふに孔子の時は周室微弱にして、天子は徒に虛器を擁し、威信已に地に墜ち、諸侯は肆に征伐を行ひ、大義名分、復た天下に明かならず。臣にして君を弑するものあり、子にして父を賊するものありしかば、孔子歎じて、天下に道なければ、禮樂征伐、諸侯より出づと曰ひぬ。禮樂征伐、諸侯より出づるは、文武周公の遺制、已に壞れしものなり。況んや再變して大夫より出で、三變して陪臣より出づるに於ては、天下の亂已に極れり。孔子已に天下の日に亂るゝを視、吾道の行はれざるを憂へ、

四方を周遊して、時君の我を知るものなきを歎じぬ。偶々哀公十四年に麟を獲て、麟なるを知らず、反つて不祥と爲し、を目撃し、退きて獨り謂へらく、河に圖を出さず、洛に書を出さざる亂世に、吾道行はれず、吾身容れられざるは、麟が聖人に遇はずして不祥と看做さるゝが如し。世道は必ず扶植せざるべからず、人心は必ず矯正せざるべからず。予は已に徳を立つる能はず、また功を立つる能はず。せめては立言によりて知己を百世に求め、名を不朽に垂れざるべからずと。乃ち魯史によりて春秋を作れり。これ實に孔子晩年の大事業にして、彼の易筮の前二年に在りき。されば春秋の一書は決して無意義なる記事の書に非ずして、尊王の大義に由り、亂臣賊子を筆誅して、狂瀾を既倒に廻さむとするものなるや明かなり。齊の陳恒が簡公を弑せし時、孔子沐浴して朝し、哀公に告げて陳恒その君を弑せり、請ふこれを討たむと曰ひぬ。陳恒が君を弑せしは、哀公十四年にして、即ち獲麟の後に在りき。魯は固より天子に非ず、方伯に非ず、齊の與國にして、數齊に弱められしものなり。齊は桓公の餘威に乗じて、頻に四隣を侵略す。而して陳恒一たび大義名分を亂すや、孔子沐浴してこれを討たむことを請ひしは、天子の權を以て魯に與へしものならずや。則ち嘗て禮樂征伐が諸侯より出づるを慨歎せし孔子は、獨り魯にのみ天下征伐の權を與ふ。この時、孔子は已に春秋を筆削して、春秋の大義名分は、實に此の精神の發露せるものに過ぎざるなり。史記の孔子世家に「吳楚の君僭して自ら王と稱せしも、春秋に貶して子と曰ひ、踐土の會に周の天子を召し、は事實なり、しかも春秋に諱みて天王、河陽に狩すと曰ふ」とあるは、能く彼の尊王的精神を道破せるものなり。魏の文帝の典論に文章は經國の大業、不朽の盛事と曰へり。しかも文帝の文章に經國の大業たるべきものなし。恐らくは文帝は斯の二語に該當する資格なからむ。故に予は斷言せむとす、古來この二語に該當して少しも愧ぢざるものは、たゞ孔子の春秋あるのみと。

孔子の春秋が此の如き決心を以て作られしものとすれば、次に起るべき疑問は、孔子が春秋を作りし目的が天下本位なるか、將た自己本位なるかに在り。天下本位とは大義名分を明かにして、天下を救濟せむことを主眼と爲すなり。若し孔子が麟を以て自ら比し、麟が聖人を待たずして出でしを悲みて、春秋を作るとすれば、彼の目的は自己本位にして、吾道の行はれざるを歎じ、不朽の名譽を春秋に托せむと欲するもののみ。然れども彼の所謂吾道行はれずとの一語は必ずしも寵榮を時君に得ざりしを怨むのみに非ず、その内容は禮樂崩れ、綱常壞れて、文武周公の道、復た天下に明かならざるを指すものなり。されば春秋を作りし彼の目的は、決して自己の名譽のみに止らずして、現在に行はれざりし吾道を後世に行はむとするものなり。故に天下本位は彼の目的の主なるものにして、自己本位は彼の目的の後なるものと謂はざるを得ず。

孔子の春秋を作りし目的は必ずしも己の爲に非ずして、天下の爲に狂瀾を既倒に廻さむとするに在りとすれば、次に起るべき疑問は、春秋の一書が果して彼の所謂作りしものなるか、將た所謂述べしものなるかに在り。予は茲に此の疑問に斷案を下して、春秋は魯の國史に因り、文武周公の典禮を述べしものなり、決して創始的に孔子の作りしものに非ずと曰ひ、併せて論語の「述べて作らず」の作の字と、孟子の「孔子懼れて春秋を作る」の作の字との意義に多少の差別ありと言はむとす。春秋は元と魯の國史の稱呼なりしこと孟子に見ゆ。晉の韓宣子が魯の春秋を見、「周の禮は盡く魯に在り」と曰ひし春秋は、孔子筆削の春秋に非ずして、魯の國史を稱せしものなり。孔子、己に魯の國史の稱號を取りて、書名と爲ししは、彼が春秋を自己の私著と見做さざりしを證明するに足れり。孟子に「其の文は史、其の義は丘竊に取るとあるは、魯史に因りて筆削し、更に尊王の大義を筆端に寓することを告白せるものなり。然らば春秋は經史の兩性を兼有するものなり。若し單に史と見做して、褒貶俱に無しと謂はゞ、其の義は丘竊に取るといふ一語を如何に解釋せむとするか。また純ら經と見做して字字風霜を帶ぶと謂はゞ、其の文は史といふ一語を如何に解釋せむとするか。己に魯史に由れりとすれば、固より所謂述ぶるものなり。しかも其の義は丘竊に取ると曰はゞ、亦所謂作るものに似たり。然れども孔子の竊に取る所の義が、文武周公の遺制に遵ひて、是非得失を見はすものとすれば、亦述

にして作に非ざるなり。杜預の左氏傳集解序に、仲尼は魯史に因りて、其の眞僞を考へ、其の典禮を志し、上は周公の遺制に遵ひ、下は將來の法を明かにすと曰ひしが如き、亦春秋が述べて作らざる彼の理想に成りしを證明せるものなり。

春秋の文に就きて、韓愈は評して謹嚴と曰ひ、歐陽修は稱して簡にして法ありと曰ひぬ。韓愈の所謂謹嚴は必ずしも文の形式に一字一句を苟もせざる所あるを評せしものに非ずして、内容が大義名分を標準として、君臣、父子、夫婦、長幼、華夷、内外の別を明かにせるを稱揚せしものなり。しかも歐陽修の所謂簡にして法ありは、固より文の形式の簡明なるを稱せしものなりしも、亦必ずしも三傳の說ける如くに、字字褒貶を寓するものと主張せるに非ざるなり。顧ふに周の史官が簡策に書するや常に直筆を尙びぬ。決して後世の穢史が貨賂によりて筆を曲げ文を舞はす如きことあらず。故に晉の趙穿が君を弑するや、太史書して趙盾弑其君と曰ひ、許の世子が藥を進めて父卒するや、太史書して止弑其君と曰ひし如き、皆嚴格に名教を維持せむとするものならずや。故に孔子は太史の直筆に従ひて、趙盾及び許の世子止の罪を正せり。しかも趙盾の裏面に趙穿あること、及び世子止の罪は獨り藥を嘗めざるに在りしことは、魯の史官が事實として顛末を策書せし魯の春秋に詳なりしならむ。崔杼の亂に太史書して崔杼弑其君と曰ひしかば、崔杼これを殺しぬ。その弟嗣ぎて書すること前の如くに

して亦殺さる。その弟復た書するや、崔杼遂に含しぬ。南史氏は太史盡く死せりと聞き、自ら簡を執りて往きしに、既に書せりと聞きて、乃ち還りぬ。夫れ簡は一札の義にして、策は數簡を連編したるものなり。簡は一行三十字を過ぐるを得ずと雖も、策は百字以上を書するを得。故に簡に書するは事實の大綱にして、策に書するは事實の顛末なり。南史氏が策を執りて往かずして、簡を執りて往きしは、彼の目的が崔杼弑<sub>二</sub>其君<sub>一</sub>の五字を直筆せむと欲するに在りて、事實の顛末を詳敘せむと欲するに在らざればなり。韓非子の姦劫弑<sub>二</sub>臣<sub>一</sub>篇に春秋の文を引きて、崔杼の亂に賈舉が君を射て股に中て、遂に戈を以て斫り殺せしことを記せり。其の記事は必ずしも三傳の文と同一ならざれば、韓非の引きし春秋は、魯史が事實として策書せし魯の春秋ならむ。魯の春秋は魯の史官が事實として顛末を策書せしものなり。而して孔子の春秋は太史の直筆に由りて筆削せしものなれば、魯の春秋と孔子の春秋とは兩兩相待ちて、孔子の微言始めて領解すべきなり。故に趙盾の事に就いて魯史は已に事實として趙穿が靈公を弑せし顛末を策に書しぬ。然るに孔子が太史の直筆に循ひて、晉趙盾弑<sub>二</sub>其君夷臯<sub>一</sub>と書せしは、趙盾が正卿として、趙穿の罪を問はざるのみならず、却つて趙穿をして新君を立てしめしは、趙穿の弑逆に同意せりと見做すべければなり。また許の世子止に就いて、魯史は已に事實として許の悼公が世子止の藥を飲みて卒せし始末を策に書しぬ。然るに孔子が太史の直筆を取りて、許世子

止弑<sub>二</sub>其君夷<sub>一</sub>と書せしは、世子の輕忽なる、其の結果自ら君父を醜毒するものと同一なればなり。孔子の深意は蓋し當時天下の君父を醜毒するものが、假りて口實と爲さむことを恐れしのみ。他に宣公四年に鄭公子歸生弑<sub>二</sub>其君夷<sub>一</sub>と書せるが如きも、亦これに同じ。故に魯の國史と孔子の春秋とを對比すれば、容易にその事實の真相と、孔子が深意を寓せし名教的訓戒とを窺ひ知るべし。然るに歐陽修これを察せずして、春秋の文中に趙穿が君を弑せし記事なく、また許の世子止が藥を進めし記事なきを以て、直ちに此の事實を抹殺して、趙盾が實に君を弑し、世子止が實に君を弑せりと爲すは、孔子の春秋が魯の國史と綱目相須ちて、離るべからざるものなるを知らざるのみならず、亦實に簡策の別を知らざるものなり。孔子の春秋は太史の簡書に因りしものにして、事實の大綱なり。魯の國史は史官の策書にして、春秋の傳疏と爲すべきものなり。これを朱熹の通鑑綱目に綱目を立て、袁黃の歴史綱鑑補に綱鑑を立てしに比すれば、春秋は綱にして、魯史は目なり、鑑なり。綱に由りて目を擧ぐれば、其の文は史といふ史的事實を知悉すべく、鑑に由りて綱を顧みれば、其の義は丘竊に取るといふ孔子の大義名分論を領會すべきなり。然るに魯史散佚して後世に傳はらざりしかば、今日孔子の微言を窺はむと欲するものは、餘儀なく三傳に由らざるべからず。孔子の死後に三傳の出づるは、孔子の豫期する所に非ず。況や後世に數十百家の註疏出づるに於てをや。三傳各その見る所を異にし、數



十百家の註疏また各その説を殊にし、千有餘年間、甲論じ乙駁して、殆ど聚訟の如し。これ王安石が春秋を罵倒して、斷爛朝報と曰ひし所以ならずや。

試に春秋の書法を論せむに、一事一物、これを記するに必ず時、月、日の三者に繋ぐるは、春秋の正式なり。春二月癸亥日有食之とあるが如き、これなり。然れども事實の性質により、或は日を略し、或は月を省くことあり、春王正月公即位の如きは日を略し、秋大水の如きは月と日とを略したるものなり。たゞ春夏秋冬の四時の如きは、記事の有無に關せず、必ず具書せざるはなし。桓公の十七年五月に夏の字なく、昭公の十年十二月に冬の字なきは、必ずしも舊史の闕文に非ずして、孔子以後の脱文ならむ。三傳の經文に異同あるが如きも、孔子以後の錯誤ならむ。司馬遷嘗て春秋の文、數萬を成すと曰ひしは、固より概算にして信すべからず。三國の時、張晏嘗て遷の誤を訂して、春秋の文は僅に一萬八千字と曰ひしも、宋の李燾は精細に調査して、張晏の計算よりも更に一千四百二十八字を闕くと曰ひぬ。則ち今日傳はる所の春秋の經文は、必ずしも筆削の眞本に非ざるを知るべし。

夫れ春秋は二百四十二年の紀なり。一百二十國の興亡史なり。博く世道の隆汙を稽へ、深く人心の聚散を究め、上は天道の變異を察して、日食、地震、水旱、雨雹、蝻螟等に及び、下は人事の吉凶を記して、朝聘、會盟、伐、滅、弑殺、卒葬等に及び、日食凡そ三十六、君を弑するもの三十六、國を

滅するもの五十二、諸侯出奔して社稷を保つを得ざるものに至りては、殆ど枚擧するに遑あらず、則ち二百四十二年間の事變は一切この中に網羅せられざるはなし。しかも何如に紛糾せる事變も必ず一句の中に取容せられしかば、歐陽修の所謂簡にして法ありとの一言は、尤も中的の言なり。然れども魯史亡びて孔子の春秋孤立せる今日に方りて、讀者をして孔子の本意が那邊に在るかを領解するに苦しましむるは、至簡の弊と謂はざるを得ざるなり。

春秋に公羊・穀梁・左・鄒・夾の五傳ありて、學者各自ら門戸を立て傳統を重んずるは、漢魏六朝の學風なりき。就中公羊傳は公羊高首めてこれを子夏に受けしものにして、胡毋生これを漢初に傳へて博士と爲り、公孫弘董仲舒その傳統を承け、後に嚴彭祖・顏安樂の二家と爲れるものなり。穀梁傳は公羊傳と同じく穀梁赤が子夏より受けしものにして、魯の申公これを漢初に傳へ、劉向・尹更始・尹咸・翟方進など、皆その學を傳受せしものなり。左氏傳は左丘明が夫子の微旨を述べしものにして、漢の文帝の時、張蒼これを傳へ、賈誼これを承け、劉歆に至りて最も盛にこれを宣傳せしものなり。而して鄒氏・夾氏の二傳に至りては、齊梁以前に亡びしかば、五傳中、公羊・穀梁・左氏のみが、一盛一衰、互に消長を爲せしが、唐宋以後に至り、左傳の勢力最も盛なり。

三傳の説によれば、人と書し、名を書するは、貶するものにして、爵を書し、字を書するは、褒む

るものなり、氏を去り、族を去るは、貶するものにして、族を稱し、氏を稱するは、褒むるものなりと曰へり。これ果して孔子の本意を得たるものなりや否や。呂大圭の春秋五論に名字爵族を以て褒貶を爲すといふ説の非なるを辨するは、先づ我心を獲たるものなり。故に予は韓愈の所謂謹嚴は、必ずしも名字爵族の裏に褒貶を寓するを稱せしものに非ずして、名分上より尊王の大義を鼓吹するを稱せしものと主張す。且つ春秋の文は字法あり、句法あるも、章法なし、篇法なし。而して字法句法は文典的に整修せしのみにして、修辭的に文飾せし所なし。これ予が春秋に文學上の價值少きを憾む所以なり。

三傳に特色あるは、三氏に特長あればなり。左氏は史家の資格を以て、力を記事に盡くし、公羊氏穀梁氏は經生の資格を以て、意を釋經に用ふ。故に左傳は史學として價值あり。公羊傳、穀梁傳は釋經家として名譽あり。顧ふに左氏は嘗て魯の史官たりしかば、左傳は蓋し孔子の由りし所の魯史を取りしものあらむ。故に左傳は三傳中の巨擘にして、尤も信據すべきもの多し。而して秦火以後に三傳の復た世に出づるや、先後あり、盛衰ありき。左丘明は孔子に親炙せしものにして、論語に巧言令色足恭は左丘明これを恥づ、丘も亦恥づ、怨を匿して其の人を友とするは左丘明これを恥づ、丘も亦恥づとある、即ちこれなり。孔安國の注に左丘明は魯の太史と曰ひ、皇侃の疏に左丘明は春秋を孔子に

受けしものなりと曰ひぬ。然るに程頤が左丘明を以て古の聞人と爲せしは、取るに足らざる臆説のみ。公羊高及び穀梁赤は俱に子夏の流を酌みしものなり。晉の荀崧の上疏に、公羊高は親ら子夏に受くと曰ひ、漢の應劭の風俗通に、穀梁赤は子夏の門人と曰ひぬ。故に公羊傳、穀梁傳の成りしは、蓋し左傳の後に在らむも、漢代に公羊博士、穀梁博士を置きしは、却つて左傳の前に在りき。公羊傳は武帝の建元五年に始めて博士を立て、穀梁傳は宣帝の甘露三年に始めて博士を立てしも、左傳は哀帝の世に劉歆始めて學官に立てむことを請ひ、而して平帝の時に始めて博士を立てしかば、武帝の建元五年を距ること、百三十年の後なり。こゝに於て左傳の文を疑ふもの、前に朱熹ありて、左傳は秦の時の文字なりと曰ひ、後に清の康有爲ありて、左傳は劉歆の僞作なりと絶叫せり。夫れ左傳が左丘明の作なりしことは、孔安國・司馬遷以後、會て疑を容るゝものなかりき。故に劉歆が左傳を學官に立てむと欲し、太常博士を責讓して、諸儒の怨恨を買ひし時、一人の起ちて左傳の僞作を疑ひしものあらず。光武帝の建武四年に公卿、大夫、博士が左氏博士を立つるの可否を論ずる時、范升は左氏を攻撃し、韓歆・許淑は左氏を辨護し、甲論乙駁、日中に至りて猶ほ決せざりき。しかも當時一人も左傳を丘明の作に非すと主張せしものあらず。後ち肅宗の時に賈逵、服虔など、盛に左氏を鼓吹して、他の二傳に勝ることを辯疏するや、何休は公羊墨守、左氏膏盲、穀梁癡疾を著し、鄭玄また發墨守、鍼膏盲、起癡

疾の説を立てしも、當時の學者は何人も左傳を後人の假託と主張せしものなかりき。然るに後世に至りて、左丘明に二人あり、一は左氏にして丘明と名づくるもの、一は左丘氏にして明と名づくるものなり。而して春秋傳を作りしは左氏の丘明にして、論語に見はるゝものは左丘氏の明なりと主張するものあり。これ司馬遷の報<sub>三</sub>任少卿<sub>一</sub>書に左丘失明、厥有<sub>三</sub>國語<sub>一</sub>を證據として、左氏以外に左丘氏あるを主張するものなりしも、遷の句法に由來破格多し。且つその文字に脱語なきを保證すべからず。若し左丘失明、厥有<sub>三</sub>國語<sub>一</sub>の二語に誤謬なしとすれば、春秋傳を作りしもの、却つて左丘氏の明ならずや。果して然りとすれば左氏傳と稱すべからずして、左丘傳と稱すべきに非ずや。要するに左氏の丘明たること明なり。而して唐に至りて啖助、趙匡、始めて起ちて左氏の丘明ならざるを疑へり。夫れ漢は春秋を去ること遠からざれば、孔安國、司馬遷、劉歆、班固の説は皆準據すべきに幾し。故に范升、何休の徒は務めて左氏に反對せむとするものなり。しかも皆左氏の丘明なるを信じぬ。唐は左氏を去ること最も遠ければ、傳聞必ず精確ならざるなり。而して啖助、趙匡、獨り左氏の丘明ならざるを疑ふ。これ漫に臆見を出だして、自ら聰明を炫はむとするものなり。況んや朱熹に於てをや。況んや又康有爲に於てをや。若し康有爲の説の如くに、左傳を劉歆の僞作とすれば、康有爲は實に劉歆の忠臣にして、劉歆の文章的手腕を司馬遷以上と過信し、同時に左傳の價値を下げて、五百年前の文學を五

百年後に左遷するものなり。

第十章 彼の子孫世系

世次	氏名	時代	略傳
一	孔丘	春秋(周)	字は仲尼。
二	孔鯉	春秋(周)	鯉の生るゝや、魯の昭公鯉魚を以て孔子に賜ふ、孔子これを榮とし、因つて鯉を以て名づけ、字を伯魚と曰ふ。鯉の年五十、孔子に先だちて卒せり。
三	孔伋	春秋(周)	字は子思、鯉の子、學を曾子に受け、中庸を著せり。
四	孔白	春秋(周)	字は子上、伋の子、齊の威王召して相と爲さむとせしも、應せず、年四十七にして卒せり。
五	孔求	春秋(周)	字は子家、白の子、楚王召し、も、應せず、四十五にして卒せり。
六	孔箕	春秋(周)	字は子高、求の子、魏の相と爲る、年四十六にして卒せり。
七	孔穿	春秋(周)	字は子高、箕の子なり。楚、魏、趙交も聘せしも就かず、諷言十二

一三	一二	一一	一〇	九	八
孔	孔	孔	孔	孔	孔
霸	延年	武	忠	騰	謙
				前	
				(周) 國	
<p>謙は一に慎に作り、また武に作れり。字は子順、穿の子なり。魏の安釐王の相と爲り、文信君に封せられ、年五十七にして卒す。子三人あり、長を鮒と曰ふ、孔叢子二十一篇を著せり。次を騰と曰ひ、次を樹と曰ふ。</p> <p>字は子襄、謙の次子なり、漢の高祖十二年、魯を過ぎ、大牢を以て孔子を祀り、騰を封じて奉祀君とす、惠帝の時、徴されて博士と爲り、年五十七にして卒せり。</p> <p>字は子貞、騰の子、文帝徴して博士とす、年五十二にして卒せり。</p> <p>字は子威、忠の子、文帝の時に博士と爲れり。</p> <p>武の子、武帝の時に博士と爲り、少傅に任せられ、年七十一にして卒せり。</p> <p>字は次孺、延年の子、昭帝徴して博士と爲し、宣帝の時、出で高密の相と爲り、元帝の時、太師と爲り、爵關内侯を賜はり、食邑八百戸、褒成君と號す、年七十二にして卒せり。</p>					

一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二
孔	孔	孔	孔	孔	孔	孔	孔	孔
福	房	均	志	損	曜	完	羨	震
前漢			後漢		魏			
<p>霸の子、成帝の時に關内侯を襲ぐ、年六十二にして卒せり。</p> <p>福の子、哀帝の世に關内侯を襲げり。</p> <p>字は長平、房の子、王莽の時に尙書郎と爲り、褒成侯に封せられ、食邑二千戸、年八十六にして卒せり。</p> <p>均の子なり、光武帝の時に大司馬と爲り、褒成侯を襲ぎ、元成と諡せらる。</p> <p>字は君盛、志の子、明帝の永平十五年に褒成侯を襲ぎ、和帝の永元四年に褒成侯に改封せられ、食邑一千戸。</p> <p>字は君曜、損の子、褒成侯を襲げり。子二人、長を完、次を讚と曰ふ。</p> <p>曜の子、褒成侯を襲ぎ、食邑百戸、早く卒して子なし、魏の文帝乃ち完の弟讚の子羨をして封を襲がしむ。</p> <p>字は子餘、魏の文帝の黄初元年に宗聖侯に封せらる、食邑百戸。</p> <p>字は伯起、羨の子、宗聖侯を襲ぐ、晋の武帝の時、改めて奉聖</p>								

三一	三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三
孔長孫	孔渠	孔文泰	孔靈珍	孔乘	孔鮮	孔懿	孔撫	孔嶷
南朝						晋		
<p>嶷侯に封せられ、食邑二百戸、年七十五にして卒せり。          字は成功、震の子、奉聖亭侯を襲ぎ、年五十七にして卒せり。          嶷の子にして、初め孝廉に擧がり、大尉掾に辟され、豫章太守と爲り、封を襲ぎて卒せり。          撫の子にして、東晋の世に奉聖亭侯を襲ぎ、從事中郎を兼ね。          字は鮮之、懿の子なり、宋の文帝の元嘉十九年に奉聖亭侯を襲ぎ、後ち崇聖侯に改封せらる。          字は敬山、鮮の子なり、元魏の孝文帝の時に崇聖太夫と爲る、食邑五百戸。          乘の子、孝文帝の太和十九年に崇聖侯に封せらる、食邑二百戸。          靈珍の子、崇聖侯を襲ぎ、年五十八にして卒せり。          文泰の子にして、崇聖侯を襲ぐ。          渠の子、崇聖侯を襲ぐ、北齊の文宣帝の時、改めて恭聖侯に封せられ、食邑一百戸、後周の宣帝の時、鄒國公に拜し、年六十にして卒せり。</p>								

三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九
孔嗣愨	孔德倫	孔崇基	孔璲之	孔萱	孔齊卿	孔惟陞	孔策
唐							隋
<p>四にして卒せり。          長孫の子なり、隋の煬帝封じ紹聖侯と爲す、食邑百戸、年七十にして卒せり。          嗣愨の子なり、唐の高祖の武徳九年に褒聖侯に封せらる、年七十二にして卒せり。          德倫の子なり、中宗の世に褒聖侯を襲げり。          字は藏暉、崇基の子、玄宗の開元五年、褒聖侯を襲ぎ、二十七年改めて文宣公に封せられ、兗州長史に補す、安祿山の亂に寧陵に寄寓して卒せり。          王の子にして、文宣公を襲ぎ兗州泗水令を兼ね。          萱の子、徳宗の建中三年に文宣公を襲げり。          齊卿の子、憲宗の元和十三年に文宣公を襲げり。          惟陞の子、武宗の會昌十二年に文宣公を襲ぎ、年五十七にして卒せり。</p>							

四〇	孔	振
四一	孔	昭儉
四二	孔	光嗣
四三	孔	仁玉
四四	孔	宣
四五	孔	延世
四六	孔	宗愿

五代

字は國文、策の子なり、懿宗の時、進士に及第し、祕書省校書郎に除せられ、後ち封を襲ぎ文宣公と爲り、年七十四にして卒せり。  
 振の子にして、兗州司馬、祕書郎に歴任し、後ち文宣公を襲ぎ、曲阜令を兼ね、年六十にして卒せり。  
 昭儉の子、昭宗の時に泗水主簿と爲り、未だ封を襲がざるうち人の爲に殺さる。  
 字は溫如、光嗣の子、後唐の時、文宣公を襲ぎ、後晋の天福中、曲阜令と爲り、後周の太祖命じて監察御史を兼ね、兵部尙書に拜す。  
 字は不疑、仁玉の子なり、宋の乾徳中、曲阜主簿より、黃州軍事推官、司農寺丞、太子右贊善大夫等に歴任し、封爵を襲げり。  
 字は茂先、宣の子なり、眞宗の世に曲阜令と爲り、文宣公を襲ぐ。  
 延世の子なり、天禧五年に文宣公を襲ぐ、卒して子無し、從弟宗愿祀を承く。  
 四十四世宣の子、四十五世延世の弟に延澤といふものあり、宗愿字は子莊、延澤の子なり、寶元二年に國子監主簿と爲り、文

四七	孔	若蒙	宋
四八	孔	端友	宋
四九	宗北	孔	金
	宗南	孔	宋
五〇	北	孔	金
	北	孔	宋
	北	孔	金
	北	孔	宋

宣公を襲ぐ、後改めて衍聖公に封せらる。  
 若蒙、若虚は俱に宗愿の子なり、若蒙字は公明、熙寧の初に衍聖公を襲ぎ、元祐元年改めて奉聖に封せられしも、後ち事に坐して廢せらる。弟若虚字は公實、封を襲ぎて衍聖公と爲れり。  
 字は子交、若虚の子なり、徽宗の崇寧三年、衍聖公を襲げり、卒して子なし、弟端操の子玠を以て祀を承けしむ。後ち摺、文遠、萬春、洙の三世相嗣ぐ、これを南宗と曰ふ、而して衍の弟璠は別に封を襲ぎ、拯、摠これを承く、これを北宗といふ。  
 端友の弟端操の子にして、紹興二年衍聖公を襲げり。  
 端操の次子にして、玠の弟なり、金の天眷三年、衍聖公を襲ぎしが、年三十八にして卒しぬ、子拯摠皆相襲げり。  
 玠の子にして、字を季紳と曰ふ、宋の高宗の紹興中に衍聖公を襲げり。  
 玠の子にして、字を元濟と曰ふ、金の照宗の時に衍聖公を襲げり。

五五	五四	五三		五二		五一		宗 孔 摠
		宗北	宗南	宗北	宗南	宗北	宗南	
孔 克 堅	孔 思 晦	孔 治	孔 洙	孔 湏	孔 萬 春	孔 元 措	孔 文 遠	
元			宋	金	宋	金	宋	
<p>字は璟夫、思晦の子なり、仁宗の時に徴されて同知太常禮儀院事と爲れり。</p> <p>字は明道、若愚七世の孫なり、元の仁宗封じて衍聖公と爲せり。</p> <p>字は璟清、萬春の子なり、宋の理宗紹定四年衍聖公を襲げり。</p> <p>字は世安、四十七世若蒙、若虚の弟若愚の六世の孫なり、元の成宗の元貞中、封じて衍聖公と爲せり。</p> <p>字は昭度、元措の弟元紘の孫なり、元措子なし、湏を養ひて、これを子と爲す、因りて衍聖公を襲げり。</p> <p>字は者年、文遠の子なり、宋の理宗寶慶二年、衍聖公を襲げり。</p> <p>字は夢得、摠の子なり、金の章宗の明昌三年に衍聖公を襲げり。</p> <p>字は紹先、措の子なり、宋の光宗の紹熙四年に衍聖公を襲げり。</p> <p>字は紹先、摠の子なり、金の章宗の明昌三年に衍聖公を襲げり。</p> <p>字は夢得、摠の子なり、金の章宗の明昌三年に衍聖公を襲げり。</p> <p>字は者年、文遠の子なり、宋の理宗寶慶二年、衍聖公を襲げり。</p> <p>字は昭度、元措の弟元紘の孫なり、元措子なし、湏を養ひて、これを子と爲す、因りて衍聖公を襲げり。</p> <p>字は璟清、萬春の子なり、宋の理宗紹定四年衍聖公を襲げり。</p> <p>字は世安、四十七世若蒙、若虚の弟若愚の六世の孫なり、元の成宗の元貞中、封じて衍聖公と爲せり。</p> <p>字は明道、若愚七世の孫なり、元の仁宗封じて衍聖公と爲せり。</p> <p>字は璟夫、思晦の子なり、仁宗の時に徴されて同知太常禮儀院事と爲れり。</p>								

五六	五七	五八	五九	六〇	六一	六二
孔 希 學	孔 訥	孔 公 鑑	孔 彥 縉	孔 承 慶	孔 宏 緒	孔 宏 泰
孔 聞 韶						

明

字は士行、克堅の子にして、衍聖公を襲ぎ、洪武十四年に年四十七を以て卒せり。

字は言伯、洪武十七年に封せられて衍聖公を襲ぎ、建文二年年四十三を以て卒せり。

字は昭文、訥の子なり、建文二年衍聖公を襲ぎ、同四年に年二十三を以て卒せり。

字は朝紳、公鑑の子なり、甫めて十歳にして、衍聖公を襲ぎ、景泰六年に年五十五を以て卒せり。

字は永祚、彥縉の子なり、年三十一、未だ爵を襲がずして卒し衍聖公を追贈せり。

宏緒字は以敬、宏泰字は以和、並に承慶の子なり、宏緒は英宗の時に一旦爵を襲ぎしも、成化五年爵を奪はれ、弟宏泰兄に代りて爵を襲ぎ、年五十四にして卒せり。

字は知德、宏緒の子なり、弱冠にして爵を襲ぎ、嘉靖二十五年に卒せり。

六三	孔貞幹	字は用濟、聞韶の子なり、嘉靖二十五年、衍聖公を襲ぎ、同三十五年、年三十八を以て卒せり。
六四	孔尙賢	字は象之、貞幹の子なり嘉靖二十二年に生れ、同三十五年、衍聖公と爲り、年七十八を以て卒せり。
六五	孔衍植	字は懋甲、貞幹の弟貞寧の孫にして、尙賢の弟尙坦の子なり、幼にして孤、母に事へて能く孝、封せられて爵を襲げり。
六六	孔興燮	字は起呂、衍植の子なり、順治五年、衍聖公を襲ぎ、康熙六年に卒せり。
六七	孔毓圻	字は鍾在、興燮の子なり、康熙六年、衍聖公を襲げり。
六八	孔傳鐸	字は振路、毓圻の子なり、雍正元年、衍聖公を襲げり。
六九	孔繼護	字は體和、傳鐸の子なり年二十三にして卒し、雍正二十三年に衍聖公を追贈せらる。
七〇	孔廣榮	字は京玄、繼護の子にして、雍正十三年、衍聖公と爲り、年三十一にして、乾隆八年に卒せり。
七一	孔昭煥	字は曝明、廣榮の子なり、雍正十三年に生れ、乾隆九年衍聖公と爲り、同四十七年に卒せり。

清

七二	孔憲培	字は養元、昭煥の子なり、乾隆二十一年に生れ、同四十八年に衍聖公と爲り、同五十八年に卒せり。
七三	孔慶鎔	字は治山、憲培の弟憲增の子なり、乾隆五十二年、同五十九年に爵を襲ぎ、道光二十一年に卒せり。
七四	孔繁灝	字は文淵、嘉慶十一年に生れ、道光二十一年に衍聖公と爲り、太子太保に進み、同治元年に卒せり。
七五	孔祥珂	字は觀堂、道光二十八年に生れ、同治二年に衍聖公と爲り、光祿大夫に任じ、光緒二年に卒せり。
七六	孔令貽	字は燕庭、同治十一年に生れ、民國八年に卒せり。
七七	孔徳成	字は達生、民國九年に生れて今日に至れり。

第十一章 餘論 一

孔子の先進に老子あり、後進に墨子あり、俱に春秋時代を代表する偉人なりしも、孔子は特に其の





中心人物なり。故に老子は個人として孔老と並稱せられ、また道家は學術上より儒家に對稱せらる。墨子も亦個人として孔墨と並稱せられ、墨家は學術上より、儒家に對稱せらるゝものなれば、韓非の顯學に儒墨を擧げて、儒分れて八と爲り、墨分れて三と爲ると曰ひ、孟子も亦楊墨の道息まざれば、孔子の道著はれずと曰へり。孔老の對稱は西漢以後に起りしも、孔墨の對稱は先秦以前に始りて、孟子及び韓非子時代に於て、墨の勢力が優に儒に對抗するに足るを察知すべきなり。

三子の性格に就きて辯すれば、老子は本來智の人にして、意を兼ねるも、情に於て薄きものなり。故に彼が禮に通じ、故實に精しかりしも、理智の人にして、嘗て柱下の史たりしに由れり。これ孔子が周に適きて禮を彼に問ひし所以なり。しかも意氣嶮嶮の彼は、時世の遂に救濟すべからざるを看破し、また禮により興りし周が禮に由りて亡びんとする運命に在るを目撃し、禮を忠信の薄らぎしものにして亂の首めなりと罵倒するに至れり。孔子が禮を問ひし時は、彼の思想已に一變せし後なれば、孔子の豫期は全く裏切られて、彼の孔子に對する態度は、猶ほ黃石公の張良に於けるが如し。これ彼の性格が本來智の人にして、意を兼ねるも、情に於て薄きを知るべきなり。

孔子は本來情の人にして、智と意とを兼ね、所謂智仁勇の三徳を兼備せるものなり。溫良恭儉讓の五字は能く孔子の聖徳が情本位なるを發揮し、溫而厲、威而不猛、恭而安の三句も能く孔子の仁にして勇あるを説破せるものなり。特に孔子に、學びて厭はざる智と、誨へて倦まざる仁と、義を見て爲すの勇あるは、社會のあらゆる階級より、百世仰慕せらるる所以なり。

墨子は意の人にして、情を矯むるものなり。彼の主義は儉約主義なり(薄葬) 功用主義なり(非禮) 勞働主義なり。近世吳虞が墨子を勞農主義と謂へる如く、彼は禹の自操(稗) 腓無(胙) 脛無(毛) 毛を理想として、一裘一褐、日夜休まず、自ら苦むを以て主義と爲せり。莊子が評して墨子眞天下之好也、將求之不<sub>レ</sub>得也、雖<sub>ニ</sub>枯槁<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>含也、才士也夫と曰ひしは、彼が徹頭徹尾意の人にして、情を矯むるものなるを看破せるものなり。

三子の學術に就きて辯すれば、老子が文明を呪詛すると、孔子が大義名分を重んずると、墨子が階級を打破せむとするは、全く徑路を異にすといへども、三子の説が時勢の反響にして、周末の繁文縟禮、徒に形式に拘はりて、誠意足らざる病的缺陷を矯正せむと欲するは一なり。たゞ同一にこれを矯正し、これを救濟せむと欲するも、老子の藥劑は魔酔劑の如く、局部の病根を療治せむ爲め、全身機關の作用を中止せむとするものなり。何となれば老子は人間の人爲・人意・人智・人情を全滅せむとするものなればなり。墨子の藥劑も亦劇藥の如し。要は匙加減に在るのみ。然るに墨子の調劑は往々その度を過ごすを以て、治療上、能く主なる目的を達すと雖も、藥の副作用は却つて恐るべき他の新たな

る病症を發することあり。獨り孔子の教は強壯劑、滋養藥の如く、身體を完全に發達せしめ、筋肉血液、總べて好結果を來たして、病源自ら除去するに至る。

老子の絶叫せる絶學無憂の一語は、人間自然の要求なりし智識慾を抑遏するものにして、向上的精神に戻り、進歩的氣象を亡ぼすものなり。絶聖棄智の一語は、俱に予を聖と曰ふ當時の風潮と逆行するものなれば、亦時代錯誤なるを免れず。孔子が老子を見て猶龍邪との歎ありしは、老子の非凡の材は、復た人間界の物に非ず、老子の高遠なる理想は、現實の社會を超越して、天下の經綸に何等の交渉なきを説破せしものに非ずや。川北温山が老子猶龍之嘆、蓋謂龍之不可網、不可綸、不可罾、不可下羊豕狐狸龜鼈之可<sub>レ</sub>以食<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>以衣<sub>レ</sub>也と曰ひしも、亦隻眼を具すと謂ふべし。況んや老子が絶仁棄<sub>レ</sub>義と曰ひしに於ては、韓愈の所謂煦々爲<sub>レ</sub>仁、孑々爲<sub>レ</sub>義ものなり。禮を亂の首めと稱し、前識を愚の始と稱するが如き、一切の文化を打破せむとするものなり。

孔子の教は老子の絶學に反して、孔子自身が學びて厭はざるのみならず、門人に對して常に學んで時に習ふの必要を説き、嘗て終日不<sub>レ</sub>食、終夜不<sub>レ</sub>寢以思、不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>學也と曰ひ、また我非<sub>レ</sub>生而知<sub>レ</sub>之者、好<sub>レ</sub>古敏以求<sub>レ</sub>之者也と曰へり。また老子が仁義禮智を罵倒せるに反して、孔子は仁を以て百行の根本と爲し、禮を以て仁を求むる方と爲し、顔淵が仁を問ひし時、對へて非<sub>レ</sub>禮勿<sub>レ</sub>視、非<sub>レ</sub>禮勿<sub>レ</sub>聽、非<sub>レ</sub>禮勿<sub>レ</sub>言

非<sub>レ</sub>禮勿<sub>レ</sub>動と曰ひぬ。蓋し孔子は仁を以て學問の頂點、修養の終點と爲し、禮を以て學問の起點、修養の出發點と爲すものにして、この起點より頂點に達したるもの、即ち至人たるなり、聖人たるなり。

墨子の道とする所の兼愛と薄葬とに就きては、孟子これを攻撃し、節用、無差等、非樂、勞動、非戰に就きては、荀子これを攻撃せり。顧ふに墨子の兼愛は彼の非戰主義より發せしものにして、必ずしも父を無みするものと謂ふべからず。我が子を愛する如くに、人の子を愛せよと曰ふは、大體の標準論にして、所<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>施すこと親より始むるものなり。彼は決して人の子を愛するが如くに我が子を愛せよと曰ふものに非ず。孔子も亦嘗て汎愛<sub>レ</sub>衆而親<sub>レ</sub>仁と言へり。墨子の薄葬は彼の節用主義より發したるものにして、人情に反し風教に害あるものなり。特に人情本位の儒教の見地よりすれば、大に攻撃するに價せり。しかも儒教の厚葬も、當時已に弊害の大なりしことは、韓非子に父死すれば破産するものあるのみならず、甚だしきは子を債して葬儀の費用を辨するものありと曰へるによつて知るべし。孟子の意も亦決して此の如き奢侈を教唆するものに非ず。たゞ人子の情として満足し得べき程度に止まらむとするのみ。特に孔子に於ては、葬儀の厚薄は其人の貧富の程度に準應するものと爲せり。子路曰<sub>レ</sub>傷哉貧也、生無<sub>レ</sub>以爲<sub>レ</sub>養、死無<sub>レ</sub>以爲<sub>レ</sub>禮也、孔子曰<sub>レ</sub>啜菽飲水盡<sub>レ</sub>其歡、斯之謂<sub>レ</sub>孝、斂手足形、還

葬而無<sub>レ</sub>槨、稱<sub>レ</sub>其財、斯之謂<sub>レ</sub>禮、檀弓下

則ち墨子の薄葬は當時厚葬の弊を救済せむとするに在りしも、所謂匙加減が適度を過ぎて、唯に財なきものに薄葬を強ふるのみならず、富貴にして資産あるものにも薄葬を厲行せむとす。これ孟子より父を無みする不孝の教と彈劾せらる、所以なり。即ち老子の教が臨時の權道なりし如く、墨子の教も亦臨時の機宜にして、俱に疾病に對する臨時の應急手當に過ぎず。即ち前に敍べし魔酔劑なり、劇藥なれば、到底孔子の教の萬世の常道にして、滋養劑強壯藥なるに如かざるなり。

## 第十二章 餘 論 二

日本文化は支那文化と相密接して、殆ど分離すべからざる關係に在るなり。もし日本文化より支那文化を除き去らば、遺憾ながら日本文化は甚だ貧弱にして、頗る寂寞の觀あるべし。何となれば制度典禮の上に於ても、學術思想の上に於ても、皆支那文化の影響を蒙らざるものなければなり。果して然りとすれば、日本の文化は日本の獨得專有の國産に非ずして、外國産の輸入品と見做すべきか。物質的文化は國産獎勵の意義より、場合によりて或は排斥すべしとするも、精神的文化は決して贅澤品と見做すべきに非ず。若し我に保存すべき國粹あれば、固より自重して保存せざるべからず。しかも彼に取るべき長所あれば、亦必ず取らざるべからず。楚材晋用は必ずしも晋の耻辱に非ず。況んや一

千六百年の前に傳はりし孔子教に於ては、縱令國産ならずとも、準國産的にして、已に歴史的價值有るものなり。然らば日本が支那に發生せし孔子の教を取ればとて、日本の不名譽に非ず。日本には孔子教の輸入以前に於て、已に國體も確立し、民俗も成立せり。然るに孔子教入るに及びて、孔子の教養が我國體に順應し、我民俗に適合せるを以て、吾人の祖先はこれを取りて國教同様に看做しぬ。則ち日本には孔子教の輸入以前に於て、已に忠孝仁義の實ありしを、孔子教の輸入と同時に從來實行せしものに、更に名目を附け加へて、茲に名實を一致せしめしものなり。

日本が孔子の教を國教同様に取扱ひしことは、必ずしも日本文化の價値を減少するものに非ず。吾人は翻つて支那に誇視し、支那人に威張るべきものあるを主張せむとす。何となれば孔子の理想は支那よりも、寧ろ日本に於て、最も完全に實現せらるればなり。支那の孔子に於けるや、二千四百年來形式的に於て、最も尊敬の意思を表はせるも、その意思が果して至誠より出でしや、將た政略より出でしやは疑問なり。故に孔子は大成至聖文宣王として尊稱せられ、大成殿は至る處に魏々として靈光を發し、孔子の後裔は世々衍聖公として、歴代の帝室に優待せらるゝも、孔子の精神は未だ彼等に體験せられず、孔子の大義名分論は未だ彼等に諒解せられず。君に君たらざるものあれば、臣に臣たらざるものあり。幾度か世に革命起りしは、孔子教の根本義を失へるものなり。然るに我日本は上に萬

世一系の帝室を戴き、下に忠孝兩全を理想とする國民あり、列聖は民を視ること傷めるが如く、國民は君を視ること父母の如きは世界に比類なき良風美俗なり。故に日本は最も善く孔子の理想を實驗せるものなりとは、最近日本に來りし辜鴻銘氏の唱道せる所なり。由來支那人は口の人なり、筆の人なり、しかも行の人には非ず。中庸に好學近乎知、力行近乎仁とあるが、彼等に學を好むの智あれども、力め行ふの仁足らざるなり。故に彼等の口は能く言ふも、言ふもの必ずしも行はず。彼等の筆は斐然として能く章を成すも、文質必ずしも彬々たらず、彼等の智は能く高遠に趨るも、彼等の道は却つて卑近を遺る。

子曰、好學近乎知、力行近乎仁、知恥近乎勇、中庸、第二十章

有徳者必有言、有言者不必有徳、論語、憲問

君子名之必可言也、言之必可行情也、君子於其言無所苟而已矣、論語、子路

子貢問君子、子曰先行其言、而後從之、論語、爲政

子曰、古者言之不出、恥躬之不逮也、論語、里仁

子曰、君子欲訥於言而敏於行、論語、里仁

子曰、質勝文則野、文勝質則史、文質彬々、然後君子、論語、雍也

君子之道、譬如行遠必自邇、譬如登高必自卑、中庸、第十五章

これ孔子が言行一致を主唱し、韓非が形名參合を主張し、王陽明が知行合一を提唱せる所以なり。

且つ孔子が常に言を抑へ行を揚げて、佞者を惡み、口給を賤み、巧言利口を排斥せしは、當時言を尙び、辭令を重んじ、智辯を貴ぶ彼等の國民性を矯正せむが爲ならずや。特に孔子が三徳中智勇よりも特に重きを仁に歸して、三千の門人、顔淵以外に仁を許さざりしが如き、亦何如に孔子が重を力行の仁に歸せしかを知るべし。然るに春秋時代は勿論、孔子の死後、二千四百年の今日まで、支那に於ては行の伴はざる言のみ没頭腐心せり。然るに我日本には世界に比類なき一種特有の國體民俗を維持し來りて、國民共に鞏固なる信念の下に金甌無缺の國家を成せり。こゝに於て我君民一致して、孔子教を歓迎せしは、その秩序階級を取りしものにして、老莊學を一切受けざりしは、その平等無差別を取らざりしものなり。

老莊學の我邦に入りしは、固より孔子教に後れしも、藤原佐世の現在書目によれば、道家四百五十八卷中、老子は河上公注以下二十五部、莊子は郭象注以下二十一部あり。則ち老莊の書は宇多天皇以前に輸入せしものなり。しかも老莊の自然主義、虛無主義、及び平等主義が我國體民俗に何等の影響を及ぼす能はざりしは、我國民に鞏固なる信念あればなり。故に予は方今西洋の新思潮、即ち危険思想

が一朝侵入するも、國民の信念さへ、昔時の如くに鞏固なる以上は敢て悲觀せずと雖も、國民の信念が永遠に鞏固なりや否やは疑問なり。則ち吾人は決して太平を夢みて鼾睡を貪るべきに非ず。精神の作興は實に今日の急務なり。

辜鴻銘氏が支那は文に於て成功し、日本は武に於て成功せりと曰ひしは、一を知りて二を知らざるものなり。況んや武士道を理想的平和の世界に有害無用と謂へるに於てをや。所謂文は決して口と筆とにのみ限らず、行も亦文の最大目的なれば、日本に於ても亦文に成功せりと謂はざるを得ず。而して日本が武に於て成功せりと曰ひしは事實なり。何となれば日本は日清戦争に於て東洋の強國たるを承認せられ、日露戦争に於て世界の強國たるを承認せられたればなり。蓋し日清戦争以前の日本は歐洲人の眼よりすれば或は支那の一小屬國と看做せしものあらむ、また支那人の眼よりするも、亦或は朝鮮と同一資格に看做せしものあらむ。然るに日清、日露の二大戦役の結果、一躍して世界の五大強國の一に參せしは、偏に武によつて國威を宣揚せしものにして、戦争の一大賜物なり。吾人は戦争以外に於て、果して何の日にか斯の如き成功を收め得べきを知らざるなり。この意味に於て、吾人は中心より軍人に感謝し、武士道に满腔の敬意を表はすものなり。

然るに世界の平和を夢みて、軍備の絶対縮少を提唱するものあり。理想上、軍備の絶対縮少は國家經濟の點に於ても、尤も望まじき次第なりしも、事實問題として國防は一日も忽にすべからず。在昔非戦論を唱へし墨子は一面に於て防備の策を講じぬ。故に司馬遷の史記に墨翟善守禦と曰ひしも、必ずしも非戦論と防備策の矛盾を咎むるものに非ず。非戦論は彼の理想なりしも、敵國の侵略なきを保證すべからず、敵國の侵略ありとすれば、我にも亦國防上、相當の防備策を講せざるべからざればなり。治に居て亂を忘れざるは智者の事なり。況んや過去に於て國威を世界に發揚せし軍人と武士道とに感謝と敬意とを表するに於ては、固より當然の事ならずや。

辜鴻銘氏は武士道を以て理想的世界平和を攪亂するものと謂ひぬ。彼果して武士道を理解せりや、否や。武士は往時の智識階級にして、學問あり教育あるものなれば、古の武士道は即ち今の紳士の道なり。決して暴虎馮河、死して悔ゆるなき蠻勇を指すものに非ず。真正なる武士道は、決して武の一邊に偏するものならずして、文武の兩方面を完全に發達せしめ、智仁勇の三達徳を圓滿に具備せるものならざるべからず。

試に徳川時代の教育史を一讀するに、諸藩の學校は、皆武士の學問教育所なり。而して其の教程は文武兩道にして、文は即ち精神教育、武は即ち技術教育なれば、文は徳育を主とし、智育を加味し、武は體育を目的とせるものなり。故に武の方面は槍術、劍術、弓術、馬術、銃砲術より、柔術、鎖鎌

術、薙刀術、水泳術に至るまで、皆體力の増進と膽力の修養とを主眼とし、文の方面は和學と漢學とを兼修せりと雖も、所謂和學は決して今の國語、國文學の範圍を總稱せるものに非ず。萬葉集、古今集などの歌集、及び源氏物語、枕草紙、狹衣物語などの女流文學は勿論、降りて徳川時代の淨瑠璃、小説、即ち近松、馬琴、春水、西鶴などの作をも一切排斥して用ひず、却つて大日本史、日本外史、日本政記、皇朝史略、國史略など、凡そ尊王の精神を發揮せるものを指して、皇學または和學と稱しぬ。則ち徳川時代の藩學の教科書は主として漢學に在りしを知るべし。これ武士教育を目的として、女子教育を度外に置ける當時の情勢より觀れば、軟文學を取らずして硬文學を取りしことは、固より當然の歸結と謂はざるを得ざるなり。

武士教育の教科書は總べて漢文にして、博く經史集に及ぶも、敢て先秦の諸子百家を取らざりしは已に述べし如く、國體の關係が然らしむるものにして、國民の信念の篤きを證すべし。則ち日本人には他の長と短とを丸呑にせず、其の可なるものを撰擇して、能く咀嚼し、能く消化するの天分あるものなり。即ち武士教育の教科書は、經書には孝經、四書、五經などあり、儒書には新語、新書、近思錄、小學、朱子語類などあり。史類には國語、國策、史記、漢書、後漢書、資治通鑑、通鑑綱目、宋元通鑑、歷史綱鑑補、綱鑑易知錄、貞觀政要、十八史略、元明史略、孔子家語、蒙求、大日本史、日

本外史、日本政記、皇朝史略、國史略などの正史、編年史及び雜史あり。集類には文選、文章軌範、唐宋八大家文、古文眞寶、唐詩選などの詩集文集ありき。而して史と集とは諸藩の取舍同じからずと雖も、四書、五經に至りては、各藩皆用ひざるはなし。特に論語孟子は武士教育の根本精神なり。しかも孟子は尙ほ多少贊否の聲なきに非ざりしも、論語に至りては萬人齊しく仰宗する所なり。これ孔子と武士道との密接關係ならずや。然るに辜鴻銘が武士道を以て理想的平和を攪亂するものと謂へるは、孔子の道を以て平和の賊と爲せるに等しきのみ。彼は未だ武士道の本領を理解せざるもののみ。論語、衛靈公篇の志士仁人無<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>生以害<sub>レ</sub>仁、有<sub>レ</sub>殺<sub>レ</sub>身以成<sub>レ</sub>仁の二句は武士道の精華にして、日本人の犠牲的精神は實に此の二句より生ずるものなり。また泰伯篇の曾子曰可<sub>レ</sub>以託<sub>レ</sub>六尺之孤、可<sub>レ</sub>以寄<sub>レ</sub>百里之命、臨<sub>レ</sub>大節<sub>レ</sub>而不可<sub>レ</sub>奪也、君子人與、君子人也の四句は、前田利家が嘗て加藤清正に告げ、清正これを體驗して忠節を完うせし所以なり。また雍也篇の子謂<sub>レ</sub>子夏<sub>レ</sub>曰、女爲<sub>レ</sub>君子儒、無<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>小人儒の二句は、備前の藩主池田光政が經世安民の道を悟りて、自ら不眠症を全治せし所以なり。

第二篇 老子考

第一章 彼の姓氏名字

史記の老莊申韓列傳に老子の姓は李氏、名は耳、字は伯陽、諡して聃と曰ふといへり。しかも聃は諡に非ずして、彼の字なるべし。晋の葛洪の神仙傳に聃を老子の號と爲して、老子欲<sub>ニ</sub>西度<sub>一</sub>關、關令尹喜知<sub>ニ</sub>其非<sub>ニ</sub>常人<sub>一</sub>也從<sub>レ</sub>之問道、老子驚怪、故吐<sub>レ</sub>舌聃然、遂有<sub>ニ</sub>老聃之號<sub>一</sub>と曰へるもの固より謬なり。説文に聃を耳漫の義と爲し、廣韻に聃を耳漫無<sub>レ</sub>輪の義と爲せば、聃の字義は耳の輪廓なきを謂ふなり。夫れ諡は死者の行迹を按じて、其の功德を稱述すべき嘉名を選定すべきものにして、決して死者の爲に名譽を毀損し、體面を侮辱すべき凶名を追贈すべからず。而して聃の字義は天刑的不具を意味する人身攻撃的文字なれば、決して諡と爲すべきに非ず。故に諡法に聃の字なし。

遷又以<sub>レ</sub>聃爲<sub>ニ</sub>老子諡<sub>一</sub>、然未<sub>レ</sub>聞<sub>ニ</sub>諡法有<sub>ニ</sub>聃字<sub>一</sub>也齊藤拙堂。老子辯四。

且つ諡の制度は殷以前に無くして、周に生まれり。禮記、檀弓に死諡周道也と曰ひ、大戴禮諡法に周公旦、太公望相<sub>ニ</sub>嗣王<sub>一</sub>作<sub>ニ</sub>諡法<sub>一</sub>と曰ひ、抱朴子に始<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>周と曰へる、これなり。而して周の諡は

賜諡あり請諡ありて私諡なし。周禮、春官に卿大夫の喪に諡を賜ひ誄を讀むとあり、禮記、檀弓に公叔文子卒す、その子戌は諡を君に請ふとあるが如き、これなり。

小喪賜<sub>レ</sub>諡、周禮、春官、大史

卿大夫之喪、賜<sub>レ</sub>諡讀<sub>レ</sub>誄、周禮、春官、小史

公叔文子卒、其子戌請<sub>ニ</sub>諡於君<sub>一</sub>、禮記、檀弓下

老子嘗て周の守藏室の史たりしも、彼の死は決して在官中のことに非ず。周の衰ふるを見、去りて關に入りし彼は一匹夫のみ。

老子匹夫耳、固無<sub>レ</sub>諡、姚鼐、老子章義序

果して彼に賜諡の資格ありや否やを疑はざるを得ず。こゝに於て聃を以て名と爲すものありしも、從ふべからず。齊藤拙堂の老子辨に戴記所<sub>レ</sub>載老聃、博識<sub>ニ</sub>典禮<sub>一</sub>、應<sub>ニ</sub>夫子問<sub>一</sub>、是誠爲<sub>ニ</sub>述而不<sub>レ</sub>作<sub>一</sub>、誠爲<sub>ニ</sub>信而好<sub>レ</sub>古<sub>一</sub>、蓋聃其名、彭其字、恐與<sub>ニ</sub>論語所<sub>レ</sub>稱一人矣と曰へる、これなり。若し聃を名とすれば、史記の所謂名耳を何に屬すべきか。こゝに於て聃を以て字と爲すものなり。司馬貞の史記老子傳の索隱に名耳字聃、今作<sub>ニ</sub>字伯陽<sub>一</sub>、非<sub>ニ</sub>正也と曰ひ、章懷太子の後漢書、桓帝紀の注に名耳、字聃、姓李氏と曰ひ、李善の文選、遊<sub>ニ</sub>天臺山<sub>一</sub>賦、及び反招隱の注に、並に史記を引き、名耳、字聃と曰へば、今の史記に聃を諡

とせるは、唐の玄宗以後の訛傳ならむ。孔子は春秋の賢士大夫を稱するに、皆字を以てし、名を以てせず。簡仲、晏平仲、蘧伯玉、臧文仲、子産の如き、これなり。況んや嘗て嚴事せし老子に限り、獨り字を稱せざる理あらむや。已に聃を字とすれば、伯陽は彼の別字ならむか。抑も亦王念孫の所謂周の幽王の時に太史伯陽ありしを混同せしものならむか。魏の杜摯の箴賦の序に、箴者李伯陽入西戎一所造と曰ひ、梁の劉勰の文心彫龍に伯陽識禮、而仲尼訪問と曰へば、魏晉以後、南北朝時代に於て、伯陽を老聃の字とせしもの少からざりしを知るべし。

聃の名字は已に辯じぬ。而して李を姓とするに就きて、神仙傳に或説として二種を擧ぐ。一は其母無<sub>レ</sub>夫、老子は母家之姓と云ふ、これ其母感<sub>二</sub>大流星<sub>一</sub>而有<sub>レ</sub>娠に據れるものなり。二は老子之母、適至<sub>二</sub>李樹下<sub>一</sub>而生<sub>二</sub>老子<sub>一</sub>、生而能言、指<sub>二</sub>李樹<sub>一</sub>、曰<sub>レ</sub>此爲<sub>二</sub>我姓<sub>一</sub>といふ。一は老聃以前に李姓ありと爲し、二は老聃を李姓の祖と爲すものなり。按ずるに老聃以前に李姓ありしや否やを知る能はずと雖も、老聃が李を姓とせしことは、孔融が幼時嘗て李膺を見むと欲し、自ら累世の通家と稱し、「先君孔子は君の先人李老君と徳を同じくし義を比して相師友す」と曰ひしに由りて知るべし。清の姚鼐の老子章義序に、李は宋の子姓の轉聲なりと曰ひしが如き、一隻眼ありと謂ふべし、必ずしも神仙傳の如くに神仙的傳説を信奉するに足らざるなり。唐の太宗が弘福寺に幸し、寺主道懿に告げて、「朕が老子を以て釋氏の前に位せしめしは、朕の祖先なるを以てのみ」と曰ひしは、唐が李姓にして、老聃と同姓なるを以てなり。

孔融年十歲、隨<sub>レ</sub>父詣<sub>二</sub>京師<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>河南尹李膺<sub>一</sub>、造<sub>二</sub>膺門<sub>一</sub>、語<sub>二</sub>門者<sub>一</sub>曰、我是李君通家子弟、門者言之、膺請<sub>レ</sub>融、問<sub>レ</sub>融曰、先君與<sub>二</sub>君先人李老君<sub>一</sub>同<sub>レ</sub>德比<sub>レ</sub>義、而相師友、則融與<sub>レ</sub>君累世通家、衆坐莫<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>歎息<sub>一</sub>、後漢書、孔融傳

莊子載、孔子陽子朱皆南之<sub>レ</sub>沛、見<sub>二</sub>老子<sub>一</sub>、沛者宋地、宋者子姓、然則老子其宋人子姓耶、子之爲<sub>レ</sub>李、語轉而然、猶<sub>二</sub>姒姓之或以爲<sub>レ</sub>弋也<sub>一</sub>、姚鼐、老子章義序

彼は耳を名とし、聃を字とし、李を姓とすれば、老子の老は果して何に屬すべきか。史記に李耳と稱するは、僅に一たび本傳に見ゆるも、老子と稱する所は本傳に十二たび見ゆるのみならず、莊周傳以下に於て、老子、または黃老の稱が數ば用ひらるゝを以て觀れば、老は必ずしも鄭玄の禮記曾子問の注に老聃は古の壽考者の號と曰ひ、また我國の伊藤馨の論語序説私攷に老者壽考者之稱、子者弟子尊<sub>レ</sub>師之稱、老子猶<sub>二</sub>後世稱<sub>二</sub>老先生<sub>一</sub>也と曰へるが如くならざるべし。況んや神仙傳に生而白首、故謂<sub>二</sub>之老子<sub>一</sub>と曰ひ、また時俗見<sub>二</sub>其久壽<sub>一</sub>、故號<sub>レ</sub>之爲<sub>二</sub>老子<sub>一</sub>と曰ひしに於ては、皆信するに足らず。皇甫謐の高士傳に以<sub>二</sub>其年老<sub>一</sub>、故號<sub>二</sub>其書<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>老子<sub>一</sub>と曰へる、亦信するに足らず。神仙傳は老子を以て其人の



稱と爲し、高士傳は老子を以て其書の稱と爲せり。且つ神仙傳に老子と稱する所以を説明するに前後二義あり。一は生時已に老人の資格ありしより名づくを爲せるものなり。晋の葛元の老子節解の自序に、生即皓然、號曰老子と曰へば、此の傳説は晋時代一般に行はれしものならむ。一は年老いて益壽康なるより名づくを爲せるものなり。要するに二者共に臆測の言なるのみ。況んや孔融が李老君と稱して、老君を一種の敬稱と爲せるに於てをや。況んや又近時胡適などが老を字とし聃を名として、春秋時代に字と名とを並稱する場合に、字を先にし名を後にする叔梁紇、孔父嘉、正考父、孟明視、孟施舍の類の如しと曰ふに於てをや。

老或是字、春秋時人、往々把字用在名的前面、例如叔梁(字)紇(名)、孔父(字)嘉(名)、正(字)考父(名)、孟明(字)視(名)、孟施(字)舍(名)、皆是 胡適、中國哲學史大綱

これ叔梁、孟明の類は已に字よりして氏と爲れるものにして、猶ほ魯の三桓が季孫、叔孫、孟孫を氏と爲せるが如きを知らざるものなり。若し老を字とすれば、禮記檀弓の張老、國語楚語の史老の如く、老聃を李老と稱すべきに非ずや。故に予は老を字とする説に従はずして、老を氏とする説を取らむと欲するものなり。

老を氏とする説は、清の姚鼐の提唱する所にして、彼の説に宋に老子あり、聃は宋人なりと曰ひぬ。

蓋し老を以て氏と爲すものは、老聃以外に老萊子、老商、老成などあればなり。顧ふに論語の述而篇に竊比我老彭の語あり。若し老彭を包咸、及び朱熹の如くに、殷の賢大夫とするも、鄭玄、及び王弼の如くに、老聃、彭祖の二人を指すものとするも、將た姚鼐の如くに、聃嘗て彭城に居る、故に老彭と曰ふとするも、老は氏にして字に非ざること明かなり。後漢の光武帝の時、皇太子嘗て間に乗じて、陛下は禹湯の明ある黄老養性の道を失へりと曰ひし如き、また禮記、莊子、及び呂氏春秋に數ば老聃を稱し、荀子に老子を擧げて慎子、墨子、宋子に對し、韓非子に解老、喻老の二篇ありし如き皆老を氏とする證據と爲すべし。

孔子曰、昔者吾從老聃、助葬於巷黨、禮記、曾子問

老聃曰、丘、止柩就道右、止哭以聽變、同上

吾聞諸老聃云、同上

孔子曰、吾聞諸老聃、曰昔者史佚有子而死、同上

老聃死、秦佚弔之、莊子、養生主

無趾語老聃曰、孔丘之於至人、其未邪、莊子、德充符

陽子居見老聃曰、有人於此、莊子、應帝王

老聃曰、王之治功蓋天下、而似不自己、同上

慎子有見於後、無見於先、老子有見於訕、無見於信、荀子、天論

荆人有遺弓者、而不肯索、曰荆人遺之、荆人得之、又、何索焉、孔子聞之曰、去其荆而可矣、老

謚聞之曰、去其人而可矣、故老謚則至公矣、呂氏春秋、貴公篇

老聃貴柔、孔子貴仁、墨翟貴兼、呂氏春秋、不仁篇

その他、賈誼の新書、劉安の淮南子鴻烈解に老聃、または老子と稱するもの多し。また漢書、楊雄傳に桓譚の言を引き、昔老聃著虛無之言兩篇、薄仁義、非禮學と曰へり。且つ孫子、吳子、管子、墨子、孟子、莊子、荀子、韓子など、皆氏を取りて書名と爲せしものなれば、老子五千餘言も、亦その氏を取りしものなるや推して知るべし。降りて漢に至りて楊雄の法言にも、亦その人を稱して老子と曰ひぬ。

老子之言道德、吾有取焉耳、法言、問道

たゞ大戴禮、虞戴德篇に昔商老彭、及仲傀、政之教大夫、官之教士、技之教庶人とあるは、老の字と仲の字と相對説するものにして、老彭は其の人の字と爲すべきか。これ包咸朱熹が論語の老彭を解して殷の賢大夫と爲せし所以なり。しかも老の一字を字とするものに非ず、老彭の二字を字と爲す、

猶ほ伯夷叔齊を字とするが如し。然れども予は老彭を字とする説は、老を氏とするの愈れるに如かずと斷言す。帆足萬里の入學新論に、孔子未嘗名先賢、況於老子、其所嚴事、據管仲感文仲例、老子蓋姓、老字彭と曰ひしは、姚鼐の老を氏とする説に暗合せるものなり。

その他、黄老の稱は盛に漢初に行はれ、老莊、老易の語は魏晉の際に流行せしもの、如し。黄老の稱は黄帝及老子を指すものなり。例へば

慎到趙人、田駢接子齊人、環淵楚人、皆學黃老道德之術、因發明序其指意、史記、孟荀傳

申子之學、本於黃老、而主刑名、史記、老莊申韓傳

韓非喜刑名法術之學、而其歸本於黃老、史記、同上

孝文帝本好刑名之言、及至孝景、不任儒者、而竇太后又好黃老之術、史記、儒林傳

陳丞相平、少時本好黃帝老子之術、史記、陳丞相世家

陳平少時家貧、好讀書、治黃帝老子之術、漢書、陳平傳

の如き、これなり。蓋し漢興りて、盛に黄老を稱せし所以は、當時天下の人心皆已に儒家の繁文を厭ひ、法家の慘酷を怨みて、ひたすら民衆の休養を渴仰せしかば、高祖の朝に蕭何曹參あり、文景の朝に太竇后あり、皆老子の無爲を假りて、天下の人心を收攬せむとす。たゞ老子の學説が個人本位にし

て、國家本位に非ざるを以て、特に黄帝を加へて社會的政治的色彩を濃厚ならしむるのみ。故に史記に於て、政治を理想とせる申不害・韓非・慎到・田駢・接子・環淵・曹參・田叔・汲黯などには、皆黄老に本づく稱せしも、經世の念なき莊周に對しては、單に老子と稱して、黄老と稱せざりし如き、亦偶然ならざるなり。しかも老子は曾て黄帝を稱述することなく、黄帝も亦曾て書を著はし、ことなし。然るに黄老を並稱するものは、蓋し儒家が祖述せる堯舜以上の人を求めて、遂に黄帝を拉し來りしものならむ。藝文志の道家に黄帝の書四種あるは、老子を私淑せるもの、假託なりしことを竝たざるなり。要するに黄老の稱には多少の經世思想ありしも、老莊の稱には、決してこの思想あらざるなり。老莊の稱は老莊二子の姓氏を並稱するものにして、魏晉の際、阮籍嵇康を首め、竹林七賢の徒が盛に唱道して、自己の放誕狂妄を縁飾せむとする所以なり。老易の稱も亦當時の流行語にして、老子の道德經と易經との二書を對稱するものなり。王弼が易經に注し、また老子に注せし如き、亦時代の好尚に順應せしもののみ。

陳澧の東塾讀書記に史記の孟荀傳を引きて、黄老の稱は孟荀時代に於て已に流行せるものなりと曰ひしは謬れり。何となれば孟荀傳に慎到、田駢、接子、環淵が黄老の術を學ぶと曰ひ、また申韓傳に申子之學、本<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>黄老<sub>一</sub>と曰ひ、韓非喜<sub>二</sub>刑名法術之學<sub>一</sub>、而其歸本<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>黄老<sub>一</sub>と曰ひしが如き、皆司馬遷の評語にして、慎到・田駢・接子・環淵・申不害・韓非の口吻より發せしものに非ざれば、これを漢初の套語と謂ふべきも、先秦の慣用語と看做すべからざればなり。而して澧がまた後漢書馬融傳を引きて老莊の稱は必ずしも魏晉の際に始まりしものに非ずして、馬融より發すと曰ひしは、予の首肯する所なり。試に馬融傳を繙くに、融嘗て友人に告げて、今以<sub>二</sub>曲俗咫尺之差<sub>一</sub>、滅<sub>二</sub>無貴之軀<sub>一</sub>、殆非<sub>二</sub>老莊所<sub>レ</sub>謂也と曰ひぬ。この老莊の二語は、實に馬融の用語なれば、當時既に已に老莊の流行語ありしを證明すべきなり。

## 第二章 彼の傳記

老聃の傳記は司馬遷の史記、劉向の列仙傳、葛洪の神仙傳、皇甫謐の高士傳に一斑を略敘せるのみなりしも、列仙傳以下の三書は聃を神仙化せむと欲して、故らに神異の事跡を稱述するものなり。たゞ史記は偉人として彼を待つと雖も、亦疎にして疑を容るべきもの多し。第一、彼の姓氏名字、第二、彼の郷貫、第三、彼の官歴、第四、孔老相見るの事實、第五、入關の事跡、第六、彼の死所など、皆然らざるはなし。

第一、彼の姓氏名字は已に第一章に述べしかば、茲に略す。第二、彼の郷貫に就きては、史記及び

神仙傳に楚の苦縣の人と稱し、列仙傳、及び高士傳に陳の人と稱し、陸德明の經典釋文序錄に陳の苦縣の人と稱せり。しかも陳は周の敬王四十一年に楚の爲に亡ぼされしかば、楚人と稱するも、陳人と稱するも、同じく苦縣に生れしを承認せるものなり。姚鼐は莊子に孔子陽子朱皆南之沛、見老子とあり、沛は宋の地なるよりして、老子を宋の人なりといふも、信すべからず。況んや人或は彼が耳を名とし、聃を字とし、聃の字義を大耳と爲して、彼を大耳國の人と謂ふものあるに於ては、誣罔の説、決して信すべからざるなり。第三、彼の官歴に就き、史記に周の守藏室の史なりと曰ひ、經典釋文序錄に周の柱下の史と爲ると曰ひしも、皆其の何王の時なるを記載せざるなり。而して神仙傳に周の文王の時を以て守藏史と爲り、武王の時に至りて柱下の史と爲ると曰ひしが如き、誣罔の甚だしきものなり。また列仙傳、及び高士傳に周の柱下の史と爲り、轉じて守藏史と爲ると曰ひしが如きも、亦信すべからざるなり。何となれば柱下の史と守藏室の史とは、元と同一の官職を指すものにして、兩職あるに非ざればなり。蓋し周の世に守藏室の史と稱せしを、秦の世に柱下の史と曰ひしものならむ。史記の張蒼傳に張蒼好書律曆、秦時爲御史、主柱下方書と曰へば、柱下は即ち圖書の在る所にし、柱下史は秦の御史の別稱なるべし。史記老子傳の索隱に、按藏室史乃周藏書室之史也、柱下、因以爲官名と曰ひ、また張蒼傳の索隱に、周秦皆有柱下史、謂御史也、所掌及侍立、恒在殿柱之下、故

老聃爲周柱下史、今蒼在秦代、亦居斯職と曰へり。周に柱下史の名稱ありしや否やは、容易に信すべからざるも、守藏室の史は即ち柱下の史にして、御史が常に殿柱の下に在るを以て名づくると謂へるもの、先づ我心を獲たり。第四、孔子問禮於老子の一事は三たび史記に出で、また、孔子の吾聞諸老聃の語は三たび禮記曾子間に見ゆるのみならず、孔老相見るの記事は、孔子家語に詳かなり。而して學者往々史記及び家語の事實を疑へり。汪中が禮記曾子間に見はる、老子の言行を信じて、彼の書五千言の乖異を疑へる如き、亦これなり。第五關に入ることは、史記の老子傳に、老子居周久之、見周之衰、迺去至關と曰ひしかば、列仙傳、神仙傳、及び高士傳など、皆入關の事實を誇張し、彼を神仙化して、黃帝と並稱するの素地を爲さむとす。

西過流沙、莫知所終、列仙傳

老子將去、而西出關、以昇崑崙、神仙傳

後周德衰、乃乘青牛車、去入大秦、過西關、高士傳

顧ふに老聃の入りし關は何關なりしか、人或は函谷關なりとす。而して抱朴子に老子西遊、過關令尹喜於散關、爲喜著道德經一卷と曰へば、關は函谷關に非ずして、散關なり。散關は岐州、陳倉縣の東南五十二里に在り、函谷關は陝州、桃林縣の西南十二里に在りとすれば、兩關孰れを正とすべきか。

況んや神仙傳の關は崑崙山下に在り、列仙傳の關は大秦國外に在るに於てをや。要するに列仙傳以下は老聃を待つに神仙を以てし、彼の長生不死、遂に流沙を過ぎ印度に入ると爲せるものなり。而して史記は獨り彼を待つに偉人を以てし、已に彼の郷貫を掲げ、また彼の姓氏名字を明かにし、彼の官歴を記す、皆人間の閱歷にして、神仙として敘述すべき要件に非ざるなり。偉人としての老聃は周の徳衰ふるを見て、慷慨の餘、遂に官を去り、東周より西秦に入るものとすれば、關は蓋し函谷なるべし。第六、彼の死所に就き、史記に莫知其所終と曰ひしかば、列仙傳など皆これを利用して、舞文曲説遂に黄帝の上天説と相近接せしめむとす。然るに莊子の養生主に老聃死秦佚弔之とあれば、老聃の身は尙ほ天上に在らずして、人間に在り、而して彼の死するや尙ほ門人の手に葬られしを知るべし。

老子死時、不知在<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>何時、莊子養生主篇、明記<sub>ニ</sub>老聃之死、莊子這一般文字、決非<sub>ニ</sub>後人所<sub>ニ</sub>能假造的、可<sub>レ</sub>見古人並無<sub>下</sub>老子入<sub>レ</sub>關仙去、莫知<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>終的神話<sub>上</sub>。胡適、中國哲學史大綱

### 第三章 彼の時代

老聃の生卒年月は史傳に明記せざるを以て、確に其の年代を知る能はざるなり。故に古來彼の時代に就きて諸説紛々たり。第一、殷の時に生ると爲すもの、漢の劉向の列仙傳、晋の皇甫謐の高士傳これなり。第二、周の文王、武王の時と爲すもの、晋の葛洪の神仙傳これなり。第三、周の平王の時に關に入ると爲すもの、葛洪の老子經序これなり。第四、周の莊子の時に天竺に之くと爲すもの、南齊書の顧歡傳、魏書の釋老志これなり。

居<sub>レ</sub>周久、平王時見<sub>ニ</sub>周衰、乃遂去<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>關、葛洪、老子經序

老子入<sub>レ</sub>關、之<sub>ニ</sub>天竺維衛國、國王夫人名曰<sub>ニ</sub>淨妙、老子因<sub>ニ</sub>其晝寢、乘<sub>ニ</sub>日精、入<sub>ニ</sub>淨妙口中、後年四月八日

夜半、子時、剖<sub>ニ</sub>左腋<sub>ニ</sub>而生、墜<sub>レ</sub>地即行<sub>ニ</sub>七步、於<sub>レ</sub>是佛道興焉、南齊書、顧歡傳

釋迦於<sub>ニ</sub>四月八日夜、從<sub>ニ</sub>母右脅<sub>ニ</sub>而生、釋迦生時當<sub>ニ</sub>周莊王九年、春秋魯莊公七年夏四月辛卯夜、恒星

不<sub>レ</sub>見、是也、魏書、釋老志

按ずるに以上四説は皆老子を以て孔子以前の人と看做すものなり。就<sub>レ</sub>中第一は彼の生時を言ひしものにして、第二は彼の仕官時代を言ひしものなれば、兩説必ずしも相撞着せざるなり。第三、第四は共に彼の晩年關に入りし時代を稱するものなりしも、武王崩じてより、平王の即位に至る年數凡そ三百四十六年なり。而して彼の關に入りしは、平王の何年なりしや詳ならずと雖も、晁公武の郡齋讀書志に周の平王の四十二年と曰へり。平王の四十二年は孔子の生る、前凡そ百七十餘年なり。また莊王の九年は魯の莊公七年にして、孔子の誕生に先だつこと凡そ百三十餘年なり。これ皆信すべからず。

老子道德經二卷李耳撰、以周平王四十二年、授令尹喜、凡五千七百四十八言、八十一章、言道德之旨、郡公武、郡齋讀書志

第五、史記の孔子世家、老莊申韓傳、仲尼弟子傳、及び禮記の曾子問に、老子を以て孔子と同時にして年齒稍長じ、孔子嘗て禮を問ふと爲せるは、最も準據すべきなり。故に鄭玄は老聃を古の壽考者の號と爲し、も、しかも孔子と時を同うすと曰ひぬ。

魯南宮敬叔言魯君、曰請與孔子適周、魯君與之一乘車、兩馬、一豎子、俱適周問禮、蓋見老子云、辭去、而老子送之、孔子世家

孔子適周、將問禮於老子、老莊申韓傳

孔子之所嚴事、於周則老子、於衛蘧伯玉、於齊晏平仲、於楚老萊子、於鄭子產、於魯孟公綽、仲尼弟子傳

孔子曰、昔者吾從老聃、曾子問

孔子曰、吾聞諸老聃、同上

老聃古壽考者之號也、與孔子同時、鄭玄、曾子問注

故に孔子家語は史記に本づきて、孔子が禮を老聃に問ふことを是認せり。清の崔述の洙泗考信錄に家

語の紕繆を指斥して、魏晉間の人、老莊を崇尚するもの、言と爲し、も、予は孔老二子の會見を事實として、後世朱陸鷺湖の會と同じく、學術思想上、實に千古の快事と謂ひぬ。故に列仙傳、及び高士傳に老子を殷の時に生れしと爲し、神仙傳に文王武王の時に仕ふと爲し、も、亦孔子が禮を問ひしことを否定せざるなり。清の閻若璩の四書釋地續に禮記曾子問の昔者吾從老聃、助葬於巷黨、及距、日有食之に因り、遂に推算して、孔子が周に適き老子を見しは、昭公二十四年に在り、孔子三十四歳に當れりと曰ひしが、近來胡適の中國哲學史大綱に孔子は三十四歳、乃至四十一歳の間、老子を見る、二子の年齒の差は二十歳を過ぎずして、老子は周の靈王の初年に生れしものなりと曰ひぬ。

仲尼至周、見老子、知其聖人、乃師之、列仙傳、高士傳

孔子嘗往問禮、先使子貢觀焉、神仙傳

孔子適周、總在他三十四歳以後、當西歷紀元前五一八年以後、大概孔子見老子、在二十四歳與四十一歳之間、老子比孔子、年齒不差二十歳、老子當生於周靈王初年、當西歷前五七〇年左

右、中國哲學史大綱

第六、史記の老莊申韓傳に、自孔子死之後、百二十九年、周太史儋見秦獻公、或曰儋即老子、或曰非也と疑を存せしより、後世に老子を戰國時代に屬せむとするものあり。劉向の新序に老子見梁惠王

の語ありしが如き、亦隱然として第六説の後援を爲すものなり。我邦に於て齋藤拙堂は老子辨五篇を作りて、老子が春秋の人に非ざるを辯せり。その一は論語、孟子に一言も老子に及ぶものなく、且つ左傳に老子の事蹟少しも見えざるを理由とするものなり。

論道莫大於語孟、紀事莫洽於左氏、皆不少概見、而獨見於史遷之書、是知老子非春秋以前之人、必不先於孟子、況於孔子乎、老子辨

その二は老子の子宗が魏の將と爲りしは、孔老相見るの後、凡そ百三十餘年なれば、父子の年代に甚だしき懸隔あるを理由とするものなり。その三は老子の世系は、宗より以後、李假が漢の文帝に仕ふるまで、僅に七世なりしも、孔子の子孫は鯉より以後、孔忠が文帝に復されて博士と爲るまで、已に九世なりしを以て、老子を疑ひて、戰國の人と爲すものなり。その四は史記に老子を楚の苦縣の人と稱せしも、苦縣は元と陳に屬しぬ。後ち陳亡びて楚の版圖に歸せしは、孔子の卒せし年なり。若し老子をして孔子の先輩たらしむれば、陳の苦縣の人と稱すべし。而して史記に楚の苦縣と曰ひしを以て老子を疑ひて戰國の人と爲すものなり。その五は老子の書中の言語文章が秦漢に近きものあるを理由として、老子を疑ひて孟子以後の人と爲すものなり。

顧ふに漢初の思想界に於て、道家者流が老子を以て孔子を凌駕せしめ、黃帝を以て堯舜を壓倒せしめむとする苦心の形迹は歴々として火を觀るよりも明かなり。韓愈の原道に、老者曰、孔子吾師之弟子也といひしは、正に漢初の消息を道破せしものなり。且つ當時老子を欽仰するものは、務めて老子を神仙化せしめむと欲し、或は殷の時に生ると曰ひ、或は周初に仕ふと曰ひ、或は其の終る所を知るなると曰ひ、或は百六十餘歳といひ、或は二百餘歳と曰ひぬ。司馬遷は蓋し斯の風尙を察し、遂に神仙の筆を用ひて、偉人の眞面目を寫し出だすと雖も、彼豈迷信的に老子を神仙視するものならむや。彼が老莊申韓を合傳と爲せしは、類を以て集めしものにして、起首に郷貫を掲げ、末段に世系を説き出だせる如き、固より人の子として敍べ、人の父祖として述べしものにして、神仙として取り扱へるものに非ざるを知るべし。且つ中段に於て、孔老對面の際、老子の意氣嶮嶮と孔子の態度謙讓とを寫し出だせる處、必ずしも所謂孔子は我師の弟子なりとの道家的見解を以て、老子の爲に地歩を占め、價値を高めむとするものに非ず。遷は蓋し孔老の會見を事實として確信せるものならむ。故に彼は老子傳に於て特に此の事實を敍ぶるのみならず、孔子世家、及び仲尼弟子傳に於ても、亦孔子が老子に嚴事せしよしを載せり。顧ふに孔老の二聖が踵を接して起り、肩を比して立ちしは、一代の雙壁として、光明を千載の後に發する所以ならずや。拙堂が孔子は夙に禮を知れりと一世に稱せらると曰ひしは、眞に然りとす。而して自ら足らずとして周に求めむとすれば、通明博達の士に従ふべし、何爲れ

ぞ僕々爾として一耄叟に従ひて問はむやと曰ひしは、予の首肯する能はざる所なり。何となれば老子こそ實に一世の師表にして、通明博達の士と謂ふべけれ、焉んぞ目するに一耄叟を以てすべけむや、孔子の猶龍の歎は、蓋し常鱗凡介に非ざるを看破し、同時に老子の意見が理想的にして世用に適せざるを道破せしものならむ。

試に拙堂の第一難に就きて辯せむに、論語は道を載する書なり。左傳は事を記する書なり。孔子は學びて厭はず、誨へて倦まず、循々然として善く人を誘ふと雖も、教訓上、必要なかりせば、何爲れぞ妄に長舌を鼓して他人の月旦を試みむや。然るに論語中、一言の老子に及ぶものなきを以て、直ちに老子を抹殺せむとすれば、春秋二百四十餘年間の名士賢大夫にして抹殺せられざるもの、果して幾許ある。左丘明が左傳を著はすに方りて、務めて各人の事跡を明かにせむと欲すと雖も、その事業にして苟も國家に關係あらざるものは、決して記載する價值なきなり。老子の事跡の如き、到底國家の盛衰興廢に關すべきに非ざれば、史官の筆を煩はすを須ひざるなり。現に孫武の如きも、亦左傳中に見えず。知らず拙堂は孫子を以て春秋の人に非ずして、孟子以後の人と爲さむか。たゞ辯を好む孟子にして、一言も老子に論及せざるは、頗る怪むべきに似たりと雖も、孟子は老子のみならず、莊子に對しても亦一言も論及せざりき。則ち孟子の老莊に於けるは、決して揚墨に於ける如くに敵視せざり

しものならむか。もし拙堂の論法を以てすれば、莊子も亦孟子以後の人と爲すべきか。

次に拙堂の第二難に就きて辯せむに、魏の文侯が始めて諸侯と爲りしは、威烈王の二十三年に在りき。これ實に孔子卒して後、七十五年なり。子夏は孔子より少きこと四十四歳なりしこと、史記に見ゆれば、孔子の卒せし時に子夏は已に三十歳なりき。而して子夏が魏の文侯の師たりしことは、魏世家、及び仲尼弟子傳に見ゆ。則ち魏の文侯が諸侯たりし時、子夏の壽は已に百有六歳なり。若し子夏にして文侯の師たるべくば、老子の子宗が魏の將たるを得るも亦怪むに足らず。しかも予は子夏、及び宗の壽は並に百歳以上なりと謂ふに非ず。已に述べし如く魏の建國は威烈王の二十三年に在りとするも、文侯が始めて晋の卿たりしは威烈王の即位元年なり。則ち子夏が魏の文侯の師たりといふも、老子の子宗が魏の將たりといふも、皆彼が諸侯たりし後に非ずして、その以前に晋の卿たりし時代なるを知るべし。太史公の筆に往々後日の稱號を前日に逆用することあり。張耳陳餘傳に貫高趙午等が帝を指して今上と曰はずして、高祖と稱する如き、これなり。何となれば高祖、及び高皇帝の尊號は、帝の崩後に群臣の議定せしものなれば、貫高趙午の口より、帝の生前に死後の尊號を用ふべきに非ざればなり。故に老子の子宗が魏の將たりしも、文侯の諸侯たりし後の事に非ずして、後日の稱呼を前日に適用せしものとすれば、老子父子の年代も、事實上、有り得べからざる理數に非ず。且つ老子に



幾人の子息ありしか知るべからず。また宗が老子の子として、伯仲叔季、何れに屬すべきかも、亦到底知るべからず。もし彼を老子の季子にして、且つ長壽ならしむれば、威烈王時代まで生存することに於て、何の疑あらむや。

次に拙堂の第三難に就きて辯ずれば、孔子卒して後漢の文帝の即位まで、凡そ三百年なり。その間に李氏は宗以下七世、孔子は鯉以下九世とすれば、李氏の子孫は皆壽考にして、戸主の年限平均三十三年なり。しかも孔子の九世中、鯉は仲尼に先だちて死せしかば、九世と曰ふも、實は八世のみ。八世中、彼の壽は六十二歳に達せしも、他は皆五十歳前後なり。白の年四十七、求の年四十五、箕の年四十六、穿の年五十一、謙、騰は並に五十七歳、忠は五十二歳なりし如き、これなり。若し李氏をして比較的長壽の系統ならしむれば、七世を以て優に孔氏の八世に匹敵するに足ること、識者の疑を容れざる所なり。若し老子を孔子の先輩として、二三十年の長者ならしむれば、李氏七世の平均四十七年と爲る。これ過長の嫌ありしも、史記に老子之子名宗、宗子注、注子宮、宮玄孫假とあるに誤字なきを保證すべからず。予は竊に三個の子の字に、元と或は孫の字に作りしものあらむことを疑ひぬ。汪中が史記の老子之子宗、宗爲魏將、封於段干の老子を解して、太史儋と爲し、上句の或曰儋即老子の一句を實にせしものと謂ひしは、卓見といふべし。

孔子所問禮者聃也、其人爲周守藏之史、言與行則曾子問所載者是也、周太史儋見秦獻公、本紀在獻公十一年、去魏文侯之歿二十三年、而老子之子爲魏將、封于段干、則爲儋之子無疑、而言道德之意五千餘言者儋也、其入秦見獻公、即去周至關之事、本傳云、或曰儋即老子、其言蹇矣、述學補遺、老子故異

次に拙堂の第四難に就きて辯ずれば、楚が陳を亡ぼせしを、周の敬王の四十一年にして、孔子卒せし年とすれば、老子已に周を去りて關に入りし後ならざるを得ず。然るに司馬遷が老子を陳の人と稱せずして、楚の人と爲せしは、後日の稱呼を前日に適用するものにして、猶ほ張耳陳餘傳に貫高趙午が高祖の稱呼を濫用する如きのみ。此の一事を以て、直ちに老子を疑ひて戰國と爲すは、大早計なるを免れざるなり。

次に拙堂の第五難に就きて言はゞ、老子の書中に秦漢の言語文字多きは、拙堂の言ふ所の如し。予も亦五千言の内容の頗る雜駁なるを疑ふ。しかも予はこれを以て直ちに老子其の人を戰國時代に引き下げむとするものに非ず、寧ろ其の人と其の書とを截り離して、其の人を春秋の人と爲し、其の書を戰國時代の人の筆に成りしものと謂はむとす。汪中の述學補遺に孔子が禮を問ひしは老聃にして、道德五千餘言を著はし、は太史儋なりと曰ひしもの、先づ我心を獲たりき。

帆足萬里は卓識洽聞の士なり。彼の著、入學新論に老子の書を斥けて、戰國の好事者が莊子の書を剽竊して作る所なりと痛論せり。しかも亦彼は老子を春秋の人と看倣して、孔子の嘗て嚴事せし事實を否定せざるなり。

老子隱君子、爲<sub>二</sub>柱下藏書史<sub>一</sub>、孔子從問<sub>レ</sub>禮、蓋又欲<sub>二</sub>因觀<sub>二</sub>周室史籍<sub>一</sub>耳、述而不<sub>レ</sub>作、信而好<sub>レ</sub>古、竊比<sub>二</sub>我老彭<sub>一</sub>、曰<sub>レ</sub>我親<sub>レ</sub>之之辭、則是必指<sub>二</sub>老子<sub>一</sub>也、入學新論

老子爲<sub>二</sub>周柱下史<sub>一</sub>、博通<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>禮、孔子嘗從問<sub>レ</sub>禮、後世崇<sub>二</sub>老子<sub>一</sub>者、遂以<sub>二</sub>孔子<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>老子弟子<sub>一</sub>、夫孔子所<sub>レ</sub>問周禮耳、非<sub>レ</sub>問<sub>レ</sub>道也、與<sub>二</sub>師襄邾子<sub>一</sub>何異、且是孔子年二十餘、博學旁求之時、猶<sub>レ</sub>釋氏未<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>道爲<sub>二</sub>外道弟子<sub>一</sub>也、入學新論

然るに渡東嶋の老子集説に老聃を先秦大國の人と爲し、申韓陳許と類を同じくするものと曰ひしは、拙堂の後塵を追ふものにして、亦信するに足らざるなり。

按老子者先秦六國之人耳、其書雖<sub>二</sub>高説<sub>二</sub>道德之蘊奧<sub>一</sub>、而通<sub>二</sub>觀五千言<sub>一</sub>、則不<sub>レ</sub>脫<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>刑名法術之流亞<sub>一</sub>矣、而其徒或以爲<sub>二</sub>周烈王之時人<sub>一</sub>、或以爲<sub>二</sub>神仙<sub>一</sub>、又或以爲<sub>二</sub>孔子之師<sub>一</sub>、誇<sub>二</sub>飾其道<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>不至、然而史遷與<sub>二</sub>申韓<sub>一</sub>同<sub>二</sub>其傳<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>有所<sub>レ</sub>見矣、若夫實爲<sub>二</sub>孔子師<sub>一</sub>者、論孟豈無<sub>二</sub>一言及<sub>二</sub>乎<sub>一</sub>、故輿謂<sub>二</sub>老莊與<sub>二</sub>陳許<sub>一</sub>同楚人耳、孟子痛<sub>二</sub>論陳許之非<sub>一</sub>、而不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>言<sub>二</sub>老莊<sub>一</sub>者何也、當時未<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>中國<sub>一</sub>也、苟卿亦楚人也、故言及<sub>二</sub>子<sub>一</sub>耳、至<sub>二</sub>韓非<sub>一</sub>主<sub>二</sub>張其書<sub>一</sub>、作<sub>二</sub>解老喻老<sub>一</sub>、其説之行<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>世可<sub>レ</sub>知矣、渡政輿、老子集説

#### 第四章 道德經の内容 一

老聃は春秋の人なり。道德經は戰國の書なり。其の人が春秋の人なるを信じて、其の書も亦春秋の書なるべしと過信するは、古今學者の通病なり。其の書が戰國の書なるを看破して、其の人も亦戰國の人なるべしと主張するものは、拙堂の老子辯、及び渡東嶋の老子集説これなり。其の人と其の書とを切り離して、其の人を春秋の人と爲し、其の書を戰國の書と爲すは、汪中の述學補遺、崔述の洙泗考信録、帆足萬里の入學新論これなり。

「道德經の内容を察するに、身を修め國を治むるに無爲を理想として、名利を賤み、聲色を斥け、輕躁を抑へ、剛強を忌み、聖智を絶ち、仁義を毀り、而して清靜を貴び、柔弱を主とし、恬淡を上とし、素樸を重んじ、退嬰を務め、自然に法るものなりしも、五千言中、或は法家の理想を取り、或は兵家の理想を採り、或は墨家の主張を宣傳し、或は楊朱の主義を包藏し、或は攝生を論じて長生不死を説き、或は時政を議して文明を呪咀し、或は破壊思想を説破し、或は無政府主義に論及せり。これ予が五千言の内容の頗る雜駁なるを疑ふ所以なり。例へば

將欲歛之、必固張之、將欲弱之、必固強之、將欲廢之、必固興之、將欲奪之、必固與之、三十六章  
魚不可脫於淵、國之利器、不可示人、同上

聖人欲上民、必以言下之、欲先民、必以身後之、六十六章

の類は皆法家の理想にして、申韓の法術に吻合するものなり。又

以正治國、以奇用兵、五十七章

夫慈以戰則勝、以守則固、六十七章

善爲士者不武、善戰者不怒、善勝敵者不與、六十八章

用兵有言、曰吾不敢爲主而爲客、六十九章

禍莫大於輕敵、輕敵則幾喪吾寶、同上

の類は兵家の理想にして、孫吳の極意に近きものなり。故に唐の王真漢州刺史著作論兵述義二卷は一部の老子を以て兵を談ずる書と爲せり。又

以道佐人主者、不以兵強天下、其事好還、師之所處、荆棘生焉、大軍之後、必有凶年、三十章

夫佳兵不祥之器、物或惡之、故有道者不處、三十一章

天下有道、卻走馬以糞、天下無道、戎馬生於郊、四十六章

の類は墨家の理想にして、墨翟宋鉞の非戰論に近きものなり。又

貴以身於天下者、則可寄天下、愛以身於天下者、則可託天下、十三章

の類は楊朱の爲我の説の由りて出づる所にして、孟子の所謂拔一毛而利天下不爲也は即ち是なり。故に朱子語録に楊朱之學、出於老子、蓋是楊朱曾就老子學來と曰ひぬ。又

名與身孰親、身與貨孰多、得與亡孰病、是故甚愛必大費、多藏必厚亡、知不足辱、知止不殆、可

以長久、四十四章

蓋聞、善攝生者陸行不遇兕虎、入軍不被甲兵、兕無所投其角、虎無所措其爪、兵無所容其刃、夫何故哉、以其無死地、四十四章

の類は神仙家の理想にして、攝生を論し、長生不死を説くものなり。故に後漢書、武帝本紀に、帝每

旦視朝、日仄迺罷、數引公卿郎將、講論經理、夜分迺寢、皇太子見帝勤勞不怠、承間諫曰、陛下有禹

湯之明、而失黃老養性之道、願頤愛精神、遊優自寧、帝曰、我自樂此、不爲疲也と曰ひぬ。又

夫禮者忠信之薄、而亂之首也、前識者道之華、而愚之始也、是以大夫處其厚、不居其薄、處其寬、不

居其華、三十八章

天下多忌諱、而民彌昏、民多利器、國家滋貧、人多技巧、奇物滋起、法令滋彰、盜賊多有、五十七章

の如きは、時政を議して文明を呪咀するものなり。況んや學を絶ち、聖を絶ち、仁を絶ち、巧を絶たむことを主張し、

朝甚除、田甚蕪、倉甚虛、服<sub>レ</sub>文采、帶<sub>レ</sub>利劍、厭<sub>レ</sub>飲食、財貨有<sub>レ</sub>餘、是謂<sub>二</sub>盜夸、非<sub>レ</sub>道也哉、<sub>五十三章</sub>

古之善爲<sub>レ</sub>道者非<sub>二</sub>以明<sub>レ</sub>民、將<sub>三</sub>以愚<sub>レ</sub>之、民之難<sub>レ</sub>治、以<sub>二</sub>其智多<sub>一</sub>、故以<sub>レ</sub>智治<sub>レ</sub>國、國之賊也、<sub>六十五章</sub>

民之饑、以<sub>二</sub>其上食<sub>レ</sub>稅之多、是以饑、民之難<sub>レ</sub>治、以<sub>二</sub>其上有<sub>レ</sub>爲、是以難<sub>レ</sub>治、<sub>七十五章</sub>

天之道損<sub>二</sub>有餘<sub>一</sub>而補<sub>二</sub>不足<sub>一</sub>、人之道則不<sub>レ</sub>然、損<sub>二</sub>不足<sub>一</sub>以奉<sub>二</sub>有餘<sub>一</sub>、<sub>七十七章</sub>

を絶叫するに於ては、皆急劇なる破壊思想を説破するものなり。特に

小國寡民、使<sub>下</sub>有<sub>二</sub>什佰之器<sub>一</sub>而不<sub>レ</sub>用、使<sub>二</sub>民重<sub>レ</sub>死而不<sub>レ</sub>遠徙、雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>舟輿<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>乘<sub>レ</sub>之、雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>甲兵<sub>一</sub>、

無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>陳<sub>レ</sub>之、使<sub>二</sub>民復結<sub>レ</sub>繩而用<sub>レ</sub>之、甘<sub>二</sub>其食<sub>一</sub>、美<sub>二</sub>其服<sub>一</sub>、安<sub>二</sub>其居<sub>一</sub>、樂<sub>二</sub>其俗<sub>一</sub>、鄰國相望、鷄犬之聲相聞、民

至<sub>二</sub>老死<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>相往來、<sub>八十章</sub>

の如きは、彼の理想國なる無政府主義に論及せるものなり。故に河上公以後多數の注解者が老子の書を看ること必ずしも同一ならず。河上公、嚴遵は國を治むる書と爲し、魏の孫登、梁の陶弘景、南齊の顧歡は身を修むる書と爲し、晋の鳩摩羅什、後趙の佛圖澄、梁の武帝は因果の理を明かにするものと爲し、王弼、何晏、鍾會、羊祜、及び後魏の盧景裕、劉仁會は虛無自然、家を理め國を理むる道を

明かにするものと爲せり。

顧ふに老聃が周を去りて關に入りしは、彼が時世に絶望の後なれば、道德經の主旨は治國に在りと謂はむよりも、寧ろ修身に在りと謂ふべく、天下の經綸に在りと謂はむよりも、寧ろ個人的修養に在りと謂ふべし。故に彼が名利を賤み、輕躁を抑へ、剛強を忌みて、清靜を貴び、柔弱を主とし、恬淡を上とし、素樸を重んじ、自然に法らむことを提唱するは、固より修身の工夫にして、個人的修養法に屬し、決して天下國家を目的とせる經綸策に非ざるなり。而して五千言中に聖人治國の道を説くものなきに非ざれども、亦彼の理想の聖人の個人的態度を説明せしものにして、その方法は無爲に在り不言に在れば、畢竟個人的修養を政事的範圍に引き延ばせしに過ぎず。唐の睿宗嘗て司馬承禎を天台より召して、其の術を問ふ。承禎對ふるに、爲<sub>レ</sub>道日損、損<sub>レ</sub>之又損、以至<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>を以てす。帝曰く身を治むるには然り、國を治むるには何如と。承禎對へて國猶<sub>レ</sub>身也、故游<sub>二</sub>心於<sub>レ</sub>淡、合<sub>二</sub>氣於<sub>レ</sub>漠、與<sub>レ</sub>物自然而無<sub>レ</sub>私焉、而天下治と曰ひしが如き、この間の消息を洩せしものに非ずや。宋の太祖嘗て道士蘇澄隱を召して養生の術を問ふ。澄隱對へて、臣養生不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>精<sub>一</sub>思鍊<sub>二</sub>氣爾、帝王則異<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>是、老子曰、我無<sub>レ</sub>爲、而民自化、我無<sub>レ</sub>欲而民自樸、無<sub>レ</sub>爲無<sub>レ</sub>欲、凝<sub>二</sub>神泰和、黃帝唐堯、享<sub>レ</sub>國永<sub>レ</sub>年、得<sub>二</sub>此道<sub>一</sub>也と曰へり。眞宗また嘗て張無夢を天台より召して、長久の術を問ひしに、無夢對へて、臣野人也、山中嘗誦<sub>二</sub>

老子周易而已、不知其他、と曰へり。顧ふに

聖人處無爲之事、行不言之教、萬物作焉而不辭、二章

聖人之治、虛其心、實其腹、弱其志、強其骨、常使民無欲、使夫知者不敢爲也、三章

愛民治國能無爲乎、十章

其政悶々、其民淳々、其政察々、其民缺々、五十八章

治人事天莫如嗇、五十九章

治大國若烹小鮮、六十章

の類は皆國を治むるに無爲を以てせむとするものなりしも、無爲果して能く國を治むべきや、否やは千古の疑問なり。

且つ無爲を理想として、無知、無欲、無心、無意を手段とせる老子は貴賤、高下、細大、難易、是非、善不善を平等に見做すべきに關せず、書中に往々差別的觀念を發表せり。例へば

善人不善人之師、不善人者善人之資、二十七章

貴以賤爲本、高以下爲基、是以侯王自稱孤寡不穀、三十九章

道者萬物之奧、善人之寶、不善人之所保、六十二章

大小多少、報怨以德、圖難於其易、爲大於其細、天下難事、必作於易、天下大事、必作於細、六十三章

天之道、其猶張弓乎、高者抑之、下者舉之、七十七章

の如き、これなり。程子遺書に老子書、其言自不相入處、如冰炭と曰ひしは、老子の言に矛盾多きを道破せしものなり。しかも老子の矛盾は根本的に更に大なるものあり。白居易の讀老子の詩に言者不知知者默、此語吾聞於老君、若謂老君是知者、緣何自著五千文と曰ひしは、第五十六章の知者不言、言者不知によりて、五千言を著はせし矛盾を誹りしものならずや。

要するに道德經の内容雜駁にして、法家、兵家、墨家、楊家、神仙家等の思想竄入し、且つ文意往々重複せる所あるのみならず、また前後矛盾せる所あれば、五千餘言は決して老聃一人の筆に作れるものに非ずして、戰國人の假託に出づるもの混入多きや疑なし。史記の孟子傳に慎到趙人、田駢接子齊人、環淵楚人、皆學黃老道德之術と曰ひ、申不害傳に申子之學本於黃老、而主刑名と曰ひ、韓非者韓之諸公子也、喜刑名法術之學、而其歸本於黃老と曰ひしは、諸家の思想が老子より發生するものと爲せるも、予は必ずしも然らざるを知る。故に汪中は太史儋の著はす所なりと曰ひ、崔述は楊朱の徒の僞託する所なりと曰ひ、帆足萬里は戰國の好事者が莊周の書を剽竊して作る所と曰ひ、ま

た鄭韓間の人の偽撰する所と曰へり。

道德五千言者不知何人所作、要必楊朱之徒之所僞託、洙泗考信錄、卷一

戰國之時、楊墨竝起、皆託古人、以自尊其說、儒者方崇孔子、爲楊氏說者、因託諸老聃、以誦孔子、儒者方崇堯舜、爲楊氏說者、因託諸黃帝、以誦堯舜、以黃帝之時、禮樂未興、而老聃隱於下位、其迹有近似乎楊氏者也、今史記之所載老聃之言、皆楊朱之說耳、其文亦似戰國諸子、與論語春秋傳之文絕不類也、同上

老子戰國好事者剽竊莊周書作也、其文乏溫厚含蓄之氣、與易大象論語不同、且據篇中仁義並稱、決非當時之言也、傳者以爲老子將隱、西過關、爲關尹喜著五千言、則知其書鄭韓間人所僞撰、或曰老子卽韓非所著、喻老解老所以神其言、然韓非綜核名實之學、未必爲是無益之事也、

入學新論原教

僞老子實剽竊莊子而作者、如上文所言、今舉二書之言微之、莊子在宥篇、故君子不得已而臨蒞天下、莫若無爲、無爲也而後安其性命之情、故貴以身於天下、則可以託天下、愛以身於天下、則可以寄天下、老子、吾所以有大患者、云々、周言卽荀子所謂滑稽亂俗者、然文義自相貫通、老子已言、吾所以有大患者、以吾有身、又曰貴以身於天下、前後乖戾、始無意義、

明老竊周、非周引老也、同上

然れども楊朱の書已に亡びて、列子に一篇の楊朱篇を存するのみなれば、今の道德經が果して楊朱の徒に作られしや否やを斷定すべからず。また老莊の文に相一致せる所あるは事實なり。しかも莊子を剽竊して老子を作せしものなるか、將た老子を剽竊して莊子を成せしものなるかは、研究を要する問題なり。何となれば莊子内篇は總べて莊周の自筆にして、尋常模擬を事とするもの、假託を許さざる所なれども、外篇雜篇は俱に秦漢の際、莊周を崇ぶもの、假託に出づ。若し老莊の文に相一致する所ありとして、兩者皆假託とすれば、莊子が剽竊せられしか、老子が剽竊せられしか、容易に決すべからず。帆足萬里が老竊周、非周引老と曰ひしも、亦決して首肯すべからず。たゞ汪中が太史儋の著はす所と曰へるは、容易に否定すべからざるなり。

且つ老子の文體に就きて、崔述は論語、春秋傳の文に類せずと曰ひ、帆足萬里は溫厚含蓄の氣に乏しく、易、論語と同じからずと曰ひぬ。凡そ文章には時代的特色あると同時に個人的特色あるなり。孔老二子は同時代なりしも、意氣凌駕の老子の文は、溫良恭儉讓の孔子の文と揆を殊にせるも怪むに足らず。試に文體に就きて言はゞ老子の文は、戰國諸子の文に比すべきものに非ずして、寧ろ三代の文に比すべき一種の擬古文と謂はざるべからず。文中に押韻の處多きが如き、これなり。韓非の楊權

守道の二篇が、老子の文體に酷似せる所あるは、韓非得意の文體に非ずして、彼の少時に老子を好尚するの餘、遂に老子の文體に擬せしものならむ。人或は老子の一書は韓非の著はす所にして、解老、喻老の二篇は、即ち自著の價値を高めむとする野心なりと謂ふものもあるも、韓非は元と名實を綜核せむとするものなれば、安んぞ自著の名を没して、これを古人に託し、却つて自己を徒弟の位地に置き、自ら注解の勞を執り、上は古人を誣ひ、下は後人を欺くの狡猾手段を取らむや。帆足萬里は荀子、非十二子に老子を除外にせるを疑ひしも、荀子は天論に於て、老子を誣に見るありて、信に見るなしと評すれば荀子の時、已に老子の書ありしを知るべし。況んや莊子天下篇に道術を論じて關尹、老聃を並稱し、禮記、曾子問にも四たび老聃を稱するに於ては、韓非以前に老聃ありしこと、固より疑ふべからず。然るに予が茲に老子の書を春秋に歸せずして、戰國に歸する所以は、老子の書中に仁義を並べ稱して暗に孟子の仁義説を卑下する所多ければなり。

且據篇中仁義並稱、決非當時之言也、入學新論

老子中言語文字、有下近似秦漢者、亦足レ知其非孟子以前之人、蓋論語言仁數十條、一無下對言仁義者、獨易傳曰、立レ人之道、曰仁與義、除此外、六經之所無也、至孟子始開レ口說仁義、以立一家言、而老子曰、大道廢有仁義、曰絕仁棄義、民復レ孝慈、曰失德而後仁、失仁而後義、寥寥短篇、刺

譏仁義レ非一、蓋其生後於孟子、得聞七篇之餘論、故務反其說耳、齋藤拙堂、老子辨

論者或は謂ふ、仁義並稱は必ずしも孟子より始まらず、易の繫辭傳に立レ人之道、曰仁與義といへば、春秋時代、已に仁義を並稱せり、即ち五千言中に仁義の二字あればとて、直ちに其の書を戰國の書と看做すべからずと。然れども老子の書中に仁義を擧ぐるは、決して仁義を宣傳せむとするものに非ずして、彼の目的は當時已に學説として社會に勢力ありし儒家の仁義を打破せむとするに在りしもの、如し。顧ふに儒家が仁義を主張せしは、戰國の初よりとすれば、五千言が春秋の書に非ざるを知るべきなり。

且つ老子開卷第一章の道可道非レ常道レの一句は、尙ほ春秋の思想界を喝破するものと爲し、所談道とすべき道とは、先王の道、堯舜禹湯文武周公の道、仲尼の道、詩書六藝の道、三綱五常の道を指して言ひしものとすべきも、名可名非レ常名レの一句は、正さに戰國の思想界に名分論、若しくは形名説あるを喝破せるものならずや。論語子路篇に子曰必也正名乎とあるは、子路の問に對して、衛君の爲に發せしものにして、君臣父子の名分を正さむとするものなれば、蓋し一種の形名參同なり。夫れ君臣と曰ひ、父子と曰ふは、皆名なり。君は仁にして、臣は義なりと曰はゞ、仁と曰ひ義と曰ふも名なり。父は慈にして子は孝なりと曰はゞ、慈と曰ひ孝と曰ふも亦名なり。衛の君は君たらず、衛の臣

は臣たらず、崩躓は父たらず、輒は子たらず。これ孔子に名を正すの一言ありし所以なり。故に馬融の論語注に正<sub>三</sub>百事之名<sub>一</sub>と曰へり。また墨子に經上下、經說上下、大取、小取の六篇あり、皆名實の理を辨せしものなり。荀子に正名篇あるは、惠施、公孫龍などが名を亂す弊を矯めむとするものなり。莊子に形名已明、分守次<sub>レ</sub>之と曰ひしは、物に形あれば名あり、名あれば分あり、分あれば守あるを以てなり。その他、尹文子に形名を説きて、形以定<sub>レ</sub>名、名以定<sub>レ</sub>事、事以驗<sub>レ</sub>名と曰ひ、韓非子に形名を論じて、主道篇に有<sub>レ</sub>言者自爲<sub>レ</sub>名、有事者自爲<sub>レ</sub>形、形名參同、君乃無<sub>レ</sub>事焉と曰ひ、揚權篇に名正物定、名倚<sub>レ</sub>物徒、聖人執<sub>レ</sub>一以靜、使<sub>三</sub>名自命<sub>一</sub>也、令<sub>三</sub>事自定<sub>一</sub>也と曰ひし如き、皆名實を綜核するものなり。故に戰國に形名家あるのみならず、また別に名家ありき。史記の太史公自序に陰陽家以下六家の要指を論せり。名家は其の一に居れり。漢書の藝文志に名家者流蓋出于<sub>三</sub>禮官<sub>一</sub>と曰ひ、隋書の經籍志に名者所<sub>レ</sub>以正<sub>三</sub>百物<sub>一</sub>、敍<sub>三</sub>尊卑<sub>一</sub>、列<sub>三</sub>貴賤<sub>一</sub>、各控<sub>レ</sub>名而責<sub>レ</sub>實、無<sub>レ</sub>相僭濫<sub>上</sub>者也と曰へるものなり。則ち老子の名可<sub>レ</sub>名非<sub>三</sub>常名<sub>一</sub>は、此等諸家の所<sub>レ</sub>謂名が一事一物に對する稱呼にして、名の名とすべきものなり、決して天地宇宙、一切の事物に共通すべき名稱に非ざるを道破せしものなり。これ實に通篇八十一章の主腦にして、五千言の首冠なり。しかも戰國諸子の學說を概括して、反駁的に論斷せしものなれば、老子の書が孔子以前のものに非ざるや必せり。且つ老子第二十六章に諸侯を指して萬乗の主といひしが如きは、固より戰國時代の稱呼を襲用せしものなり。況んや第三十一章に偏將軍、上將軍の稱呼を用ひしや、誰か春秋時代に此の稱呼ありと謂ふものあらむや。

## 第五章 道德經の内容 二

道德經五千言は必ずしも皆老聃の眞筆に非ざるべしと雖も、彼の主義本領は固より五千言中に存在せり。顧ふに彼の主義が無に在り、彼の本領が無爲に在りし所以は、時勢の反動、自ら然らしむるものにして、彼は明かに時代の産兒なりと雖も、亦彼の師なりし商容の感化に由れりと謂はざるを得ず。商容は一に常樞に作り、また容成に作り。淮南子、繆稱訓に老子學<sub>三</sub>商容<sub>一</sub>、見<sub>レ</sub>舌而知<sub>レ</sub>守<sub>レ</sub>柔矣と曰ひ、説苑、敬慎篇に常樞教<sub>三</sub>老子<sub>一</sub>と曰ひ、列仙傳に受<sub>三</sub>學於<sub>三</sub>容成<sub>一</sub>と曰ひぬ。商容と常樞とは音近くして相通するものなり。高誘の呂氏春秋慎大篇、淮南子主術訓の注に、商容殷之賢人、老子師也と曰ひ、また呂氏春秋離謂篇の注に容紂時賢人、老子所<sub>三</sub>從學<sub>一</sub>也と曰へる、これなり。人或は老聃の學說は印度婆羅門教の影響を受くと曰ふものありしも、予はこれを信する能はざるなり。

周の天下は周公初めて禮を制せしより、郁々乎として文なるかなの盛觀ありしも、その餘弊は形式に流れ、虚偽を事とし、滔々たる一代の風潮は殆ど救濟の道なきに至れり。こゝに於て老子は禮の無



用を絶叫して亂の首と爲し、禮を知る前識を罵倒して愚の始と爲し、聖を絶ち智を棄て、仁を絶ち義を棄て、學を絶ち禮を棄てむことを要求せり。而して孔子は夙に周公を理想として、禮を重んじ、仁を主とし、視聽言動、一に禮に由るを以て、仁を得るの方と爲せり。故に彼の處世法が禮を以て主と爲せるのみならず、彼の大義名分論も亦禮を以て主と爲せり。則ち老子が時弊を見て、これを矯正して、太古の無事に復さむとするも、孔子が時弊を見て、これを唐虞三代の古に復さむとするも、俱に復古論者なるは一なり。もし二子の相異なる點を擧ぐれば、孔子が周の禮を貴び、周の文明を謳歌するものなるに反し、老子は周の禮を惡み、周の文明を呪咀するに在るなり。

試に孔老二子の性格及び學説を比較せむに、(一)孔は智仁勇の三徳を兼備し、老は才學識の三長を兼備し。(二)孔は智情意の三方面に最も圓滿なる發達を遂げし人格者なりしも、老は智情意の發達に過不及あるものなり。(三)孔は溫良恭儉讓、威ありて猛からずと雖も、老は意氣稜々として、剛強果敢、人を凌駕する威風あり。(四)孔の學説は世間的、形式的、實驗派、國家主義、大義名分主義にして、修身齊家を出發點とし、治國平天下を終極の到着點と爲すと雖も、老の理想は非世間的、形式的形式打破、階級撤廢、理想派、個人主義、自由主義にして一身の修養を主と爲せり。(五)孔は是非善惡を嚴格に區別して、道二、仁與義而已矣と曰ひしも、老は是非善惡の無差別を高唱して、善之與惡、相去

何如と曰ひ、(六)孔が堯舜を祖述し文武を憲章せるに反し、老は一言も先王を稱せず、却つて嬰兒の無知を稱せり。況んや孔が學を好み、仁を主とし、禮を尙ぶに反して、老が學を絶ち、仁を絶ち、義を棄つるに於ては、二子の主義主張の全く相背馳せるを見るべきなり。

第一、無、無は老子の學説の根本にして、五千言の字眼なり。夫れ無は有に對するものにして、元來相對的の稱呼なり。第二章に有無相生、難易相成とあるが如き、これなり。しかも老子の所謂無は絶對無限、あらゆる稱呼を超越せるものにして、決して相對の無に非ず。何となれば平等無差別を提唱する彼の眼中に於て、有と無とを相對的に區別するは、明かに自家の學説を根本より顛覆するものなればなり。もし老子の無を絶對の無とすれば、彼の所謂無は有に對する無に非ずして、有を超越せる無なり。畢竟有の起源を指名せしものにして、後世周惇頤の所謂無極に近きものなり。第一章に無名天地之始と曰ひ、第四十章に天下萬物生於有、有生於無と曰ひしが如き、皆絶對の無が能く天地の始と爲り、萬物の祖と爲ることを説破せるものなり。而して第二十五章に有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立而不改、周行而不殆、可以爲天下母と曰ひ、第二十一章に惚兮恍兮、其中有象、恍兮惚兮、其中有物、窈兮冥兮、其中有精、其精甚眞、其中有信と曰ひ、第十四章に其上不皦、其下不昧、繩々兮不可名、復歸於無物、是謂無狀之狀、無象之象、是謂惚恍、迎之不見其首、

隨之不見其後」と曰ひしは、皆絶対の無が無狀無象、啻に時間的に終始なきのみならず、また空間的に周行して至らざる所なきを形容せしものなり。寂寞と曰ひ、恍惚と曰ひ、窈冥と曰ひ、先天地一<sub>一</sub>生と曰ひ、周行と曰へる如き、皆彼の旨意の在る所を知るべし。故に老子の所謂無は宇宙の大原理にして、天地の始、萬物の宗を指して言ひしものなり。則ち造化自然の根本的動力を認定せしものなれば、無の作用は絶大にして、天地もこれより生じ、萬物もこれより化成す。唯その物の絶対にして、無限大なると同時に無限小なるを以て、假に名づけて無と稱するのみ。則ち無は造化自然の大作用を認定せし假名に過ぎずして、彼に視るべき形なく、聽くべき聲なきならず、彼自身には視るべき目もなく、聽くべき耳もなく、同時に又言ふべき口もなし。こゝに於て彼は四大一原の理に據り、宇宙の大道が自然に任せて、敢て自ら命令禁止せざる如く、天も言はず、地も語らず、人も亦言はざるを理想とす。これ彼が不言の教を高唱せる所以ならずや。また宇宙の大道が自然に任せて、敢て自ら作爲せざる如く、萬物を覆ふ天も曾て耳目を用ひて自ら爲すことなく、萬物を載する地も嘗て聰明を用ひて自ら爲すことなく、萬民を治むる帝王も亦聖智を用ひて自ら爲すことなきを理想とせざるべからず。これ彼が無爲の道を高唱せる所以ならずや。

且つ彼の宇宙觀、社會觀、倫理觀を推究するに、彼の主張は終始一貫して、宇宙の大原則を國家の政治に應用し、國君の態度を個人の修養に適用し、個人の態度は即ち造化自然の態度なるに在りき。試に彼の理想を個人の修養に應用すれば、無知、無欲、聰明を黜け、向上心を去り、學問慾なく、知識慾なく、總べての物質慾を排除し、居れば其の居に安んじ、食へば其の食に甘んじ、悲觀もなく、樂觀もなく、功名の外に超越して、人に求むる心なく、他に交渉する必要なく、自己の環境に對して自ら顧慮する所なきのみならず、又他より干渉せらるゝこともなく、束縛せらるゝこともなく、虚靜

恬淡、能く絶対無限の自由を得、無意識に唯我獨尊の態度を保持す。荀子に、老子有見於詘、無見信、といふ。詘とは消極の謂にして、信とは積極の謂なり、これ彼の倫理觀なり。また彼の理想を國家の政治に應用すれば、必ず先づ當時の繁文縟禮を去らざるべからず、嚴刑重罰を除かざるべからず、聚斂の苛政を革めざるべからず、智術の積弊を矯めざるべからず。こゝに於て彼は形式打破、階級撤廢の説を主唱せり。蓋し國君をして自己の尊嚴と權威とを認めざらしめ、上は宇宙の大原則に遵由し、下は個人の修養を體驗して、無爲不言、敢て天下の先と爲らず、能く百姓の心を以て心と爲し、敢て國民の模範標準と爲らざれば、國家の組織、社會の制度、皆自然に解體して、其の結果は遂に無政府の状態に復歸せむとす。しかも彼の無政府主義の出發點は無知無欲に在りて、一片の野心あるに非ず。國民が政府の存在を認めざる以前に於て、國君自身が政府の解體を不言の裏に宣告せるものな

り。則ち其の革命たるや、他動に由りて然るに非ずして、國君の自發なり、自動なり。則ち老子の主張は、今日の社會主義者が或る目的、即ち一種の野心を包藏して、政府の顛覆を企て、運好くば自ら取つて代らむとする比に非ず、これ彼の社會觀なり。若しかの天地萬物を絶對の無より出づと爲し、天地の始を無名と曰ひ、萬物の母を有名と曰ひしは、周惇頤の所謂無極と大極とに近くして、彼の宇宙觀なり。要するに宇宙の大道が一個の無を根源と爲す如く、天も、地も、國君も、國民も、皆無を體得すれば、君民一致、天人一體、四大一原と謂ふべきなり。想ふに老子の所謂無は造化自然の大作用の根本を指して言ふものなれば、猶ほ宗教家が天地萬物の創造者を以て或は神に歸し、或は佛に歸する如きなり。果して然りとすれば第四十章に有は無より生ずとあるは、猶ほ神は萬有を生ずと曰ふが如く、また第一章に無名は天地の始とあるも、猶ほ神は天地の始と曰ふが如し。

高山樗牛は老子の有神論者なりや否やに就きて、老子は決して吾人の所謂神の存在を認めずと斷言せり。予も亦老子は決して有神論者に非ずと謂ふものなり。而して世人或は彼を以て有神論者と爲すは、彼の書中に吾不知誰之子、象帝之先第四と曰ひ、治人事天、莫若嗇第五と曰ひ、天將救之、以慈衛之第六と曰ひ、是謂配天、古之極第六と曰ひ、天網恢恢、疎而不失第七と曰ひ、天道無親、常與善人第七と曰へばなり。「ジエームスレッジ」の如きも亦その一人なり。然れども老子の帝と曰ひ、

天と曰ふものは、必ずしも吾人の所謂神に非ず、吾人の所謂神は人間以外に超越して、萬物を統御し人類を主宰する全能力あるのみならず、また人類に對して善に福し淫に禍する權威あるものなり。然るに老子の帝と曰ひ、天と曰ふものは、決して斯の如き權威を保有せるものに非ず。顧ふに天といふ觀念は人爲の力の到底及ぶべからざる造化自然の妙用を指すものなり。こは支那に於て上古より已に然りしこと、老子以前の書に徴して明かなり。故に老子も茲に新說創見を發表するに方り、成るべく世人をして容易に理解せしめむ爲、古來の慣用語を因襲せしものならむ。予が茲に老子の所謂無を以て、宗教家の所謂神に比せしも、老子が無を以て天地萬物の根源と爲すことが、偶然にも宗教家が神を以て天地萬物の創造者と爲す論法に近きをいひしのみ。決して老子の無と宗教家の神とを同一の資格にして、同一の權威ありと謂ふに非ず。何となれば老子の所謂無は決して人格化せる神に非ずして、智識なく、情感なく、意思なきものなればなり。則ち彼が有神論者に非ずして、吾人の所謂神の存在を認めざることを疑なきなり。

第二、道、老子の所謂道は決して儒者の所謂道に非ず。儒者の所謂道は人道にして、人間の行爲の標準を指して言ふものなりしも、老子の所謂道は宇宙の原理にして、天地の根、萬物の母を指して言ふものなり。故に彼は道を説明して先天地一生と曰ひ、また天下の母と曰ひ、萬物の宗と曰ひ、

萬物を生ずと曰ひ、萬物の奥と曰ひ、

有<sub>レ</sub>物混成、先<sub>ニ</sub>天地<sub>一</sub>生、寂兮寥兮、獨立而不<sub>レ</sub>改、周行而不<sub>レ</sub>殆、可<sub>ニ</sub>以爲<sub>ニ</sub>天下母<sub>一</sub>、吾不<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>其名<sub>一</sub>、字<sub>レ</sub>之

曰<sub>レ</sub>道、二十五章

道冲、而用<sub>レ</sub>之或不<sub>レ</sub>盈、淵乎似<sub>ニ</sub>萬物之宗<sub>一</sub>、四章

道生<sub>レ</sub>一、一生<sub>レ</sub>二、二生<sub>レ</sub>三、三生<sub>ニ</sub>萬物<sub>一</sub>、四十二章

道者萬物之奥、善人之寶、不善人之所<sub>レ</sub>保、六十二章

而して道その物の本來の面目を形容して冲と曰ひ、惟恍惟惚と曰ひ、寂兮寥兮、獨立而不<sub>レ</sub>改と曰へば所謂道の體は無形無象、唯に時間的に無窮なるのみならず、空間的に無限なるものにして、前の所謂無と同體にして異名なるを知るべし。第二十五章に吾不<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>其名<sub>一</sub>、字<sub>レ</sub>之曰<sub>レ</sub>道、強爲<sub>ニ</sub>之名<sub>一</sub>曰<sub>レ</sub>大と曰へるは、此の間の消息を洩らせしものならずや。

道之爲<sub>レ</sub>物、惟恍惟惚、惚兮恍兮、其中有<sub>レ</sub>象、恍兮惚兮、其中有<sub>レ</sub>物、窈兮冥兮、其中有<sub>レ</sub>精、其精甚眞、其  
中有<sub>レ</sub>信、二十一章

特に第四十二章に道を説明して、道生<sub>レ</sub>一、一生<sub>レ</sub>二、二生<sub>レ</sub>三、三生<sub>ニ</sub>萬物<sub>一</sub>と曰ひしが如きは、第四十章に無を説明して、天下萬物生<sub>ニ</sub>於有<sub>一</sub>、有生<sub>ニ</sub>於無<sub>一</sub>と曰へるに同じ。たゞ前者は本より末に説き到るものにして、順敘法なりしも、後者は末より本に論及するものにして、逆敘法なるのみ。しかも、道と無とが同じく萬物の祖たることを説明せしものなれば、道即ち無、無即ち道なること疑ふべからざるなり。

高山樗牛は道と萬物との關係を論じて、英人「ハーバート、ジャイルス」氏が老子の説を以て進化説と爲せるを取らずして、老子の世界觀は分出論なりと主張せり。蓋し萬有は絶対無限の道より分出す、しかも道は萬有の分出によりて少しも其の絶対無限を害せらるゝことなし、道の萬有に於けるは、猶ほ燈火の光線に於ける如く、燈火は光線に非ざれども、光線は燈火に由らざれば存在せず、しかも光線の發射は些の損失をも燈火に及ぼさざればなり。

第三、一、一とは太一なり、唯一なり、即ち絶対の稱呼にして、無の別稱、道の異名なり。第四十章に道生<sub>レ</sub>一と曰へば、道即ち一ならず、一必ずしも道ならざるもの、如し。しかも一は天地の原にして、萬物の祖なれば、無と同一體にして、同一資格なるを知るべし。故に道と曰ひ、一と曰へば、自ら本末の差あるもの、如しと雖も、亦共に形而上の無なりしこと、猶ほ無極と曰ひ、大極と曰ひ、俱に形而上の無を指すものなるが如し。もし一を大極とすれば、道は無極に比すべきのみ。莊子天下篇に、至大無<sub>レ</sub>外、謂<sub>ニ</sub>之大<sub>一</sub>と曰ひ、韓非子揚權篇に、道無<sub>レ</sub>雙、故曰<sub>レ</sub>一と曰ひ、呂覽大樂に、道也者至精也、不可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>形、不可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>名、強爲<sub>ニ</sub>之字<sub>一</sub>、謂<sub>ニ</sub>之太<sub>一</sub>と曰ひしは、一を絶対的稱呼と解するも

のなれば、皆取りて老子の所謂一の注釋と爲すべきなり。

少則得、多則惑、是以聖人抱一、爲天下式、二十二章

昔之得一、天得一以清、地得一以寧、神得一以靈、谷得一以盈、萬物得一以生、侯王得一、以爲

天下貞、三十九章

道生一、一生二、二生三、三生萬物、四十二章

と曰へば、一は多の反、少の極にして、絶對の稱なること疑なし。且つ一の内容は無にして、道と異名同體なること明かなり。故に王弼は二十二章に注して、一者少之極也と曰ひ、林希逸は三十九章に注して、一者道也と曰ひしもの皆歎に中れり。高山樗牛は老子の所謂一を以てプローチン (Platon) が宇宙の本體を以て太一と爲せるに比較せしもの、確當と謂ふべし。他に道を名づけて大と曰ひ、惚恍と曰ひ、無狀の狀無象の象と曰ひしのみならず、谷神と曰ひ、玄牝と曰ひしも、亦道の異稱なるを知るべきなり。

〔第四、無爲、無を以て萬有の本と爲せる老子は、無爲を以て聖人の理想と爲せり。第二章に聖人處無爲之事、行不言之教と曰ひ、第四十三章に不言之教、無爲之益、天下希及之と曰ひし如き、これなり。夫れ無爲不言は個人の修養に利用して、自己の心中の紛糾錯雜を廓清すべき方便と爲すべきも

果してこれを人君施政の方便と爲すべきや、否やは疑問なり。聖人果して無爲にして、能く天下を化すべきか、果して不言にして能く萬民を率ゆべきか。上に在るもの無爲にして、下のもの果して能く無爲なるべきか、上に在るもの不言にして、下のもの果して能く不言なるべきか。太古草昧の世、人智未だ開けず、文化未だ發達せざりし時に當りては、上一槩、萬民一樣に無爲の世界を實現せしことあらむも、人智已に開け、文化已に發達せる後世に於て、無爲の治を夢想するは、時代錯誤と謂はざるを得ず。何となれば人君獨り無爲なるも、人臣皆有爲なるを奈何ともすべからず。人君獨り不言なるも、人臣皆多辯なるを奈何ともすべからざればなり。下のもの皆有爲にして多辯なるに、上のもの獨り無爲にして不言なるは、人君として一世の師表たるべき資格なく、また萬民統御の責任を盡くさざるものなり。故に無爲は個人の修養に利用すべきも、人君施政の方便と爲すべからず。老子の聰明にして、これを自覺せざる理なし。然るに彼が意氣昂然として無爲を標榜せし所以は、蓋し他に理由の存するありしものならむ。

按ずるに老子の所謂無爲は決して眠むる如くに歳月を過ごし、死する如くに百年を送らむとする謂に非ざるべし。彼は無爲を理想としながら、無不爲を目的とせり。第三十八章、四十八章及び五十七章の所謂上徳無爲而無不爲の一句これを證明するに足れり。若し彼の無爲を解して怠慢放棄、

果報は寢て待ての主義と爲さば、無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>爲を何如に解釋すべきか。故に予は彼の無爲を以て、言は消極的に似て、意は積極的なりと爲す。何となれば彼は私情を以て物に臨み、私意を以て事を處するを忌むものなりしも、宇宙の大原理に遵ひて、身を修め、民を愛し、國を治め、天下を平かにせむと欲すること、猶ほ宗教家が人事一切、神道に由り、神意を奉じて、自己の意思を固執せざる如し。則ち彼は一種の神道派にして、宇宙教または自然教の開祖と謂ふべきなり。

爲<sub>ニ</sub>無爲<sub>一</sub>則無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>治、 三章

愛<sub>レ</sub>民治<sub>レ</sub>國、能無<sub>レ</sub>爲乎、 十章

我無<sub>レ</sub>爲、而民自化、 五十七章

の如き、皆無爲を鼓吹せるものなり。蓋し彼の宇宙觀は、絶對の無、即ち道が獨立周行能く天下の母と爲りて、天地を主宰し、萬物を支配するを以て、自然の力と爲し、無爲の功と爲し、また、天に口なく、地に舌なくとも、日月星の運行し、動植物の生死するを以て、自然の理法と爲し、不言の結果と爲すものなり。故に彼の社會觀に於ても、無爲自然の非干涉主義を絶叫し、同時に周の文明を呪咀して、當時の文物制度を破壊せむとするものなり。然れば彼を目して理想派と曰ふは猶ほ可なりと雖も、稱して實行派と曰ふは不可なり。何となれば彼の無爲自然の政策は、彼が一切の文物制度を破

壊せむとする過激思想と相矛盾して、兩立すべからざればなり。故に彼の無爲は絶對に手を下さざる謂に非ずして、私意私情によりて妄に干涉せざることを謂ひ、彼の不言は絶對に口を噤する謂に非ずして、私意私情によりて漫に命令せざることを謂ふ。語を換へて言へば、彼の無爲は敢て私意私情に由らず、無、即ち神に由りて爲すの意義なり。これ予が彼の無爲を以て、言は消極的に似て、意は積極的なりといひ、また彼を一種の神道派にして、宇宙教または自然教の開祖といふ所以なり。

第五、無知、老子の所謂知は術數詐略の謂にして、決して良知良能の知に非ず。故に第六十五章に民之難<sub>レ</sub>治、以<sub>ニ</sub>其智多<sub>一</sub>、故以<sub>レ</sub>智治<sub>レ</sub>國、國之賊也、不<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>智治<sub>レ</sub>國、國之福也と曰ひぬ。且つ彼が聖を絶ち智を棄つると曰ひしも、亦春秋時代に尊重せられし智謀略を惡む心底より出でしものなり。詩經、小雅、正月に具曰<sub>ニ</sub>予聖<sub>一</sub>、孰知<sub>ニ</sub>烏雌雄<sub>一</sub>、と曰へば、聖の稱呼は已に幽王時代より濫用せられしものならむ。老莊の所謂聖智は皆この種の私智小慧にして、危険性あるものをいふ。然らば彼が無知を提唱する所以は、眞に下愚なる低能兒を推尙せむとするに非ず、私智小慧を用ふるものを排して、天縱の良知に由らしめむとするものなるは、猶ほ彼の所謂無爲が絶對の無爲に非ず、私意私情に由りて妄に施設せざるをいふものなる如し。故に聖を絶たむと絶叫する彼も、亦理想的無爲の人君を稱するに聖人の稱呼を以てして、上篇に六たび聖人を稱し、下篇に十六たび聖人を稱するのみならず、智を棄てむと絶叫

する彼も亦雌雄、黑白、榮辱を辨する智識を必要とするものなり。何となれば自ら雌を守りて天下の谿と爲らむとするには、先づ雄を知らざるべからず、自ら墨を守りて天下の式と爲らむとするには、先づ白を知らざるべからず、自ら辱を守りて天下の谷と爲らむとするには、先づ榮を知らざるべからざればなり。

知其雄、守其雌、爲天下谿、第二十八章

知其白、守其黑、爲天下式、同上

知其榮、守其辱、爲天下谷、同上

況んや第二十九章に聖人去甚、去奢、去泰と曰ひしに於てをや。これ聖人の自然の態度を稱するものにして、必ずしも聖人が用意苦心、勉強して然るものと看做さずと雖も、聖人の眼底に必ず先づ甚、奢、泰の對象に何物かあるを認識せること明かなり。故に予は彼を以て絶対に知を排斥せむとするものに非ず、天縦の良知に由りて自然に推行せむとするものなりと斷言す。第五十三章に使我介然有知、行於大道、唯施是畏とあるは、施爲施設の私智小慧以外に介然として大道を行くべき良知良能を理想とせるを知るべきなり。

第六、無差別、老子の所謂無爲は絶対の無爲に非ずして、無意識にして爲さざるなきをいふ。老子

の所謂無知は絶対の無知に非ずして、無意識にして知らざるなきをいふ。随つて彼の所謂無差別も亦決して相對的の是非、善不善、美惡、大小、貴賤、難易、長短、高下を混同して、根本より其の名稱を撤廢せむとするものに非ず。彼が

天下皆知美之爲美、斯惡已、皆知善之爲善、斯不善已、二章

唯之與阿、相去幾何、善之與惡、相去何若、二十章

と曰ひしは、殆ど無差別の意見を發表せるもの、如きも、實は然らずして、第二章は人意に由りて美と曰ひしもの必ずしも美ならず、善と曰ふもの必ずしも善ならざるを主張し、第二十章は人意に由りて自ら定めたる唯阿善惡に絶対の區別、鉅大の間隔なきを言ひしものにして、決して其の距離を撤廢し、其の種類を混同せむとするものに非ざるなり。況んや

有無相生、難易相成、長短相形、高下相傾、二章

貴以賤爲本、高以下爲基、三十九章

圖難於其易、爲大於其細、天下難事、必作於易、天下大事、必作於細、六十三章

の如きは、彼の眼底に明かに有無、難易、長短、高下、細大、貴賤を認識せるものならずや。

已に彼の眼底に大小長短を認識せる如く、亦彼の心中に是非善惡を認識せるものなり。たゞ是が必

ずしも絶対の是ならざる如く、非も亦必ずしも絶対の非ならず、善に絶対の敬意を表せざる如く、悪にも亦絶対の敵意を表せざるなり。畢竟是非善悪に固定の價值資格あるを認めざるのみ。何となれば人類の視て美と爲すものを、他の鳥獸蟲魚は敢て美と爲さず、我の視て善と爲すものを、彼は視て不善と爲すことあればなり。則ち彼の所謂無差別は決して是非善悪を混同するものに非ず。また是非を顛倒して是を非と曰ひ、善を惡と曰ふものに非ず。人の稱して是と曰ひ善と曰ふものは、彼も亦是と稱し善と稱し、人の稱して非と曰ひ惡と曰ふものは、彼も亦非と稱し惡と稱す。故に彼は君臣上下の關係に於ても、形式上の階級を無視して、自ら個人絶対主義を理想と爲し、唯我獨尊、しかも彼と我との區別を認めず、國と國との境界を撤廢し、一人即ち一國の如く、しかも其の間に何等の交通なく聯盟なく、團結なく、規約なく、遂に無政府の状態に歸する所以なり。

第七、無政府、老子は周の積弊に懲りて、當時の繁文縟禮を惡むと雖も、しかも亦決して王室顛覆の野心あるものに非ず。彼は當時の階級制度に反對するものなり。彼は當時の社會組織を否定するものなり。古今を問はず、東西を論せず、無政府主義の發生は概して彼と同一境遇に立ち、同一徑路を履むものなり。しかも彼が熱狂的に破壊の目的に猛進せず、過激の手段を固執せざりしは、彼の本領が虛無恬淡に在りて、無知無欲、その心を虚にして腹を實て、志を弱くして骨を強くせむことを期すればなり。しかも彼が

ればなり。しかも彼が

民之饑以<sub>三</sub>其上食<sub>レ</sub>税之多<sub>一</sub>、是以饑、民之難<sub>レ</sub>治、以<sub>三</sub>其上之有<sub>レ</sub>爲<sub>一</sub>、是以難<sub>レ</sub>治、 七十五章

天之道損<sub>二</sub>有餘<sub>一</sub>、而補<sub>二</sub>不足<sub>一</sub>、人之道則不<sub>レ</sub>然、損<sub>二</sub>不足<sub>一</sub>以奉<sub>二</sub>有餘<sub>一</sub>、 七十七章

と曰ひし如き、多少の過激的危險性を帶ぶと雖も、當時聚斂の弊を慨歎せしものにして、孔子の所謂苛政猛<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>虎と同じ。必ずしも是を以て直ちに革命の意志ありと認定すべからず。また

天下多<sub>二</sub>忌諱<sub>一</sub>、而民彌昏、民多<sub>二</sub>利器<sub>一</sub>、國家滋貧、人多<sub>二</sub>技巧<sub>一</sub>、奇物滋起、法令滋彰、盜賊多有、 五十七章

朝甚除、田甚蕪、倉甚虛、服<sub>二</sub>文采<sub>一</sub>、帶<sub>二</sub>利劍<sub>一</sub>、厭<sub>二</sub>飲食<sub>一</sub>、財貨有<sub>レ</sub>餘、是謂<sub>二</sub>盜夸<sub>一</sub>、 五十三章

の如きも、亦後漢の梁鴻の五噫歌に陟<sub>二</sub>彼北邙<sub>一</sub>兮噫、顧<sub>二</sub>瞻帝京<sub>一</sub>兮噫、宮闕崔巍兮噫、民之劬勞兮噫、遼々末<sub>レ</sub>央兮噫と曰へると同じく、悲憤慷慨の念より出でしものにして、虛無恬淡主義の口より發すべきに非ざるなり。

然れども彼は決して過激の革命論者、極端の民主主義者に非ず。第三十九章に昔之得<sub>レ</sub>一者、天得<sub>レ</sub>一以清、地得<sub>レ</sub>一以寧、神得<sub>レ</sub>一以靈、谷得<sub>レ</sub>一以盈、萬物得<sub>レ</sub>一以生、侯王得<sub>レ</sub>一以爲<sub>二</sub>天下貞<sub>一</sub>と曰ひしは、侯王の存在を天地神谷萬物に對比するものなり。況んや貴以<sub>レ</sub>賤爲<sub>レ</sub>本、高以<sub>レ</sub>下爲<sub>レ</sub>基、是以侯王自稱<sub>二</sub>孤寡不穀<sub>一</sub>、此其以<sub>レ</sub>賤爲<sub>レ</sub>本耶、非乎と曰へるに於ては、貴賤一體君民相無かるべからざる意あるものに非ず



や。また第六十二章に立天子、置三公、雖有拱壁以先駟馬、不如坐進此道と曰へば、君臣上下の階級を打破せむと欲する彼も、亦天子三公の名分を蔑視せざるなり。且つ彼の書中に數ば聖人を稱するは、彼の理想の人君を指すものなれば、彼の心底に尙ほ君主政治の意見の存在せるを知るべし。たゞ人君が無爲にして干涉することなく、而して民衆これに化して爲すことなく、人主が不言にして命令することなく、而して民衆これに化して言ふことなく、上に恩威なく、下に僭越なく、君民一様にして、上下同權なり。これ彼の理想にして、無意自然の結果、自ら無政府の状態を實現せるものなり。

### 第六章 道德教の文章

老子の文章は文の玄なるものなり。故に史記に評して微妙難識と曰ひぬ。蓋し彼の文の玄妙なるは、必ずしも拮屈聲牙なるに非ず、簡短の辭中に深遠の意を寓せ、精鍊の句中に奇變の筆を錯ゆるを以てのみ。隋の薛道衡の老子廟碑に其辭簡而要と曰ひしは、其の修辭の妙を看破せしものにして、宋の李性學の文章精義に老子と孫子とを並稱して一句一理、如串八寶珍珠、間錯而不斷、文字極難學と曰ひしは、奇正相合して、環の端なき如きをいひしものなり。

文章として道德經の特色は一に對句の多きこと、二に比喩の巧なること、三に助字の少きこと、四に押韻の多きこと、五に結句の奇なるにあるなり。試に道德經に就きて論ずれば、一部の書が上下二篇なりしは、司馬遷以前より然りしこと、史記に老子迺著書上下篇と曰へるによりて知るべし。上篇に道を論じ下篇に徳を論ずるもの多し。故に後人因りて上篇を道經と曰ひ、下篇を徳經と曰ふものあるは穿鑿に過ぐ、決して作者の本旨を得たるものに非ず。況んや章節の分合に於てをや。蓋し漢の河上公註に始めて八十一章に分ちしより、後世これに準據するもの多しと雖も、八十一章に分つこと必ずしも作者の本旨に非ざるべし。上經は天に法り奇數を取りて三十七章と爲し、下經は地に法り偶數を取りて四十四章と爲すと曰ふものあるも、畢竟牽強の説なり。嚴遵が七十二章に分ち、上經を四十四章と爲し、下經を三十二章と爲し、如き、亦八十一章に分つことが先秦の定本ならざるを知るべし。しかも七十二章に分ちし所以を説明して、陰道は八、陽道は九、八を以て九に乘じ七十二章を得と曰ふものあるも亦附會の説なり。後ち王弼が七十九章に分ち、元の吳澄、清の魏源が六十八章に分ち、我國の葛西因是が二十六節に分ち、川田甕江が二十五章に分ちし如き、皆老子の章節の分合が古來一定せざるを知るべきのみならず、當初老子の原本は上下二篇に分ちしのみにして、曾て章を分たざりしを想察すべし。史記本傳に老子迺著書上下篇と曰ひ、漢書揚雄傳に桓譚の言を引きて、老聃著書

無之言兩篇」と曰へる如き、これなり。

河上公の注本が俗間の妄書なることは、唐の劉知幾已に辨じぬ。其の注が神仙の説に託するのみならず、章節の分合に至りては、合はすべきを分ち、分つべきを合はすもの多し。王弼の注本は元と七十九章に分ちしも、現行の王注本が八十一章と爲りしは、河上公注本の妄書なるを知らずして、後人却つて其の謬を襲ぎしものなり。故に宋の司馬光、我國の楠天童、重野葆光の如き、皆章を分たざるなり。章節已に此の如くに一定せず。況んや通篇の文字多少異同に於てをや。

道德經上下二卷を道家者流が相傳へて五千言と曰ふは、其の全數を概算せしのみ。唐の玄宗の時に道士吳筠が帝の間に對へて、道法之精、無<sub>レ</sub>如<sub>三</sub>五千言と曰ひ、憲宗の時に李藩が帝の間に對へて、道家所<sub>レ</sub>宗、老子五千文爲<sub>レ</sub>本と曰ひし如き、皆これなり。史記に五千餘言と曰ひしは、六千言に満たざるを言ふのみ。故に道德經の本文は各種の傳本によりて文字に多少あり。河上公本に五千三百五十五字と五千五百九十字の二種あり。王弼本に五千六百八十三字と五千六百一十一字の二種あり。齊の武平五年に發掘して得たる所謂項羽妾本、及び魏の太和中に道士冠謙之の得たる安丘望之本は並に五千七百二十二字、葛西因是の輻注本は五千二百二十七字なれば、道德經の文章は容易に其の眞を得べからず。若し漫に文字を刪りて五千の定數に合はしめむとするが如きは、固陋の見に非ざれば、迂愚の

徒なり。則ち現今傳ふる所の道德經も亦誤字あり、脱字あり、衍文あり、錯簡あるを知るべし。且現存の道德經に重出の語句多し、例へば

挫<sub>三</sub>其銳、解<sub>三</sub>其紛、和<sub>三</sub>其光、同<sub>三</sub>其塵、

の四句は、四章と五十六章とに重出し、

物壯則老、謂<sub>三</sub>之<sub>レ</sub>不道、不道早已、

の三句は、三十章と五十五章とに重出し、

塞<sub>三</sub>其兌、閉<sub>三</sub>其門、

の二句は、五十二章と五十六章とに重出し、

生而不<sub>レ</sub>有、爲而不<sub>レ</sub>恃、

の二句は、二章、十章及び五十一章に三出し、

信不<sub>レ</sub>足焉、有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>信焉、

の二句は、十七章及び二十三章に重出せるが如き、これなり。

一、道德經には對句多く、殆ど每章に見ゆ。而して其の對句に正對、駢對、蹉對、回文對、流水對等あり。

無名天地之始、有名萬物之母、一章

虛其心、實其腹、弱其志、強其骨、三章

寵爲上、辱爲下、得之若驚、失之若驚、十三章

其上不皦、其下不昧、十四章

唯之與阿、相去幾何、善之與惡、相去何若、二十章

曲則全、枉則直、窪則盈、敝則新、少則得、多則惑、二十二章

吉事尚左、凶事尚右、三十一章

貴以賤爲本、高以下爲基、三十九章

瓌々如玉、落落如石、三十九章

躁勝寒、靜勝熱、四十五章

爲學日益、爲道日損、四十八章

以正治國、以奇用兵、五十七章

禍兮福之所倚、福兮禍之所伏、五十八章

圖難於其易、爲大於其細、六十三章

天下難事、必作於易、天下大事、必作於細、同上

堅強者死之徒、柔弱生之徒、七十六章

高者抑之、下者舉之、有餘者損之、不足者補之、七十七章

の類は正對なり。

皆知美之爲美、斯惡已、皆知善之爲善、斯不善已、二章

天地不仁、以萬物爲芻狗、聖人不仁、以百姓爲芻狗、五章

五色令人目盲、五音令人耳聾、五味令人口爽、十二章

惚兮恍兮、其中有象、恍兮惚兮、其中有物、二十一章

不自伐、故有功、不自矜、故長、二十二章

自伐者無功、自矜者不長、二十四章

善行無轍迹、善言無瑕譏、二十七章

善閉無關鍵、而不可開、善結無繩約、而不可解、同上

常善救人、故無棄人、常善救物、故無棄物、同上

果而勿矜、果而勿伐、果而勿驕、三十章

天得一以清、地得一以審、神得一以靈、谷得一以盈、三十九章

明道若昧、進道若退、夷道若類、四十一章

大成若缺、其用不敝、大盈若冲、其用不窮、四十五章

大道若屈、大巧若拙、大辯若訥、同上

罪莫大於可欲、禍莫大於不知足、咎莫大於欲得、四十六章

善者吾善之、不善者吾亦善之、得善矣、信者吾信之、不信者吾亦信之矣、得信矣、四十九章

兕無所投其角、虎無所措其爪、兵無所容其刃、五十章

方而不割、廉而不剌、直而不肆、光而不耀、五十八章

爲無爲、事無事、味無味、六十三章

欲上民、必以言下之、欲先民、必以身後之、六十六章

不敢爲主、而爲客、不敢進寸、而退尺、六十九章

自知不自見、自愛不自貴、七十二章

の類は駢對なり。

不尙賢、使民不爭、不貴難得之貨、使民不爲盜、三章

持而盈之、不如其已、揣而銳之、不可長保、九章

天下有道、卻走馬以糞、天下無道、戎馬生於郊、四十六章

未知牝牡之合而峻作、精之至也、終日號而嗷不暇、和之至也、五十五章

天下多忌諱、而民彌昏、民多利器、國家滋貧、五十七章

の類は蹉對なり。蹉對は合掌を忌む爲に生ずるものなり。

善人者不善人之師、不善人者善人之資、二十七章

知者不言、言者不知、五十六章

信言不美、美言不信、八十一章

善者不辯、辯者不善、同上

知者不博、博者不知、同上

は回文對なり。また

其出彌遠、其知彌少、四十七章

其政悶々、其民淳々、其政察々、其民缺々、五十八章

は流水對なり。

二、老子に比喻を用ふること多し。而して其の比喻に直喩あり、簡喩あり、對喩あり、博喩あり、詳喩あり、奇喩あり。直喩とは、主語と説明語との間に猶、若、如、似、比などの字を用ひて、比喻を成すものなり。例へば

天地之間、其猶橐籥乎、 五章

上善若水、 八章

含德之厚、比於赤子、 五十五章

治大國、若烹小鮮、 六十章

天之道其猶張弓乎、 七十七章

の類これなり。また簡喩とは、單語若しくは複語の名詞を假りて、或る意味に代用するをいふ。例へば

萬物之母 一章

以萬物爲芻狗 五章

天地之根 六章

重爲輕根 二十六章

衆妙之門 一章

玄牝之門 六章

能爲雌乎 十章

靜爲躁君 二十六章

知其雄、守其雌 二十八章

知其白、守其黑 二十八章

爲天下母 五十二章

復知其子 五十二章

天下之牝 六十一章

聖人被褐懷玉 七十章

爲天下谿 二十八章

爲天下谷 二十八章

既知其母 五十二章

大國者下流 六十一章

江海能爲百谷王 六十六章

愛國之垢 七十八章

の類これなり。

持而盈之、不如其已、揣而銳之、不可長保、 九章

迎之不見其首、隨之不見其後、 十四章

飄風不終朝、驟雨不終日、 二十三章

政者不立、跨者不行、 二十四章

の類は對喩なり。對喩とは二個の對偶的比喻をいふ。また

三十輻共一轂、當其無、有車之用、埏埴以爲器、當其無、有器之用、鑿戶牖以爲室、當其無、有室之用、 十一章

豫兮若<sub>二</sub>冬涉<sub>レ</sub>川、猶兮若<sub>レ</sub>畏<sub>二</sub>四鄰、儼兮其若<sub>レ</sub>客、渙兮若<sub>二</sub>氷之將<sub>レ</sub>釋、敦兮其若<sub>レ</sub>樸、曠兮其若<sub>レ</sub>谷、渾兮其若<sub>レ</sub>濁、 十五章

合抱之木、生<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>毫末、九層之臺、起<sub>レ</sub>于<sub>二</sub>累土、千里之行、始<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>足下、 六十四章

の類は博喻なり。博喻とは三個以上の比喩を屬敘するをいふ。また

天下之至柔、馳<sub>二</sub>聘天下之至堅、出<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>無<sub>レ</sub>有、入<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>無<sub>レ</sub>間、 四十三章

天下柔弱、莫<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>水、而攻<sub>二</sub>堅强者、莫<sub>二</sub>之能勝、以<sub>二</sub>其無<sub>二</sub>以易<sub>レ</sub>之也、 七十八章

の類は詳喻なり。詳喻とは一個の比喩を詳細に説明するものをいふ。これに反して、

樂與<sub>レ</sub>餌、過客止、 三十五章

致<sub>レ</sub>數<sub>レ</sub>車無<sub>レ</sub>車、 三十九章

躁勝<sub>レ</sub>寒、靜勝<sub>レ</sub>熱、 四十五章

の類は奇喩なり。奇喩とは直接に前文を承けず、下文に屬せず、忙中に閑を偷みて比喩を用ふるをいふなり。

三、五千言中に助字を用ふること少きは、殆ど尙書と揆を一にせり。但し語尾の助字として、決辭に也、矣、已、焉、哉、夫の六字ありて、爾耳なし。疑辭に乎、與、邪、耶の四字ありて、歟の字な

し。若しこれを論語に比すれば、決辭に爾耳の二字少きも、疑辭に耶の字多し。故に助字の數に於て論語と大差なきも、論語の決辭に也、已、已、矣、焉、而、已、矣、矣、夫、也、已、矣、矣、哉の連屬語多く、疑辭に矣、乎、焉、爾、乎、也、與、而、已、乎、乎、哉の連屬語多きに比して、老子には僅に二個の也、哉、一個の也夫、一個の而已矣を用ふるのみ。且つ也、矣、已、焉、哉、夫の六字、及び乎與、邪、耶の四字を用ひし場合も亦甚だ希にして、通篇に八個の也の字、九個の矣の字、二個の已の字、六個の焉の字、四個の哉の字、一個の夫の字、八個の乎の字、一個の與の字、二個の邪の字、一個の耶の字あるのみ。

また前置詞として「ニ」または「ヨリ」と讀む場合に於ける助字は、於の字あるのみにして、乎、于の二字なし。而して於の字は全篇中に五十二個を用ふ。

四、老子の文中に韻を押すもの多きは、古文の常にして、尙書に往々これあるのみならず、易及び論語にも亦これあり。例へば老子上卷に於て、

有無相生、難易相成、長短相形、高下相傾、音聲相和、前後相隨、 二章

挫<sub>二</sub>其銳、解<sub>二</sub>其紛、和<sub>二</sub>其光、同<sub>二</sub>其塵、 四章

谷神不<sub>レ</sub>死、是謂<sub>二</sub>玄牝、玄牝之門、是謂<sub>二</sub>天地之根、綿々若<sub>レ</sub>存、用<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>勤、 六章

載營魄一抱一、能無離乎、專氣致柔、能如嬰兒乎、滌除玄覽、能無疵乎、愛民治國、能無爲乎、天門開闔、能爲雌乎、明白四達、能無知乎、十章

致虛極、守靜篤、萬物並作、吾以觀其復、十六章

俗人昭々、我獨若昏、俗人察々、我獨悶々、澹兮其若海、漂兮若無所止、衆人皆有以、我獨頑且鄙、

我獨異於人、而貴求養於母、二十章

跂者不立、跨者不行、自見者不明、自是者不彰、自伐者無功、自矜者不長、二十四章

知其雄、守其雌、爲天下谿、爲天下谿、常德不離、復歸於嬰兒、知其白、守其黑、爲天下式、爲

天下式、常德不忒、復歸於無極、知其榮、守其辱、爲天下谷、爲天下谷、常德乃足、復歸於樸、

二十八章

の類これなり。下卷に於ても、第三十九章以下、四十一、四十五、四十六、五十三、五十四、五十五、五十八、五十九、六十八、七十五、七十六章の如き、皆一章若しくは一節に韻を押せり。その他に同字韻を押すもの亦多し。故に韓非は老子に擬して揚權一篇を作り、篇中に韻を押す所多し。

五、老子の文に一種の慣用の結法あり。これ論、孟、荀、韓の書に見ざる所なり。例へば、

夫唯弗居、是以不夫、二章

非以其無私邪、故能成其私、七章

夫唯不爭、故無尤矣、八章

夫唯不盈、故敝不新成、十五章

是以聖人終不爲大、故能成其大、三十四章

是以聖人猶難之、故終無難矣、六十三章

是以天下樂推而不厭、以其不爭、故天下莫能與之爭、六十六章

夫唯病病、是以不病、七十一章

夫唯不厭、是以不厭、七十二

夫唯無以生爲者、是賢於貴生、七十五章

の如く、奇矯の筆を用ふるは、その一なり。また

是謂玄德、十章

是謂道紀、十四章

是謂要妙、二十七章

是謂玄德、五十一章

是謂ニ襲常一 五十二章

是謂ニ盜夸一 五十三章

の如く、總束の筆を用ふるは、その二なり。

是以聖人爲レ腹不レ爲レ目、故去レ彼取レ此、 十二章

是以大丈夫處ニ其厚、不レ居ニ其薄、處ニ其實、不レ居ニ其華、故去レ彼取レ此、 三十八章

是以聖人自知不ニ自見、自愛不ニ自貴、故去レ彼取レ此、 七十二

の類はその三なり。また

吾何以知ニ衆甫之然ニ哉、以レ此、 二十一章

吾何以知ニ天下之然ニ哉、以レ此、 五十四章

吾何以知ニ其然ニ哉、以レ此、 五十七章

の類はその四なり。但し五十七章のみは舊來章末に屬せざるを以て、人又は結句ならざるを疑はむも、二十一章及五十四章の例によれば、たしかに結句なり。故に兪樾、葛西因是、及び川田壘江は五十七章の此句以上を裁割して、五十六章の末に屬せり、これ先づ我心を獲たるものなり。

且つ老子の章法に起承轉合の法を備へ、首尾昭應の妙を存するものあり。第十二章、十七章、二十

二章、二十六章の如き、皆これなり。また老子の句法に一種の昭應法を用ふるものあり。例へば

天地所ニ以能長且久一者、以ニ其不ニ自生、故能長久、 七章

聖人能成ニ其大、以ニ其不ニ自大、故能成ニ其大、 三十四章

聖人不レ病、以ニ其病ニ病、是以、不レ病、 七十一章

民之饑、以ニ其上食、稅之多、是以饑、 七十五章

民之難治、以ニ其上之有、爲、是以難治、 同上

民之輕死、以ニ其求生之厚、是以輕死、 同上

の如き、これなり。また句法に一正一反の法を用ひて、人の耳目を聳動するものあり。例へば

下士聞レ道、大笑レ之、不レ笑、不足ニ以爲レ道、 四十一章

夫唯大、故似ニ不肖、若肖、久矣、其細也、 六十七章

夫唯無レ知、是以不ニ我知、知、我者、希則我者貴、 七十章

の如き、これなり。また字法の奇警なるに至りては、前に述べし簡喩の場合のみに非ず。七十三章の勇レ於レ敢則殺、勇レ於ニ不敢、則活の二句の如き、上句の勇の字の用法は常法なりしも、下句の勇の字の用法は葛西因是の所謂自ニ有ニ勇字一以來、未レ見ニ如レ是用レ之者一ものなり。



## 第七章 彼に對する後人の景仰

老子の道は生存中に行はれざりしも、老子の教は死後に傳はり。漢の初には黃老と並稱せられ、また道家と稱せられて、一時隆盛を極め、後漢に至りて道教を開きぬ。魏晉の交に於ては、或は易老と對稱し、或は老莊と駢稱して、大に學士大夫の間に歡迎せらる。唐の世には玄學と稱して學校を立て、宋の世には釋老と並稱せられて、程顥、張載、張洽の倫と雖も、亦嘗て釋老に出入せり。其の間に於て漢の轅固は嘗て老子を稱して家人の言と曰ひ、晉の裴頠は老子の無に反對して崇有論を著はし、魏の崔浩は老子を好まず、これを讀むことに數十行に過ぎず、輒ち棄て、此矯誣之說、不近人情、必非老子所作、老聃習禮、仲尼所師、豈設敗法文書、以亂先王之教と曰ひ、また晉の陶侃は諸參位の徒に談戲して事を廢するを惡み、その酒器蒲博の具を取り、悉く江に投じて、擣蒲者牧猪奴戲耳、老莊浮華、非先王之法言、不可行也と曰ひ、梁の何敬容は太宗嘗て太子たりし時、自ら老莊二書を講ずるを聞き、昔晉代喪亂由祖尙元虛、今東宮復襲此、殆非人事、其將爲戎乎と曰ひしは、皆老莊の虛無を排斥するものなりしも、漢の桓譚は昔老聃著虛無之言兩篇、薄仁義、非禮學、然後世好之者、尙以爲過於五經、自漢文景之君及司馬遷、皆有是言漢書揚雄傳贊と曰へは、漢の世已に五經以上に尊宗せ

るものありしを知るべし。晉の殷仲堪が常に三日不讀道德論、便覺舌本間強と曰ひ、嵇康の與山濤告絕書に、老子莊周吾之師也、吾每讀老莊、重增其放、故使榮進之意日頽、任逸之情轉篤と曰ひ、宋の沈演之が老子を讀むこと日に百遍なりし如き、蓋し老莊信仰宗の至篤なるものと謂ふべし。漢に於ては前に蕭何、曾參あり、後に文帝、景帝、及び竇太后ありて、大に黃老を尙びぬ。蓋し老子の學統を傳ふるものに、樂巨公、蓋公、田叔、河上公、嚴遵、安丘望之、楊厚などありて、盛に玄風を鼓吹せり。漢書藝文志に著録せる老子注は、僅に鄰氏經傳四篇、傳師經說三十七篇、徐氏經說六篇の三種に過ぎず。而して六朝の際已に亡びしかば、隋書經籍志には復たこれを録せず。却つて河上公注二卷、嚴遵注二卷、安丘望之注二卷を載す。こは蓋し魏晉以後の人の假託にして、曾て班固の目に觸れざりしものならむ。

魏の世に何晏王弼等大に玄風を鼓吹せしかば、魏晉の際は老莊全盛の時代にして、學者は老莊を以て宗として六經を黜け、談者は虛蕩を以て辯と爲して名檢を賤み、官に當るものは、空虛を以て高と爲して恪勤を笑ひ、身を修むるものは、放濁を以て通と爲して節信を狹とす。故に阮籍、嵇康、山濤、向秀、郭象、裴楷、王濟、王衍、阮修、阮放、呂安、謝鯤、庾凱、庾亮、殷仲堪など、皆老莊を好まざるはなし。初め何晏自ら老子に注し、成るに及びて王弼を訪ひ、弼の老子注の精奇なるを見、乃ち

歎じて、若<sub>二</sub>斯人<sub>一</sub>可<sub>三</sub>與論<sub>二</sub>天人之際<sub>一</sub>矣と曰ひ、因つて其の注を改めて道德論二篇と爲せり。王弼の老子注二卷が幸に今日に傳はりしは、偶然に非ず。他に董遇、鍾會、虛翻、羊祜、孫登、袁真、王尙、鄧粲など、皆老子に注せしも、亦王注の精奇に如かざるなり。

南北朝に至りて、老子を崇尚せるものは、宋に沈演之あり。齊に張融、周顒、顧歡あり。顧歡は老子義綱一卷、老子義疏一卷を著せり。梁に武帝、簡文帝、江革、伏曼容、賀瑒、嚴植之、劉昭、庾承先あり。武帝は老子講疏六卷を著し、簡文帝は老子私記十卷を著せり。陳に馬樞、周弘正、徐陵、張譏、全觀、陸瑜あり。周弘正は老子疏五卷を著し、老子義十一卷を著せり。魏に程駿、邢晏あり。周に盧光あり、道德經章句を撰せり。隋に張羨、潘徽あり。張羨は道言五十二篇を著せり。唐に於ては上に太宗、玄宗あり、最も篤く老子を信せしかば、下に陸希聲、房琯、王希夷、吳筠、秦系、王績、孫思邈、盧照鄰、李白、柳弁、劉太真、尹徵、閻士和、陳希烈などあり、皆深く老子を尙びしものなり。また傅奕、劉子玄、白履忠、尹知章の徒は各自ら老子に注して、一世に行はれしも、已に宋の世に亡びぬ。たゞ玄宗の注二卷、成玄英の疏七卷、盧藏用の注二卷、陸德明の疏十五卷は唐書に収録せり。宋に於ては學士大夫の老子を研究するもの多し。中にも司馬光の注二卷、王雱の訓傳二卷、蘇轍の解二卷、趙善湘の解十卷、徽宗皇帝の解二卷、晁公武の通述二卷は皆その當時に行はれしものなり。

特に王雱の訓傳を著すや、王安石自ら携へて市に鬻ぎしといふ。また蘇轍の老子新解成るや、蘇軾これを読み、卷を盡くさずして嘆じて、使<sub>三</sub>戰國時有<sub>二</sub>此書<sub>一</sub>、則無<sub>二</sub>商鞅韓非<sub>一</sub>、使<sub>三</sub>漢有<sub>二</sub>此書<sub>一</sub>、則孔老爲<sub>レ</sub>一、晋宋間有<sub>二</sub>此書<sub>一</sub>、則佛老不<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>一、不<sub>レ</sub>意老年見<sub>二</sub>此奇特<sub>一</sub>と曰ひぬ。その他に洪興祖は老莊本旨を著し、程大昌は易老通言を撰し、林慮は老子解を著し、王炎も亦老子解を撰せしも、元明の際已に亡びぬ。

金元の際、特に老子の研究を以て名あるもの殆ど無かりしも、明に至りて黃潤玉の道德經注解二卷、王道の老子億二卷、朱得之の老子通義二卷、薛惠の老子集解二卷、皇甫濂の道德經輯解三卷、田藝蘅の老子指元二卷、焦竑の老子翼二卷、龔錫爵の老子疏略一卷、陶望齡の老子解二卷、陸西星の老子玄覽二卷は皆明史藝文志に著録せらる。清に於ては胡與高の道德經編註二卷、汪縉の讀道德經私記一卷、黃元御の道德經懸解二卷は皆四庫全書總目に収載せらる。

日本に於ては徳川時代に始めて老子の注釋書を出だせり。太宰春臺の老子特解二卷、皆川淇園の老子釋解二卷、豊浦被褐の老子妄言一卷、太田晴軒の老子全解五卷、葛西因是の老子幅注二卷、重野葆光の老子解二卷、渡政輿の老子集說二卷これなり。

## 第三篇 孔老二派の思想衝突

## 第一章 序 論

現今我國思想界の情勢に就きて、識者は皆大に憂慮せざるはなし。急進論者は此の際一日も速に救済を講せむとし、漸進論者は到るべき所に到るを待ちて然る後に解決せむとす。要するに現今の情勢を以て新舊思想の衝突なりとするは、萬目の同じく然りとする所なり。しかも所謂新思想が果して現在に於て如何なる勢力を扶殖せるか、將來に於て如何なる地歩を占有すべきかは、各人の見る所多少程度を異にせり。其の程度に至りては、若し所謂新思想に過激の性質、危険の分子ありとすれば、予は日本に於ける新思想は或る一部少數の士が神經過敏的に憂慮せるほどの勢力ありと信ずる能はず。嘗に現在に於て信ずる能はざるのみならず、將來に於ても亦信ずる能はず。何となれば我國體と相容れざる新思想は、三千年の歴史的道德習慣に養成せられたる國民、特に自覺自信あるものは、必ず國體を擁護し、歴史を尊重し、決して過激の思想に左右せられ、危険の風潮に靡従することなかるべければなり。もし自覺自信なき輕佻浮躁の徒が狡猾者の口に煽動せられて、平地に波を興すことありとするも、そは一時の現象にして、深く憂慮するに足らざるなり。例へば猫いらすは鼠に專用せらるゝものなりしも、一たび一女子に服用せられしより、百年の生命を安賣せむとする天下の婦女子が自ら進みて、鼠の仲間入を爲すもの多き如き、亦一時の現象のみ。離縁狀が復た古の三行半に非ずして、却つて婦人より發せられ、新聞に載せられてより、天下に節を持する老嫗あるも、復た孤閨を歎ずる老寡なからむとするが如き、亦一時の現象は決して憂慮するに足らず。飄風は朝を終へず、驟雨は日を終へず。故に新思想に對して意外に樂觀せる予輩は、却つて舊思想によつて養成せられし知識階級の道德的精神が日を逐ひて弛廢し、歳と與に墮落し、復た曩日の緊張を見ざるに對して、最も悲觀するものなり。こゝに於て所謂大和魂、若しくは武士道の舊典型は殆ど今日に亡びしも、日本紳士としての新態度あり、新特色ありとすれば、遺憾ながら不義の富貴に眷戀するに在りと謂はざるを得ず。

近來各所に收賄事件の續出せるが如き、正に此の事實を證明せるものならずや。

此の如く我國の智識階級の道德が近來頹廢せし原因を釋ぬるに、彼等も亦必ずしも新思想に歸化せむとするものに非ず。たゞ新思想てふ新の一字に捕はれて、自家の頭腦を舊思想なりと卑下し、時代錯誤なりと追讓し、隨つて日本固有の道德に對する信念自ら薄らぎ、遂に良心麻痺して、禮儀なく、廉耻なく、檢舉さへせられざれば厚顏恬然として紳士風を吹かすものなり。孔子の所謂免而無耻も

のは實に此の種の人類を指斥せしものにして、亦法律萬能主義の必然の結果ならずや。これ予が茲に本題を掲げて、孔老思想の源流を尋ねむとする所以なり。蓋し所謂新思想は必ずしも新ならず。老子已に平等主義を二千五百年の前に發表せり。而して所謂舊思想も亦必ずしも舊ならず。日月の明は天地と與に日々新なり。則ち所謂新舊思想の衝突も、畢竟孔老二派の思想衝突に過ぎざるのみ。

## 第二章 彼等二子の主張

孔老二子は俱に曠古の偉人にして、孔子は儒家の開祖として、老子は道家の元祖として、與に範を數千載の後に垂るゝものなり。孔子が洽聞強記、夙に禮樂を好み、幼時嬉戲するに俎豆を陳ね、禮容を設けしは、老子が古に博く今を知り、禮樂の原に通じ、道德の歸を明にし、嘗て周の柱下の史たりしに近し。

淮南子云、子適周、訪樂於二萇弘、弘語劉文公曰、吾觀仲尼、有聖人之表、河目而龍頰、黃帝之形貌也、修肱而龜背、長九尺六寸、成湯之容體也、言稱先王、躬履謙讓、洽聞強記、博物無窮、抑亦聖人之興者乎、文公曰、方今周室衰微、諸侯力爭、孔子布衣、聖將安施、孔曰、堯舜文武之道、或弛而墮、禮樂崩喪、亦正其統紀而已矣、既而孔子聞之曰、吾豈敢哉、亦好禮樂者也、

家語云、孔子謂南宮敬叔曰、吾聞老聃博古知今、通禮樂之原、明道德之歸、則吾師也、今將往矣、對曰謹受命、遂言於魯君曰、孔子將適周、觀先王之遺制、考禮樂之所極、斯大業也、君盍以乘資之、臣請與往、公曰諾、與孔子車一乘、馬二匹、豎子侍御、敬叔與俱至周、問禮于老聃、訪樂于

萇弘 觀周解

而して二子の主張は大に相反せり。孔が學を好み、仁を主とし、禮を尙びて、非禮は視ることなかれ、非禮は聽くことなかれ、非禮は言ふことなかれ、非禮は動くことなかれと曰へるに反し、老は仁を絶ち義を棄て、遂に禮を忠信の薄と曰ひ、亂の首と稱せり。孔が是非善惡を嚴格に區別して、道二、仁與三不仁而已矣と曰へるに反し、老は善惡平等を高唱して、善之與惡相去何如と曰へり。孔が三達徳五達道、務めて綱常を明かにせむとするに反し、老は和光同塵、無爲を理想とし、柔弱を尙べり。孔が誠意、正心より修身、齊家、治國、平天下を目的とせるに反し、老は徒に心を治むるを知りて、天下國家あるを知らざるもの、如し。孔の言必ず先王を稱するに反し、老の言は常に嬰兒を稱せり。孔の道德は仁を中心とし、禮を起點とせるに反し、老の道德は仁義を除外せり。孔の所謂聖人は仁心を以て仁政を行ふものなるに反し、老の所謂聖人は不仁にして百姓を芻狗と爲すものなり。

非老一卷、吳兼撰云、孔子喜剛、老子喜柔、孔老所尙不同、

又云、易尙陽、老尙陰、易老所尙不同、

又云、孔門以是非爲一定、老子以爲無定而畏是非、

又云、孔門之教、好善惡惡、老子之教、善惡平等、

故に孔老初めて對面の際、老の意氣態度、傲然として忌憚する所なく、孔を待つに童孺を以てす、猶ほ黃石公の張良に於けるが如きは、二子の性格の異なるに由るべけれども、二子年齒の差自ら然らしむるものに非ずや。これを二派衝突の序幕とす。

### 第三章 彼等二子の生卒

孔老の年齒の差は、二子の言語應對に、或は急弦の如く、或は柔韌の如く、一は官長の如く、一は家僮の如く、一は傲慢に、一は謙虛にして、その態度に甚だしき懸隔を生じたりとすれば、茲に孔老會見の際に二子の年齢何許なるかを究むるは、尤も興味ある問題なり。而して孔老終生の經歷、特に其年月に於て、史記の孔子世家に錯誤多く、老子列傳は最も粗雜なれば、二者皆信を措くに足らず。故に清の林春溥は孔子世家補訂一卷を著せしも、後世諸家の孔老を研究するものは、概して史記に準據せざるはなし。而して史記の長所は善く言を敍べ事を記して、巧に其の人の神を寫し出だすに在

りて、必ずしも其の言行に繋ぐるに歲時月日を以てせざるなり。彼が史家として編年の舊體を革め、紀傳の新體を創めし所以も、亦實にこゝに存せり。故に彼の事實を敍ぶるや、往々年々に矛盾ありて彼此齟齬するも、敢て顧慮せざりき。例へば腠肉の至らざりしを理由として、孔子が魯を去りしを、孔子世家に魯の定公十四年(孔子の年五十六)に屬せり。然るに魯の世家はこれを定公十二年に屬せり。顧ふに孔子が季康子に迎へられて衛より魯に歸りしは、魯の哀公十一年(孔子の年六十八)なり。若し孔子世家に従ひて、定公十四年に魯を去りしものとすれば、哀公十一年までは、凡そ十三年なり。また魯の世家に従ひて、定公十二年に魯を去りしものとすれば、哀公十一年までは、凡そ十五年なり。然るに孔子世家に孔子之去魯、凡十四歲、而反于魯と曰ひしが如き、これなり。

孔子の生卒年月に就きて、明の宋濂は孔子生卒考を著し、清の孔廣牧は先聖生卒年月日考を著しぬ。蓋し孔子の生年月に就き、從來二説あり。一は周の靈王二十年(魯の襄公二十一年)冬十月庚子に生れ、周の敬王四十一年(魯の哀公十六年)夏四月己丑に七十三歳を以て卒すと爲し。一は周の靈王二十一年(魯の襄公二十二年)冬十一月庚子に生れ、周の敬王四十一年(魯の哀公十六年)夏四月己丑に七十三歳を以て卒すと爲すものなり。其歿年は同じく敬王四十一年(魯の哀公十六年)夏四月己丑にして、其壽は同じく七十三歳れば、誤謬は必ず生年月に在るべし。若し敬王四十一年より逆算して七十三に至れば、靈王の二十一年生れたりと

せざるべからず。これ史記、杜預の左傳注、蘇轍の古史、宋の羅泌の路史、元の金履祥の通鑑前編、明の潘孔脩の孔子通紀、清の李灼、及び黃晟の至聖編年世紀、孔廣牧の先聖生卒年月日考などに靈王二十一年説を奉ずる所以なり。然れども年齢の計算法を滿一年法とすれば、靈王の二十年十月に生れしものは、敬王の四十一年十月以後に至りて、始めて七十四歳と爲るなり。然るに孔子は夏四月巳丑に卒しぬ。これ公羊傳、穀梁傳、宋濂の孔子生卒考、清の狄子奇の孔子編年などに、靈王二十年説を主張する所以なり。また孔子の生日が庚子たりしことは、二説一致せるも、生月に至りては公羊傳に十一月と爲し、穀梁傳に十月となせり。春秋襄公二十一年（靈王二十年）の經に冬十月庚辰朔、日有食之とあり。十月朔を庚辰とすれば、庚子の日は十月二十一日に非ざれば、十二月二十日前後に在るべくして、十一月に庚子なし。故に生月は穀梁傳に據りて十月を正とせざるべからず。

孔子の生卒年月に就きて、諸家の意見己に此の如し。況んや老子の生卒年月に於ては、史記己にこれを闕如せしかば、後人漫に揣摩臆測して、荒誕誣罔の説を爲すもの多し。南齊書の顧歡傳に老子入關、之三天竺維衛國、國王夫人名曰淨妙、老子因其晝寢、乘日精入淨妙口中、後年四月八日夜半、子時、剖左腋而生、墜地即行七步、於是佛道興焉と曰ひしは、老子を以て釋迦の前身と爲すものなり。而して魏書の釋老志に釋迦於四月八日夜、從母右脅而生、釋迦生時、當周莊王九年、春秋魯莊公七年

夏四月辛卯夜恒星不見、是也と曰へり。若し魏書の如くに、釋迦の生時を周の莊王九年とすれば、老子の歿年は莊王の九年以前に在りと謂はざるべからず。果して然りとすれば、孔老相見るの機會は斷じて無きなり。何となれば老子の歿年と孔子の生年と相距ること一百三十六年にして、孔子の周に適きしを、假りに史記に従ひ孔子の年三十、即ち周の景王二十三年（魯の昭公二十年）なりとすれば、上、莊王の九年を距ること一百六十六年にして、孔が老を訪ひし時は、老の死後己に一百六十六年を経過せる後なり。則ち南齊書、魏書の荒誕なるを知るべし。況んや列仙傳に玄妙玉女、夢流星入口、八十一載道遙李樹下、乃割左腋而生と曰ひしに於てをや。玄妙の號は老子第一章の玄之又玄、衆妙之門より出でしものにして、道德經以後の追稱ならん。流星入口とは、簡狄玄が鳥の卵を呑みて契を生み、姜嫄が巨人の跡を踏みて棄を生みしと揆を一にせり。老子の割左腋而生は、釋迦の剖左腋而生と同一にして、畢竟其説を神奇にするのみ。その他列子、莊子、說苑、家語、及び續博物志などに載する老子の事蹟は、概して誣罔の説ならざるはなし。

#### 第四章 彼等二子の初對面

孔子が禮を老聃に問ひしは、孔子幾歳の時なりしか、後魏の酈道元の水經注、及び晉の皇甫謐の高士

傳に年十七の時と爲し、帆足萬里の入學新論に年二十餘と爲し、莊子に年五十一の時と爲し、も、史記、孔子世家には、孔子の年三十(魯の昭公二十年)以前に在りと爲しぬ。然れども孔子の周に適くに就きて、大に周旋の勞を取り、援助の功を成せしものは南宮敬叔なり。南宮敬叔が孔子に師事せしは、孟僖子が死に臨みて遺言せしによれり。孟僖子の死は昭公二十四年なり。春秋昭公二十四年の經に春王二月丙戌仲孫貜卒とあるこれなり。然るに史記に左氏昭公七年の傳を誤解し、孟僖子の死を以て此の年に繋げり。顧ふに昭公七年は孔子の年甫めて十七にして、十五志<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>學の後、僅に二年なれば、未だ人の師表たる資格あらざるなり。況んや南宮敬叔は、昭公十二年に生れしものにして、昭公七年は彼等の誕生前五年なるに於てをや。則ち敬叔の孔子に師事せしは、必ず昭公二十四年後ならざるべからず。然るに明の潘孔修の孔子通紀に、孔子が禮を問ひし事實を魯の昭公二十年(周の景王二十三年)に屬せしは、史記の杜撰を因襲せしものなり。唐の司馬貞の史記索隱、及び清の狄子奇の孔子編年に孔子三十四歲(魯の昭公二十四年)にして禮を老聃に問ふと爲ししもの、蓋し當を得たるならむ。清の李灼、黃晟の至聖編年世紀にこれを孔子三十五歲、昭公二十五年の時に屬せしは不可なり。何となれば昭公二十五年に孔子は周に在らずして、己に齊に在ればなり。況んや莊子天運篇に孔子、行年五十有一、而不聞<sub>レ</sub>道、乃南之<sub>レ</sub>沛、見<sub>レ</sub>老聃と曰へるに於ては、誣罔の言のみ。孔子の行年五十

一は魯の定公九年にして、孔子己に中都の宰と爲りぬれば。安んぞ沛に之きて老子を見る違あらむや。況んや又高士傳、水經注に孔子年十七(周の景王十年魯の昭公七年)適<sub>レ</sub>周と曰ひ、入學新論に年二十餘と曰へるに於てをや。前者は過ぎたるもの、後者は及ばざるものにして、俱に中を得ざるものなり。禮記、曾子問に孔子曰、昔者吾從<sub>レ</sub>老聃、助<sub>レ</sub>葬於<sub>レ</sub>巷黨、日有<sub>レ</sub>食<sub>レ</sub>之とあるは、春秋昭公二十四年の經に夏五月乙未朔、日有<sub>レ</sub>食<sub>レ</sub>之とあるを指すものならむ。孔子が禮を老聃に問ひしは、正に是の年なるべし。他の昭公二十年(史記、孔子世家)及び定公九年(莊子、天運篇)には、皆日食なし。たゞ昭公七年(水經注)に日食ありしも、此の時、敬叔未だ生れず、安んぞ能く孔子と俱に周に適かむや。故に予は史記索隱及び孔子編年に從ひ、孔子が禮を老聃に問ひしは、孔子三十四歳の時なりと信するものなり。

孔子が老聃を見し時、彼の年三十四なりとするも、當年老子の年齒何許なりしかを確知する能はず。何となれば史傳に老子の事を記するもの、皆その行跡を神祕にせむと欲し、生卒の年月、臨終の状態、壽命の長短等を明かにせざるのみならず、彼一生の經歷行動に繋ぐるに年月日を以てするを欲せざればなり。史記の老子傳に老聃、老萊子、太子儋を混同し、己に老子去、莫<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>其所<sub>レ</sub>終と曰ひ、また老子百有六十餘歲、或言二百餘歲、以<sub>レ</sub>其脩<sub>レ</sub>道而養<sub>レ</sub>壽也と曰ひ、また或曰儋即老子、或曰非也、世莫<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>其然否と曰ひ、務めて其筆を奇幻にして、無責任なる態度を執れるが如き、これなり。しかも孔老

相見るの日、老子の齒德並に高くして、既に己に晩年に近きこと疑ふべからず。何となれば老子の意氣稜々として、高く自ら標榜し、倨傲鮮腆、孔子を待つに童孺を以てすればなり。蓋し當時老子の思想己に一變して、復た昔日博古の風なかりしも、彼の心底に剛強の氣尙ほ存在し、彼の眼中に是非善惡の別、自ら伏在するもの、如し。況んや彼が仁人の號を竊みて孔子を送り、爲人子者母以有己、爲人臣者母以有己と曰ひしに於ては、即ち是れ名教の言にして、五千餘言に無爲自然を鼓吹せるものと撰を異にせり。則ち孔老初めて對面の日、老子己に晩年に近くして、彼の昔日盛年の氣象己に一變して、孔子の豫期に合はざりしと雖も、亦幾分か故態を存すれば、彼が關に入りて五千餘言を著はせし時に比して、蓋し數年の間隔ありしならむ。

顧ふに孔老二子の初對面の光景は、宛然一場の劇、その儘なりき。老子の意氣態度、孔子の容儀風采、一は傲岸不遜、一は溫順謙讓、犯して校せず、一は剛克、一は柔克、前者の言語は弘の如く、後者の應對は韋の如し、二子の面目、恍として見るが如し。抑も孔子の禮を知れることは、彼が老子を見る以前に於て、己に天下に定論ありしもの、如し。孟僖子が稱して達人なりと曰ひ、萇弘が評して聖人の表ありと曰ひし如き、皆一世の公評に由れるのみ。夫れ禮とは坐作、進退、言語、應對の小節より、郊社宗廟の大典、及び先王經國の大業までを包括するものなり。孔子嘗て俎豆の事を聞き、ま

た三代の禮を學び、禮儀三百威儀三千、皆己に曉通せざるはなし。しかも尙ほ成周の遺制を觀て、文武周公の盛德を欽仰せむと欲し、遂に周に適きて老子を訪ふ。これ修業時代の孔子が學びて厭はざる態度ならずや。

老子初めて孔子を見、口を開けば輒ち子所言者、其人與骨皆己朽矣と曰ひぬ。これ孔子の言必ず先王を稱するを罵るものなり。これ孔子の堯舜を祖述し、文武を憲章するを嘲るものなり。これ孔子の夢に周公を見るを刺るものなり。また一喝して子の驕氣と多欲と態色と淫志とを去れよと曰ひしは、幼より禮を好みて嬰兒たらんとするものなり。而して孔子が老子を目して吾今日見老子、其猶龍邪の歎ありしは、彼の逸才は復た人間界の物に非ざるを道破せしものにして、風雲に乗じて天に上り、恍惚變幻、實に端倪すべからざる龍を以て彼に比せしは、言外に過高の意あるを見はせるものならずや。川北溫山が老子猶龍之嘆、蓋謂龍之不可網、不可網、不可綸、不可如羊豕狐狸魚鼈之可以食、可以衣也と曰ひしも、亦過高にして功用なきを看破せしものなり。想ふに老子も亦夙に禮に精なるものなり。又嘗て文多くして質に勝ち、口に古先聖王を稱し、文武の政を謳歌せしものなり。想ふに孔子が禮を問ひしは、藏室の史たりし老子が、博識典禮の君子にして、能く故實を濫ね、名物度数を辨じ、禮樂の原に通し、道德の歸を明かにせるが爲のみ。然るに當時文武の道己に地に墜ち、禮樂刑政



復た天下に用なかりしかば、老子輒ち文を捨て、質を取り、有に易ふるに無を以てし、禮法を蔑し、仁義を黜け、聖智を棄て、只管人世を超越し人事を謝絶せむとす。こゝに於て禮を毀りて忠信の薄亂の首と曰ひしは、猶ほ揚雄が半生の心血を賦に注ぎながら、終に相如に及ばざるを自覺し、賦を罵りて雕蟲篆刻、壯夫不爲と曰ひしと一般なり。これ固より彼の一時矯激の心より出でしものなるべきも、亦彼の性格の凌厲なるは、孔子の溫良恭儉讓と揆を一にせざるを知るべし。蓋し彼は生來虛無恬淡の士に非ず。世を憂ひ時を慨する彼の眼中には、人心の危険にして、天下狂爛の廻すべからざるを看、彼の胸中には、民俗腐敗して、仁義禮智の恃むに足らざるを覺り、遂に新に一針路を開拓せむとす。英雄首を回らせば、即ち神仙。彼は不平鬱勃の境遇を脱却して、無爲自然の主義を絶叫せり。安井息軒が老子を評して、聃非<sub>二</sub>隱者<sub>一</sub>也、細玩<sub>二</sub>其書<sub>一</sub>皆憂<sub>レ</sub>世慨<sub>レ</sub>時之言と曰ひしは、司馬遷が聃を隱君子として取扱へるに反對して、聃の眞面目を發揮するものに庶幾し。しかも五千餘言は必ずしも皆憂世慨時の言に非ず。無爲自然は豈治國の經ならむや。たゞ積年の憂世慨時の極、遂に滿腔の不平を一掃して、虛無恬澹、上古の無爲を理想とするに至りぬ。而して書中に往々奇矯の言あるは、彼の本來の面目躍如として、發露せしものならむ。魏の崔浩が老莊の書を喜ばず、これを讀むごとに數行に過ぎずして、輒ち棄て、矯誣の説、人情に近からずと曰ひしも、亦こゝに見る所あるのみ。

### 第五章 彼等二派の盛衰

孔老の二子は、實に一世の偉人、千古の思想家にして、儒道の二家は、秦以後數千年の思想界を支配するものなり。しかも儒道の二家が主義目的に於て、冰炭相容れざるものあるは、孔老二子の意見が嘗て相融和せざりしよりも甚だし。故に孔派盛にして老派衰へ、儒家振はずして道家興るは、歴史の證明する所なり。蓋し道家の興るは、概して儒教の積弊已に極に達し、上下君臣、徒に形式に流れて、繁文縟禮を事とせるに基因せざるはなし。故に漢初に黃老出でしは、周の積弊が禮より發し、秦の滅亡が嚴刑重罰より起れるを看破し、蕭何曹參など、皆苟簡を尙び、無爲を理想とせる爲のみ。また魏晉の際に老莊流行せしは、後漢二百年の餘弊が徒に形式に拘はりて、人々虚偽に趨りし反動なるのみ。而して儒家の天下より道家の天下に推移する道程に於て、法家は常に津梁を爲して、儒道二家は曾て直接に授受の手續を爲さざるなり。例へば周と漢との間に秦皇の刑名主義行はれ、東漢と西晉との間に魏武の法術主義用ひられしが如き、是れなり。蓋し法家の執れる慘礪少恩の手段は、儒道二家の理想に一致せずと雖も、法を明にし罰を謹むは政教の要なると同時に、儒家の理想の一端にして、二帝三王と雖も易ふる能はざる所なり。然るに儒家に反目して、常に仇敵の態度を執れる法家は、反

つて道家に接近し、我より進みて握手せむとするもの、如し。顧ふに老莊の無爲自然は申韓の刑名を去ること霄壤の如し。然れども韓非己に解老喻老の二篇を作りて老子の爲に註釋の勞を取れり。故に司馬遷は不害傳に於て、申子文學、本於黃老、と曰ひ、韓非傳に於て、韓非者喜刑名法術之學、而其歸本於黃老、と曰ひ、且つ老莊申韓を合傳と爲し、其贊に莊子放論、亦歸之自然、申子卑々、韓子慘礪、皆原於道德文意、而老子深遠矣と曰ひ、清の吳鼎は列子莊子皆私淑老子、列得其靜、莊得其放、申韓竊老子之術、專用於刑名、と曰ひ、安井息軒も莊周得其無聖之言、以成猖狂自肆之學、韓非得其核實之說、以成慘酷少恩之法、と曰ひぬ。

儒、道、法の三家は時代の變遷に由りて、一盛一衰、互に消長を爲せりと雖も、法家の全盛の短期なるは、道家の勢力の稍や持久なるに如かず。而して道家の持久も、遂に儒家の勢力の最も持久なるに如かず。秦の命數僅に十餘年にして亡び、魏武の法術は十年を出でずして、魏文の通達に化したるが如き、蓋し法家の弊害の及ぶ所、道家に比して一層慘烈なるが爲ならずや。漢初の黃老は文景の世凡そ四十年間に流行せしも、儒家の勢力が武帝以後凡そ六世一百四十餘年に普及し、更に馴致して後漢二百年の天下を專制的に風靡せるに如かざること遠し。

## 第六章 漢代の二派衝突

漢に於ける孔老二派の衝突は、文景二帝の朝を最も甚だしとす。史記の老莊申韓傳に世之學老子者、則緇儒學、儒學亦緇老子、道不同、不相爲謀、豈謂是邪と曰へるは、正さに此の時代の衝突を指すものなり。蓋し文帝以前に於て、高祖最も儒者を好まざりしは、周末の積弊に懲りし爲にして、彼に黃老の信仰ありしに非ず。しかも彼の左右には恬淡にして慈儉を尙ぶ蕭何あり。また嘗て教を黃石公に受け、後に穀を避けて赤松子に従ひ遊ぶ張良あり。また蓋公を師として清靜を貴ぶ曹參あり。高祖が敵國を破り謀臣を亡ぼすに當り、この三人が功名赫々の身を以て、能く首領を保ち、天年を全うせし所以は、蓋し老子の玄旨を自得せし爲ならむ。且つ高祖の強を以て垢を受け辱を守り、常に隱忍して、柔が剛に勝ち、弱が強に勝つの理を應用せしも、亦この三人の指導匡救によれるものならずや。蘇軾の留侯論に當淮陰破齊而欲自王、高祖發怒、見於辭色、由是觀之猶有剛強不態忍之氣、非子房其誰全之と曰ひぬ。

史記云、韓信使人言漢王曰齊僞計多變、反覆之國也、不下爲假王以鎮之、其勢不定、願爲假王、當是時、楚方急圍漢王於滎陽、韓信使者至、發書、漢王大怒、罵曰、吾困於此、且暮望若來佐我、

乃欲自立爲王、張良陳平躡漢王足、因附耳語、曰漢方不利、寧能禁信之王乎、不如下因而立、善遇之、使自爲守、不然變生、漢王亦悟、因復罵曰、大丈夫定諸侯、即爲眞王耳、何以假爲、乃遣張良往、立信爲齊王、徵其兵擊楚、淮陰侯傳

特に鴻門の會に於ては、柔弱能く剛強に勝つての理想を實現せしものにして、張良に非ざれば到底爲す能はざる所なり。要するに漢は文帝以前に於て、黃老思潮已に上流社會に浸潤せるを知るべきなり。

漢に黃老の稱始めて出でしより、次に道家、次に道教の稱を生ぜり。これ皆老子の玄旨を繼承せざるはなし。第一、黃老の稱は高祖の世已に齊の地方に行はれしもの、如し。史記の曹相國世家によれば、高祖即位の初に曹參を齊の相國と爲せり。當時天下初めて定まり、百姓未だ安集せざりしかば、曹參嘗て諸儒を召して治道を問ふ。諸儒百を以て數ふ。人々その言を殊にせしかば、參は適從すべきを知らざりき。時に膠西に蓋公といふものあり、善く黃老の言を治む。參これを聞き、幣を厚くして聘せしむ。蓋公已に至りて、治道を論じ、清靜を説けり。こゝに於て曹參始めて黃老の術を用ひて、齊を治むること九年、齊國安集、大に賢相と稱しぬ。これ一地方の政事と雖も、亦漢初に於ける孔老二派の衝突にして、黃老の稱は、當時已に齊の國中に流行せしもの、如し。故に黃老の稱は本と天下初めて定まり、百姓未だ安集せざりし際に、無爲を以て天下を經紀せむとする政治的意義を有する

稱呼にして個人修養を目的と爲せるものに非ず。故に司馬遷は黃老の術を經世の學と看做して、慎到田駢、接子、環淵、申不害、韓非等經世の士を目するに黃老を以てせり。しかも先秦時代に黃老の稱ありしと斷定すべからず。陳澧の東塾讀書記に司馬遷が黃老の稱を慎到、田駢等に用ひしは、當時流行の新熟語を以て古人を評せしものなるを察せず、孟荀時代已に黃老の稱ありしと謂へるは謬れり。

黃老とは果して何人を指すか。余嘗て黃老の黃は黃帝に非ずして、老子前後に黃子と稱するものありしならむと疑ひぬ。何となれば黃帝は老子の倫に非ず、而して史記、太史公自序に太史公受易於楊何、習道論於黃子と曰ひ、儒林傳に轅固爲博士、與黃生、爭論景帝前と曰へばなり。その黃子と曰ひ、黃生と曰ふは、同一人なりや否やを知らずと雖も、景帝時代に於て、老子主義を懷抱せるものなるや明かなり。若し老子以前に黃子ありとすれば、景帝時代の黃子黃生はその後裔なるべし。若し老子以前に黃子なしとすれば、年代の先後に關せず、老子孔子を孔老と稱し、司馬遷班固を班馬と稱する如く、漢代の黃子を春秋時代の老子の上に置きしものならむ。これ予の年來解決する能はざりし宿疑なりき。然れども今にしてこれを思へば黃老の稱が黃帝老子を指すものなりしことは、史記の外戚家に竇太后好黃帝老子言、帝及太子諸竇不得下讀黃帝老子、尊其術と曰ひ、漢書の陳平傳に陳平少時家貧、好讀書、治黃帝老子之術と曰ひ、また漢書の外戚傳に竇太后好黃帝老子言、景帝、及

諸寶、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>讀<sub>二</sub>老子<sub>一</sub>學<sub>其術</sub>と曰へるによりて知るべし。しかも黄帝の性行を察すれば、彼は決して老子の理想に一致すべき無爲の聖人に非ざるなり。何となれば黄帝は支那文化の母にして、干戈を用ひ、舟車を作り、曆を造り、算數を作り、十二律を制し、嘗て炎帝を伐ち、また蚩尤を征せし曠古の英主にして、有爲の大人物なればなり。若し黄帝と老子と一致すべき點を索むれば、黄帝の上天と、老子の出關との傳説が、皆その人を神仙化する一事に在るのみ。然れども己に政治的意義を有し、經世的色彩を帶ぶる黄老の稱に、此の神仙的傳説を根據とせざるや明かなり。蓋し漢初に黄帝を以て老子に配せし理由は、無爲主義の老子が政治界に何等の權威なきを以て、畢竟理想の聖人を堯舜以外に求めざるべからず。孔子は堯舜を祖述し、文武を憲章にせり。故に老子派は堯舜以前に理想の聖人を求めて、孔子派と頡頏せむとす。これ亦孔老二派の軋轢の意思に出づるもののみ。

史記云、齊人公孫卿曰、黄帝采<sub>二</sub>首山銅、鑄<sub>二</sub>鼎於<sub>二</sub>荆山下、鼎既成、有<sub>下</sub>龍垂<sub>二</sub>胡髯、下迎<sub>二</sub>黄帝、黄帝上<sub>騎</sub>、群臣後宮從、上<sub>レ</sub>龍七千餘人、龍乃上去、餘小臣不得<sub>レ</sub>上、乃悉持<sub>二</sub>龍髯、拔<sub>二</sub>龍髯、墮<sub>二</sub>黄帝之弓、百姓仰<sub>二</sub>望<sub>二</sub>黄帝既上<sub>レ</sub>天、乃抱<sub>二</sub>其弓與<sub>二</sub>龍胡髯<sub>一</sub>號、故後世名<sub>二</sub>其處<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>鼎湖、其弓曰<sub>二</sub>烏號、於是天子曰、嗟乎吾誠得<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>黄帝、吾視<sub>レ</sub>去<sub>二</sub>妻子<sub>一</sub>如<sub>二</sub>脫<sub>二</sub>躡耳、乃拜<sub>二</sub>卿爲<sub>二</sub>郎、

又云、帝北巡、還祭<sub>二</sub>黄帝冢、上<sub>レ</sub>曰、吾聞黄帝不死、今有<sub>レ</sub>冢、何也、或對曰、黄帝已僊、上<sub>レ</sub>天、群臣葬<sub>二</sub>其衣

冠<sub>上</sub>故に武帝が董仲舒の對策を用ひて、六經を表章し、百家を攘斥するに及びて、黄老の言も亦一時に根を絶ちしは、黄老が儒術に對して、經世の道を説くものなればなり。若し黄老が個人的修養を主として、神仙的長生不死を理想とするものならば、神仙を好み、方士に惑ひ、長生久視を熱望する武帝は、必ず黄老を信じ、却つて儒者を排斥せむとすべし。

第二、道家の稱が、老子道德經より出でしことは、史記の太史公自序に或は道德家と稱し、或は道家と稱するに由りて知るべし。而して其の稱は文帝時代に發生せしもの、如し。隋書經籍志に、漢時曹參始薦<sub>二</sub>蓋公、能言<sub>二</sub>黄老、文帝宗<sub>レ</sub>之、自<sub>レ</sub>是相傳、道學衆矣と曰はゞ、文帝以前に道家の稱なきを知るべし。また道家の目的が無爲にして爲さざるなきに在りて、内は健羨を去り、聰明を緜け、人をして精神專一ならしめ、外は成勢なく、常形なく、能く萬物の情を究め、物の先と爲らず、物の後と爲らず、能く萬物の主たるは、老子の無爲を取りしものなり。且つ人所<sub>レ</sub>生者神也、所<sub>レ</sub>託者形也、神大用則竭、形大勞則敝、形神騷動、欲<sub>下</sub>與<sub>二</sub>天地<sub>一</sub>長久、非<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>聞也と曰ひ、また形神離則死、死者不可<sub>レ</sub>復生、離者不可<sub>レ</sub>復反、故聖人重<sub>レ</sub>之、由<sub>レ</sub>是觀<sub>レ</sub>之、神者生之本也、形者生之具也と曰ひしが如き、皆方士の所謂長生不死を希求するものなり。夫れ長生不死は燕齊海土の方士が秦の始皇以前より唱道せし所なりしを、漢初に黄老流行するに及び、老子の無爲を取りて自ら縁飾し、遂に道德經の道の字を取りて、